

一首の意は、思ふ人に逢はれぬのも、その人のつらいのも、皆我が身からのことで、自分のやうなる者は、とても先の氣に入る譯は無いに、その人の思つてゐるゝ知らせがましう、さてもく、合點のわるうを、解くる下紐なることよとなり。

(評)下紐の解くるは、人に戀ひらるゝ兆なる由は、戀一「思ふともこふとも逢はむものなれや云々」の條にいへり。しかも、類想の同型なり。彼は、一度も逢ひ見ざる趣、これは、逢ひ見しが他かれたる趣なるが差へるのみ。下紐の思ひ知らずといへる擬人、一ふしあり。二三のつゞきは、おだしからず。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

すがのたぐおん

つれなさを今はこひじと思へども心よわくもおつるなみだか

(釋)○涙か かは歎辭。

一首の意は、人のつれなさを思ひ知つて、今はもう戀ひ慕ひはすまいとたしなめども、ともすれば思ひ出して、さてもく、心弱くまわ、こぼるゝ涙なることよとなり。

(評)心に似ぬは涙なりけり、戀の眞諦、即ちこゝに存す。六帖の詠者不詳の歌に、戀ひしこはいはじと思ふにきのふけふ心よわくもおつる涙か

同想同型、いづれを先させむか、思ふに、或は、この歌の轉りて傳はれるものならむ。

初句、新撰萬葉に、つれなさをこあり。

題あらす

伊

勢

人知れず絶えなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはいはまし物を

(釋)一首の意は、二人の中が、世間の人に知られず、絶えてしまふであらうならば、絶ゆるはつらい事ながらも、せめて無い事ぞというて、浮名の立たぬやうになりともせうと思ふものを、やもう、世間の人も知つて居れば、さうもいはれねば、絶えたるうへに浮名が立つて、さてもつらい事かなとなり。

(評)當然の結果として生じたる奔女の苦悶、悽愴の感なき能はず。

二句、六帖に、やみなましかばどあり。

よみ人あらす

それをだに思ふ事とてわが宿をみきこないひそ人のきかくに

(釋)○思ふ事とて 思ふ事としての意。○きかくに 聞くになり。くの延言はかくなり。

一首の意は、今飽かれたるはつらい事であるが、そのうへに名が立つては、猶更つらい故、せめて名の立たぬやうにする、それをなりとも、私を思ふ事として、外の話の序にも、私の家を見たなど、決して云うて下さるな、事ありさうに、人が聞くによつてサとなり。

(評)満足すべからざる事に満足して、恩に着むと、哀を乞へるなり。宣長が、初二句を、人を深く思ふ時はその人の家をなりとも見たく思ふものなれどもといふ意に誤解して、部立のたがへるやうに論へるは、なかくなり。

○

あふ事のもはら絶えぬる時にこそ人の戀じきことも知りけれ

(釋)○もはら 専らなり。

一首の意は、これまで、絶えくながらも、逢ふことのありし間は、待つといふ楽しみもまじつて、戀しさも、さ程で無かつたが、今かう、一向に絶えてしまつて、逢はれぬ時節になつた時にサ、はじめて、人の、誠に戀しい事も思ひ知つたワイとなり。

(評)いひとほりたるまでなり。

○

わびはつる時さへ物のかなしきはいつこを志のぶ涙なるらむ

(釋)○志のぶ 慕ふ意。

一首の意は、かの人に見棄てられて、難儀しぬいたる時節にも、やはり忘れかねて、物悲しいのは、ごこを、かの人の取得として、戀しう思うて、流るゝ涙であるのであらうぞとなり。

(評)いつこを、しのぶと、涙を怪しめるは、即ち心を怪しめるなり。身を怪しめるなり。あなたもごかし。誠に愛着の念、その根深しといふべし。

後撰集に再出したるには「男の忘れ侍りければ」と詞書ありて、作者は伊勢なり。又、四五の句、新撰和歌には、いつれを志のぶ心とあり。

藤原興風

恨みても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして

(釋)一首の意は、恨んでも泣いても、この悲しさを、誰を相手にしていはうぞ、思ふ人は、最早絶えて、一向に逢ふことも無ければ、鏡へ映つて見ゆる自分の影で無くては、外に相手にして云はうやうが無いワイとあり。

(評)孤獨依るところなく、形影相吊す。この寂寥荒涼は、渾べて、人の無情に因縁す。下句、沈痛にして、嗟意永し。

以上三首、絶えて後、身をわびたるなり。

よみ人志らず

夕されば人なき床をうちほらび歎かむ爲こなれるわが身か

(釋)○夕されば 冬歌「夕されば衣手さむし云々」の條にいへり。

一首の意は、今は契も絶え果てて、来て寝る人もない床を、夕方になれば、以前の通り打拂うて、以前夕毎には人を待つとて、床の塵を拂うたる事を思ひ出しては歎かう爲に、生まれて来たる我が身あることかまあとあり。

(七四二)

(評)拙き運命をかこち、身をはかなみたる愚痴は、この没理想の誇張となり来る。不幸に愁に沈みては、苦勞する爲に、この世に生まれたるにやなど、よく人もいふ事なり。萬葉集十、
あすよりはわが玉床をうち拂ひ君といねずて獨かも寝む
を藍本として、更に勝れり。いづれも、婦人の作なるべし。

わたつみのわが身こす波立返り蟹のすむてふうらみつるかな

(釋)○わたつみのわが身こす波 我が身を超すわたつみの波といふことを、倒置していへり、○蟹のすむてふうらみつる 海士の住むてふ浦見つるに、恨みつるをかけたなり。

一首の意は、海の、人の身を打超すほどの大波が寄せて来て、海士の住む浦を見、浦を見しては、立返り／＼するやうに、わがこの身をさし越して、無い者にする人を、今更恨みても、その詮あき事ながら、又しても／＼恨みたる事よとなり。

(評)顯昭曰く、

我をおきて、先に人に逢ふを、わが身こす波こそへたるにや。末の松山(注をおきてあたし心なわがし)たば末の松山波もこまなむし

かこいふ人のあはれ、その心見えす、云々。
これ諒に然るべし。なほ、戀三「あふ事のなきにし寄る波なれば云々」の條を参照せよ。

あらを田をあらすき返し返しても人の心を見てこそやまめ

(釋)○あらを田を云々 荒れたる田を春すきかへす意なり。あらを田は荒小田なり。小は美稱、あらすき返しは、疎鋤返しなり。打聽に擧げたる或説に、小田は度々すき返し作る、初に鋤くをばあらすきとて、あら／＼と鋤くなりとあり。今俗に「アラクリ」といへり。○返しても 返してなり。返せども意にあらす。もは歎辭。

一首の意は、荒田をあら鋤き返すやうに、今一應立反つてまわ、人の心を、とくと見届けてサ、いよ／＼心が變つたといふことならば、あきらめて、戀ひ慕ふのも止めうツイとなり。

(評)この未練、この心長き、所謂「惚れた弱身」なるべし。初二句は、三句に、返してもといはむ序なり。結句、四音三音の組成なれば、調促りて、二句の長高なる序體にふさはず。六帖に「見てこそやまめ人の心を」とあるに従ふべくや。想ふに、下なる誹諧歌に、なかし、

雲はれぬあさ間の山のあさましや人の心を見てこそやまめ

とあるに紛ひて、下句を誤れるものならし。なほ、六帖、又は、童蒙抄なる、

伊勢の海のちひろたく繩くり返し見てこそやまめ人の心を

(七四三)

など、いづれも、その序詞を殊にするのみにて、全く同意なり。いづれか先に成れるものならむ。

初句、六帖に、あらし田をどあり、新しき壘田の意なり。景樹は、これを宜しとして、二句を新鋤き返すの意に解き、さて、新田は、何邊も打こなすべければ、打返しくの序に置きて力あるなりといへり。

ありそ海の濱のまさこと頼めしは忘るゝ事の數にぞありける

(釋)○ありそ海 荒磯海の義。○まさこと まは美稱、さことは砂の略。

一首の意は、海の濱の眞砂の數のやうに、讀んでも盡きぬ、數々の親切を思うて居るといひ立てて、自分を頼もしう思はせておいたる、その濱の眞砂の數は、案外にも、自分を忘るゝ事の多し、その數取でサあつたワイとなり。

(評)水火の對照、冷熱豹變の趣見えて、怨意深し。後撰集戀四、常磐にさたのめしことはまつほどの久しかるべき名にこそありけれども、この類想なり。

昔へより雲をさしてゆく雁のいや遠さかるわが身かなしも

(釋)○ゆく雁の 行く雁の如くなり。

一首の意は、昔邊から空をさして飛んで行く雁の、段々遠くなるやうに、段々と思ふ人にかけて離れて、契の絶えて行く自分の身は悲しいワイまわどあり。

(評)三句までの序は、萬葉集十、

秋風にやまごびこゆる雁がねのこる遠さかる雲がくるらし
を轉用したるなり。初句は、いや遠さかるの意をたしかにせむとて、その地點を示したるならめど、異竟小刀細工なり。久方のと、枕詞などを据えたらむ方、や、優りぬべきを。

ふぐれつゝもみづるよりも言の葉の心のあきにあふぞ佗しき

(釋)○心のあきに 他きに、秋をかけたなり。

一首の意は、時雨が降りくして、木の葉の色が變つてゆく秋は、わびしいものであるが、それよりもまなつて、親切に云うて下されたる言の葉の變る、人の心の他きといふ秋に逢ふのがサわびしいワイとあり。

(評)言の葉の混喩、心のあきのいひかけ、新撰万葉に、

言の葉をたのむべしやはあきくればいづれか色の變らざりける
とあるに似たり。さては、上ある、

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君がこゝろにあきや來ぬらむ
今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり
の二首を錯綜したらむが如し。各その條に論へるを參看せよ。

(七四六)

あき風のふきこふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

(釋) ○ふきこふき 吹きに吹くと同じ。

一首の意は、秋風の吹きに吹いたる武藏野は、流石に廣い野ながら、總体に皆、草の葉色が變つたワイといふ意にて、されば、飽きといふ秋風が、人の心に強く吹く時には、嘗て云はれたる言の葉の變るも、仕方が無いワイといふが、その餘意なり。

(評) 顯昭は、この歌意を釋して、武藏野といひて、「一もどゆるに」の心あるなりといへり。これは、紫の一本ゆるに武藏野の草は皆からあはれとぞ見る

の意に據れりといへるにて、景樹も同心したれど、非なり。思ふに、武藏野といひ、なべてといへるに拘泥して、この説をなせるならむ。これは、流石に廣き武藏野の草葉も、秋風に色の變らぬは、一つもなしといひ立てて、されば、さばかり頼めたる君の言の葉も、猶その定めには洩れ給はざりけりと、暗に詆りたるが手際なるなり。諷諭の作、おのづから、含蓄あり。四句、六帖に、なべて草木のさあり、

小町

あき風にあふたのみこそ悲しけれわがみ空しくありぬと思へば

(釋) ○たのみ 田の實に、頼みをかく。田の實は稻をいふ。○わがみ 身に、實をかけたなり。

一首の意は、秋の大風に遇ふ田の稻はサ、折角頼みにして置いたるわが實が入らずにまよふと思へば、情けないワイ、それと同じやうに、人の心の秋風にあうて、我が身の頼みが、皆むだになつてまよふたと思へばサ、悲しいワイとなり。

(評) 例の口吻、この人には免れ難き癖なるべし。

平貞文

あき風のふきうらへがす葛の葉のうらみても猶うらめしき哉

(釋) ○葛の葉の 葛はその葉廣ければ、風に翻りがちにて、裏を見するより、葛の葉の裏見とつたけ、さて、恨みをかけたなり。

一首の意は、思ふ人が、我を飽きて、裏反つたる恨は、秋風が吹き反す葛の葉の、裏を見るといふやうに、恨を云うてもく、やはり、恨が晴れぬ位、さてもく恨めしいことよとなり。

(評) 初二句は、人の我を飽きて、契を渝へたる譬喩ながら、なほ葛の葉のといひ續けて、うらみてといはむ序をかねたり。万葉集十二、

(七四七)

水莖の岡の葛葉をふきかへしおもしろ子らが見えぬ頃かも
の序も、同じ取材あるが、彼は、葛の葉の表面の隠るゝ方より見たるを、是は、その裏面のあらるゝ方より見て、描寫を順逆にまたり。作者が折角の新案、後人、猥に踏襲して、陳腐なしつるぞ、これも恨めしき事の一つならむ。うらの語の三疊、わざどの巧なるべし。
初二句、六帖に、秋風に吹反へさるゝとあるを宜しとすと、景樹はいへり。げに、この方、一意到底の序体なれば、おのづから、たけ高く聞ゆべし。さばれ、作者の風體の多くより論ずれば、猶本文によるべきか。

よみ人志らず

あきといへばよそにぞ聞きしあだ人の我をふるせる名にこそありけれ

(釋)あだ人 浮氣ある人なり。○我をふるせる 我を見棄てて、舊人となしたるをいふ。

一首の意は、これまでは、あきといへば、季節の名と心得て、餘所事のやうにサ、聞いて居つたツイ、處が、餘所事では無い、移り氣なる人の、自分を見棄てて、舊いものにまたる名、即ち自分を飽いたといふ名でサあつたツイとなり。

(評)時節の秋にあひ、又も人の飽きにあへるより、取合せて巧みたるならむ。以上五首、秋に飽きをよせて、恨みたる戀なり。かやうに秀句を基礎としたる構想は、詩としての本旨を誤れり。屢見る時は睡棄すべく思はるゝも、蓋しこの故ならむ。

初句、打聽本に、秋てへばとあり。

○

わすらるゝ身をうち橋の中絶えて人も通はぬ年ぞへにける

又は、こなたかなたに人も通はず

(釋)○身をうち橋の 身を愛といふに、宇治橋をかけたなり。宇治橋のことは、戀四「さむしろに衣片敷きこよひもや云々」の條に出でたり。

一首の意は、人に忘れて見棄てらるゝわが身は、愛いものであるが、その愛いといふ名の附いたる宇治橋の中絶えて、人の通はぬやうに、中絶して使の人さへも通はぬ年がサ、何返も經つたツイとあり。

(評)まこと、この歌詠める頃は、宇治橋の中絶えたるまゝに、年久しく經にけるなるべし。大化二年に、道昭和尙の、始めて架設せしより、延喜の頃までは、二百三十餘年を経たり。この間、必ず幾多の興廢あるべきなり。紀に所見なしとて、中絶えてを、橋の縁語に設けいへる事とせる前人の説は、太だ妥當ならず。

新撰和歌も、結句は、左註と同じ。

坂上これのり

あふ事をながらの橋のながらへてこひ渡るまに年ぞへにける

(七五〇)

(釋)○ながらの橋 攝津國西生郡にありて、弘仁三年に、長柄川に架けたりし橋なり。長柄川は、即ち淀川なり。

一首の意は、長柄の橋の名のやうに、生き長らへて、かの人に逢ふ事を、ひたすら戀ひ望んで居るうちに、はや何年もサ、意外に經つたワイとなり。

(評)假初の夜離と思ひて待ち戀ひけるうちに、年月の經たるを歎けるなり。長柄の橋のは、三句に、同音を反復せむ爲の序にて、こひ渡るは橋の縁語もていへるなり。初句は、直に四句へかけて心得べし。諸註逢ふ事を無といふに、長柄の橋をかけたるとせるは、強言にちかし。

とものり

うきながらけぬる沫もなりなむながれてとだに頼まれぬ身は

(釋)○うき 浮きに、憂きをかけたなり。○けぬる けは消えの約。○ながれて 流れてに、生存への約なるながれてをかけたなり。

一首の意は、せめては長らへての末でなりとも添はれうといふ頼さへ無しこの身は、いつその事、水に浮きながら消えてしまふ沫もなつてほしいワイ、憂き身ながらに死んでしまひたいと思ふからサとなり。

(評)ながれてより、水の沫を聯想して、憂き身のまゝに死ぬるを、浮きながら消ぬると轉義し、まかも、憂きをいひかけたり。失戀の極、死を冀ふは、既に思索を脱して、情の高潮に達したるものなれば、狂熱の横溢して、語々活躍する所あるにあらずば、見るに足らじ。辭様巧緻と雖も、何をかせむ。

六帖に、二句、きえせぬ沫と、結句、頼まれなくにとあり。又、家集には、二句、消えぬる沫とあり。

○

ながれては妹背の山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

(釋)○ながれ 流れて、長へをかけたなり。○妹背の山 紀伊國那賀郡にあり。萬葉集に、「せの山にたゞに向へる妹の山」「木の川のべの妹とせの山」並びをるかも妹と背の山「木の國の妹背の山に」など、數多見えたり。宣長曰く、妹山は、兄の山あるにつきて、只設けていへる名にて、まかいふ山あるにあらず、背の山のこと、たしかに詠めれど、妹山のごとは、さして詠める歌見えず、今も背山村あれど、妹山は紛らはしくて、定かならずといへり。然れども、萬葉に、「木道にこそ妹山ありといへ」と詠める、又は、上なる例どもを考へ合するに、全然詞のあやとのみもいひ難し。又、眞淵は「妹山は大和、勢山は紀の國にありて云々」といへり。これも、萬葉に「木の國の妹背の山」とあれば、従ふべからず。古くは、すべて、兄妹の間にも、夫婦の間にも、男を背、女をいもといへり。

一首の意は、川も流れては、妹山背山の中へ落つる吉野川と隔つるやうに、すべて、人間の

(七五一)

男女の中も、長らへて年久しうなれば、何時までも、元のやうに睦じくは無くて、自然隔が出来るも、その筈のことか、よしまよ、これが世の中の有様であるワイとなり。

(評) されば、心變れる人を恨むも、よき程にして置かむの餘意あり。その怨みて怒らず、從容迫らざる、殆ど大人君子の襟度に類す。要するに、比興を以て立意の骨子とし、吉野の川のよしやを同音を疊みて、世の中を體言にいひ捨てたる風姿、これ、無限の含蓄餘韻あらしむる所以なり。渾雅莊重、格調、おのつから別裁に出づ。字句に、また一の弛漫なるなく、聲調流麗なり。四句、新撰和歌に、吉野の瀧のとあり。

古今和歌集卷第十六

哀傷歌

いもうとのみまかりける時よめる

小野のたかむら

泣く涙雨とふらなむわたり河水まさりなば歸りくるがに

(釋) 哀傷歌は、萬葉集にはゆる挽歌なり。悼亡の作を収む。○いもうとの 小野氏系圖に據れば、箕が異腹の妹なり。○わたり河 三途川の事。三途とは、火途及途血途にて、即ち地獄餓鬼畜生の三惡趣あり。この惡趣を三大河に喩へていふこと、金光明經に見ゆ。偽經十王經には、死出の山の先なる大河にて、河中に三所の瀨ありといへり。さて、三瀨川とも詠めり。○がに 助辭なり。爲にと譯す。

一首の意は、このわが泣く涙よ、いつそ溢るゝならば、雨のやうに降つてもらひたいワイ、それで、冥土の三途河に、水が増るであるならば、渡りかけたる妹も、え渡らずに、再びこの世に立歸つてくるであらう爲にサとなり。

(評) 一朝の暴雨に、動もすれば、川止の悲劇を演出せし時代は、越すに越されぬ大井川と詠ひき。

箕は、尋常一様の執務者にあらず、屢外官に補任し、夙に行旅の艱苦を、つぶさに嘗めたりき。即ちこを、當時弘通せし佛教思想の三途河に湊合して、涙の雨の川止め、亡者の渡りあへずして、立歸り來むことを熱望せり。これらの構想、到底奈良時代のものならず。また、明治時代以後のものならず。宛たる當代の寫真よ。殊に往時は、異腹の兄妹の相婚を禁せられざりしかば、箕、いたくこの妹君に懸想し、

中に行く吉野の川のあせなむ妹せの山を越えて見るべく

と詠めること、玉葉集に見えたり。骨肉の愛に加ふるに、特種の戀愛を以てす。血湧き、肉溶け、情熱火の如く燃えしならむを、端なく、香奩人去りて、玉堂の空しきに遭ふ。悲みて猶悲み、傷みて又傷む。泣く涙の滂沱たりしもうべ。蘇み返らむ事を切望せしもうべ。さては、徒に巧語を弄して、眞情を失へるにあらざるを知れ。又、雨をまで聯想せるに、涕涙の、千行を拭拂すれば、更に万行なる狀見つべく、涙の溢るゝを降ると云へるは、雨の縁語もて修飾せるなり。

さきのおほきおほいまうち君を、白川のあたりにおくりける夜、

素性法師

血の涙落ちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそありけれ

(釋) さきのおほきおほいまうち君 太政大臣藤原良房の事ある由は、上にいへり。貞觀十四年九月二日薨す、山城國愛宕郡、後の愛宕の墓と申すが、この墓所にて、即ち白河なり。爲家抄には、今の法勝寺なりと見ゆ。大鏡にも、「白河にをさめ奉る日」とあり。おくりける夜は、葬送の夜なり。○血の涙 涙竭きては、血を流す本文あり。韓非子に「卞和抱其玉哭楚山下三日三夜、泣淚盡、繼之以血」。○白川 志賀山越の傍に、白川の瀧あり。この水の末流なり。

一首の意は、この薨去の悲しさを泣く、拙僧の血の涙が、落ちて瀧つて流るゝ事よ、さては、この川水が、赤くなるべければ、この川の名を白河といふのは、薨去せられし良房公御在世の時かぎりの名でサあつたワイとなり。

(評) 立意誇張に過ぎて、殆ど妄想に類せり。紅涙、白川の色相上の照對は、やゝ奇警に似たれど、畢竟これ文字の洒落、平凡の作たるを免れ難くや。但、この皮想の色彩は、燦爛として、當時の人士の素人眼を眩せしめし趣、大鏡に見えたり。諸註、かくては、最早白川にあらずして赤川ありと、餘意をいひ添へたるは、何の要もなき道理をいひ詰めたるものにて、蛇足なり。

ほりかはのおほきおほいまうち君みまかりにける時に、ふかくさ山にをさめける後によみける、

僧都勝延

うつせみはからを見つゝも慰めつ深草の山けぶりだに立て

(釋)ほりかはの云々 藤原基經、京の堀河に第ありて、堀河の太政大臣と稱す。寛平三年正月十三日薨す。深草山は、山城國紀伊郡深草村にあり。稻荷山の尾續きの山なり。榮華物語には、木幡を、この公の墓所としたり。上田秋成の考に、木幡は、深草山のうしろにて、連絡されたれば、深草山にと云へるが、即ち木幡山にやとあれど、餘に距離遠きが如し。何はまかれ、歌にも「深草の山」とあれば、この集の方たしかなからむ。○うつせみ 空蟬にて、蟬の蛻をいふ。但こゝは、單に蟬のことに用ゐたり。この語、古來現し身の轉じたるやうにいへど、全然別語と見む方、穩しかりぬべくや。○から 蛻ヌケガサ奇り。

一首の意は、蟬は名さへはかなげなる物なれど、其の遺したる蛻を見い／＼して、氣を慰めたワイ、然るに、基經公は、火葬に附して、その遺骸さへもとゞめぬが餘りなれば、せめて、その火葬の烟なりとも、残りて立てよ、この深草の山に、さらば、公の形見と思つて慰まうはさとなり。

(評)今は早、遺骸は勿論、茶毘の烟さへ消滅し去りて、形見としては、一物をもとゞめざるに感じ、形見の烟につけて、追慕の情を歌へるなり。上句は、下句の爲に設けたる比興の句ながら、蟬に蛻を見て慰む事、甚だその謂れなし。

六帖、又遍昭集に、下句、けふりだに立て深草の山とありて、四五の句轉倒せり。眞淵は、遍照集を杜撰として、本文を執りたれど、其の然る所以を説明せず。景樹、及び八田知紀は、こなたに左袒し、且知紀は、もとのまゝにては、理のみ聞えて、歎聲の響なしとまで論へり。景樹、

知紀等がいはいゆる、まらべとは、如何なるものあるか知らねど、語碎け、節促れる句を以て結束せる本文の方、却りて、この歌姿によさはしき自然の調なるべく覺ゆ。體言止めに詠め捨るつば、高渾雄壯なる歌體を要する時の業にこそ。

かむつけの峯雄

深草の野べの櫻しこゝろあらばこそしはかりは墨染に咲け

(釋)これも同時の詠なり。○深草の野べ 前に云へる、深草山の裾野をいふ。○櫻し しは強辭、漢詩に於ける只、或は止と同意味。○こゝろ 同情あり。○墨染 黒色なり。

一首の意は、總べて、草木は無情の物ながら、此度、基經公を葬送したる、この深草の野原の櫻よ、汝に思ひ遣りがあるならば、何等はともあれ、今年ばかりは、喪服の色の墨染に咲けよとなり。

(評)當時の喪服は、椽、鈍色など、皆、薄黒き色なりしなり。さて、花の頃は、公の忌日より、未だ五十日にも満たざる程なれば、御墓に詣づるかぎり、我れも人も、常の衣とは引換へて、墨染の袖なるに、墓邊の櫻の、例の如くに、花やかに咲き出でたらむは、心無しといはざるべけむや。故に、この悲みに同情を有たば、本來の色相を易へて、喪服の色に咲けと云へる、この没理想の要求は、感情の奔馳するまゝに、常識の範圍を逸したる結果にして、是れ即ち、詩境なり。人麻呂が「靡けこの山」といひ、業平が「峯も平になりなむ」といへる、亦、これに外

ならず。况や、作者は、この公の家人と思はる、由あれば、悲嘆の極、まか思ひ寄りけむも理りなり。されば、流石、無心の櫻も、この歌に感じて、黒色の花を着けしかば、今に、藤の森の二町ばかり南の地に、墨染の名稱を存せりとぞ。信僞は、深く辨するまでもなければ、この歌の神來の興は、げに、草木も感ずべくこそ。

六帖に、二句、櫻もとあり。かくては、意難雜に亘り、調緩漫に流れて、却て妙ならず。こは一切、他事をさしおきて、只管、櫻のうへにのみ就きて、一團に彼れを無情ありとし、その同情あらむことを希へる單調の方、思ひ入りたる情の、強く聞ゆるにや。故に、景樹が、櫻もとあるを執したる説は采らず。

藤原敏行朝臣のみまかりける時に、詠みて、かの家に遣はしける。

紀 友則

寐ても見ゆ寐でも見えけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける

(釋)藤原敏行朝臣のみまかりける時に云々 敏行は、延喜七年卒と、拾芥抄にあり。さては、同五年撰進のこの集に、この歌の載らむ事いかあらむ。或は、後に、加へたるものか。〇うつせみ 例の現し身の意なり。

一首の意は、此度の御主人の御不幸に就いて思つて見れば、夢といふものは、睡つて居ても見

え、寐ずに居ても見ゆるワイ、さすれば、總体、この人間の世がサ、はじめから夢であつたワイ、あ、敏行殿の事は、寐ずに見たる夢のやうに存じますとなり。

(評)身世を夢と観すること、莊子に、

夢飲酒者、旦而哭泣、夢哭泣者、旦而田獵、方其夢也、不知其夢也、夢之中又占其夢焉、覺後而知其夢也、且有覺而後知此其大夢也、

丘也、與汝皆夢也。予謂汝夢亦夢也、

といひ、維摩經に、

是身如夢爲虛妄見、

又、金剛般若經に、

一切有爲法如夢幻泡影、

など云へる、虛無、或は、無常説に胚胎せり、この觀念、早く、奈良時代より感染して、延喜の頃は、社會一般の通想となりたれば、別に、作者の新案にもあらず。只、二句、や、奇警の語か、これ、三句以下に、うつせみの世は夢なる斷案を下さむ伏案なり。故に、初句は、主要の句にはあらずして、一往の道理のまゝにいひ添へ、對句を作りて、姿致を取れるのみ。即ち、春上「春日野はけふはな焼きて」の歌の下句、つまも籠れりといひて、更に我れも籠れりと歌ひ添へたると、同一の漸層法なるを知るべし。委しくは、同歌の條に説けるを参照せよ。

二句、一本、見てけりとあるはわろし。六帖、家集、顯本、みな本文の如し。

あひまれりける人の身まかりにければ

紀貫之

夢こそいふべかりけれ世の中にうつゝあるものと思ひける哉

(釋) うつゝ、現の義にて、實在なり。

一首の意は、この度の事に就いて、よく／＼思ひまはして見れば、世の中の事は、總体夢とサ、いふべきであつたワイ、然るを、今までは、世の中に、現實といふことのある物と思つて居た事よとあり。

(評) 昨日ありし人、今日は既に、他界の人となりぬ。これ、無常の甚しき實例ならずや。これ即ち夢といふべきならずや。今日までは、何しに現ある物と思ひて、等閑にのみ過ぎ來けむ。昨非今更に悔しまる。かく悔恨の情を甚しくいへるは、果敢なきの、夢といふべき所以を強めたるなり。

三句、六帖に、世の中をとあり。拾遺集に再出したるにも、まかありて、この方宜しきは勿論あれど、恐らくは、世の中にとあるが、この集の正文ならじ。さるは、勅選集に重出の歌は、稀には不用意の杜撰もあれど、一字二字、傳誦の相違あるが爲に、わざと、采録せしも尠からずと見ゆれば、これも、その例の一なるべし。

あひまれりける人の身まかりにける時によめる

壬生忠岑

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現は見す

(釋) 詞書、家集には「世の中常ならず心愛かりし頃」とあり。

一首の意は、睡り居るそのうちに見る夢ばかりを、夢と云はう事か、そればかりを夢とは云ひはすまい、何故といふに、そのみならず、總体、この無常なる果敢なき世の中をも、現實の事とは思はず、皆、夢と思ふワイとなり。

(評) 上なる友則の歌の初二句を敷衍したるやうなる歌なり。この三首、皆、同想同體の歌にして、友則や、勝れるに似たり。されど、今より評すれば、ひとしく、陳腐の謗は免れ難からむ。

三句、六帖に、夢といふとあり。猶、本文の方よかるべし。

あねの身まかりける時によめる

瀬をせけば淵となりてもよごみけり別をとむる志がらみぞなき

(釋) 一首の意は、暫くも止まる事なしに、水の流れて行く川の淺瀬を、柵などを掛けて止むれば、淵になりてまあ、水が暫くは止まつたワイ、然るに、死に行く人の別を止むる柵がサないワイとあり。

(評) 上句は比興にして、即ち逝く水を借り來りて、それよりも猶、果敢なき悲しきものは、死別奇

る事を知了せしむ。これ、詩家の慣手段なり。別を止むる由ぞなきといふべきを、淵瀬の縁に寄せてし、がらみぞなきと轉義したり。又、三句まで一氣にいひおろして詠め捨てたる、然るにといふ接續詞を用ゐずして、直に別を止むるといひ起せる、この緩急相極す節奏は、今の表情に、最も適切なる調を得たりとやいふべき。萬葉集卷二に、明日香皇女を悼みて、人丸が詠める歌、

(七六二)

あすか川去がらみかけてせかませば流るゝ水ものごにかあらし

に胚胎せるものゝ如し。人丸のは婉曲にして、調も藤原宮時代の作としてはとにかく、今の眼より評すれば舒暢なるを、これは、意や、露骨に近く、調はた、急促なり。蓋し、哀傷悼亡の作は、あながちに、露骨を厭はず、白樂天が、元稹を悼みて、「龍門原上土、埋骨不埋名」と作れるを、却りて、手柄のやうにも、世にいはれたれば、まづ、意調相應の完作なるべし。家集の詞書には、「相知りたる人の、すまひの使に、遠き國へ下るごと」とあり。一時の別を惜む作としては、餘に、哀傷に過ぐ。無論、この集の詞書に據るべきなり。又、二句、家集には、淵となりつゝとあり。これもわるし。ても、語調の深味あるに及かず。

藤原忠房が昔あひ知りて侍りける人のみまかりける時に、
ごぶらひに遣はすとてよめる。

閑院

さきたたぬ悔の八千たび悲しきは流るゝ水のかへりこぬかり

(釋)昔あひしりて侍りける人 忠房が、以前、夫婦の語らひせし人なり。○さきたたぬ悔の 失せにし人に先立たぬ悔しみがの意。○八千たび 八千は多數を意味するのみ。幾度といはむに同じ。○水の 水の如くの意なり。

一首の意は、先立たずして、あとに取残されたる悔しさが、繰り返しくて悲しいのは、何故かといふに、流れて逝く水のやうに、死に行きし人が、二度と、跡へ戻つて來ぬのであるツイとなり。

(評)忠房の許に、吊意をいひ入れむとて、この歌を贈れるされば、即ち、貴方の御心中は、かやうの御愁傷と御察し申すとの餘意を含めたるなり。かく、當事者の胸臆を付度して、悲傷の意を叙するは、深く、同情をその人に寄せたる所以にして、吊慰の意、おのづから、その中にあり。これを、諸註ともに、作者自身が、この死者に先立たぬ事を悔めるやうに説き做せるは、何事ぞ。不當も亦甚し。又、景樹が、

こは、「後悔不立前、流水不還源」と云へる本文に付いて詠めるにて、今は、所詮先立たぬ悔のみ、千たび百たび打反して悲しきは、その詮なき事、喩へば、流るゝ水の、いかにすとも、其の本に還り來ぬが如しとなり。もと、其の心離れたる古語の二句を取合せて、まひて、一首の趣を立てたる歌なれば、甚だ聞え難し。

(七六三)

といへり。この準據は、顯昭も既に云へる事あれど、あながちに拘泥するにも及ばじ。又、その解釋も、先だたぬ悔を八千九百悲しむはとあらばともかく、悲しきはに、適切ならず。

この差別たしかならざるは、精しからずとやいはむ。諸本いづれも、作者の名、閑院とのみありて、前後の書式に違へる、疑ふべし。古今の目録には閑院女五宮とあり。女王なる故に、まか書けるか。猶考ふるに、この女王は、天武帝五世の王にして、清和帝の貞觀元年十月に、八十有餘にして薨せられしに、藤原忠房は、貫之の朋友にして、宇多帝の寛平五年に、始めて、播磨少掾となり、醍醐帝の御代を盛りとて、延長六年に卒したりき。いたく、官途沈淪の人と見て、假に、寛平五年を四十代と定めて逆算すれば、女王の薨去せられし貞觀元年には、纔に六歳なるをや。さては、詞書の趣に打合はず。か、れば、作者は、閑院の女王にはあらざる事決し。又、閑院の稱ある人、是れかれあれど、皆、忠房の時代に打合はず。依りて思ふに、この歌は、前首と同じく、忠岑の作か。然らずんば、詠み人まらすの作ならむ。

紀友則が身まかりにける時よめる

つらゆき

あす知らぬわが身とおもへどくれぬまのけふは人こそ悲しかりけれ

(釋)一首の意は、時の間もあてにならぬ世の習にて、今日はいかうして居ても、明日は又、さうなる

事やら知らぬ我が身ぞと思ひはすれど、また暮れて明日にならぬ間の今日のうちは、わが身のあるまゝに、死んだ人がサ、悲しう思はれたワイとなり。

(評)例の佛教思想の歌あり。昨日までは、かゝらむとは思ひがけざりし友則の、今日は早、隔世の人となりしにつけて、わが、明日の命も計り難き有待の身なるを觀す。然れども、さし當りては、猶、人の上の悲まるゝは、これ、意智の二者が、感情を抑制しあへざる結果にして、即ち、友則の死を悼む友情の、一方ならぬ能見はれ、覺えず、一掬同情の涙を墮さしむ。命あるうちには、いふべきを、暮れぬまの今日は、と轉義して、上のあすとあるに對照せしめ、又、わがと人とを對照せしめたる、措辭工にして緻。拾遺集、及び、六帖、家集等に、二句、命なれどもとあり。又、結句、家集には、あはれなりけれとあり。

たゞみね

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しき物を

(釋)○時しもあれ 時しもこそあれのこそを省けるなり。○ある 生存の意。

一首の意は、一体、物には時節がサあるワイ、それに何ぞや、取分けて、秋の時分に、人の死別すべき事であらうか、いや死別すべき事では無い、秋はたゞさへ物悲しい時節とて、生きて居る人を見るにさへ、戀しう思はるゝ物をサ、死別に逢うては、悲しさに堪へらるゝものでは無

(七六五)

(七六四)

いワイとなり。

(評) 秋を悲むことは、文選にも、白氏文集にも見え、わが國人も、夙くよりまか思ひたりけむ。剩へ、死別の悲劇を添へたる、慘に過ぐるものあるを啣てるは、

紛々落葉那堪秋色之摧、渺々晨星竟逐流光而逝、

の儻なり。機嫌をえらばざる死別に對して、如何なる無勘辨ぞ、秋はこれ、その時ならずと喝道せるは、既に理趣を脱して、詩境に入れるものなり。

六帖に「時しまれ秋やは人に別るべきさは夜寒になれる頃しも」とあるは、この下句の、他のご紛れて、一つになりたるものならむ。

母がおもひにてよめる

凡河内躬恒

神無月時雨にぬるゝもみぢ葉はたゞわび人のたもごなりけり

(釋) 母がおもひ 喪を、古は思と云へり。○わび人 難儀に逢へる人をいふ。

一首の意は、この十月の時雨に濡るゝ紅葉の葉は、只もう、母親に離れて、難儀の目を見て泣いて居る者の袖であつたワイ、あの赤くて濡れて居る所がサとなり。

(評) 例の血涙の故事を襲へるにて、涙の爲に濡れ渡りて、袂は紅色に變じたりと誇張して、時雨の紅葉に混喩したり。浮誇、實に遠かれるを憾とす。後撰集秋下、

から衣たつ田の山のもみぢ葉は物おもふ人のたもごなりけり

も、全くこの等類なり。

父がおもひにてよめる

たゞみね

藤ころもはつるゝ糸はわび人のなみたの玉の緒とぞなりぬる

(釋) ○藤ころも 喪服をいふ。藤の纖維を以て織りたる疎布にて、賤者の服とし、又、貴人も、喪中には鮮美の衣を憚るより、これを喪服としたりき。後には、物柄の如何に拘らず、喪服の稱となれり。○はつるゝ糸 解るゝ糸なり。藤布は、箴の疎き、よみの間遠なる物なれば、その糸解れ易し。

一首の意は、今喪服に着て居る、この藤衣のはつるゝ糸は、父親に別れて、難儀して居る者の悲しさにこぼす涙の玉を、珠數繁きにする緒とサなつたワイとなり。

(評) 藤衣の糸のはつれに、だまゝ、涙のこぼれかゝれるを見て詠めるにや。夙く涙を玉と觀に來りたれば、糸には、貫くといふ聯想の起るは、この時代に當然の慣習なりき。この類想、枚舉に違わらず。織巧。

三句、拾遺集哀傷部に「服ぬぎ侍るとて」と詞書して、詠人不知にて、再出したるにも、貫之集にも、君こふるとあり。又、拾遺集には、結句、緒とやなるらむとあり。

おもひに侍りける年の秋山寺へまかりける道にてよめる

つらゆき

(七六七)

朝露のおく手の山田かりそめにうき世の中をおもひけるかな

(七六八)

(釋)○朝露のおく手の山田 朝露の置くに、遅手をかけたり。遅手の山田は、晚獲の稻を植ゑたる山縣の田をいふ。○かりそめに 苟且になり。山田を刈るにいひかけたり。

一首の意は、あの朝露の置く、遅手の山田の稻を刈るといふやうに、假初に只うかくと、この憂ひ世の中を、さまでもと思はず、今までは思つて居た事よとなり。

(評)この思に中りてこそ、身に去みて、憂き世の中といふことを悟りたれと云へる無常觀なり。上句の序は、山寺へ墓參の途上に於ける實景を應用したり。初二句のいひかけ、家集に、「朝露のおく手の稻はといふもありて、作者の常套と見ゆ。二句、一本に、おくての稻葉とある、あしくもあらねど、強ひていへば、葉の字餘り物なり。又、初句、六帖に、白露のこあり。

おもひに侍りける人をとぶらひにまかりてよめる

たゞみね

墨染の君がたもこは雲なれやたえずなみだの雨とのみ降る

(釋)とぶらひ 訪問なり。見舞なり。

一首の意は、貴方の着て御出なさるゝ墨染の黒い衣の袖は、雨を降らす雲であればかして、絶えず、涙が雨のやうに、ひたすら降るワイとなり。

(評)涙を雨に比喩し、その縁にて、こはるゝことを降ると轉義し、さて、雨雲と喪服の黒色とを聯想して、袂を雲と假喩したり。

拾遺 哀傷部に、詠人不知「墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨のたえず降るらむ」とあるは、この詠れるものならむ。

女のおやの思にて、山寺に侍りけるを、ある人のとぶらひつ

かはせりければ、かへり事によめる、

よみ人志らす

あしひきの山へに今はすみ染のころもの袖のひる時もなし

(釋)女のおやの云々 女は妻なり。この詠者が、妻の親の喪に中りて、山寺に籠り居たるを、或人の、使を以て見舞ひくれば、返事に詠めりとなり。○今はすみ染の衣 今は住むといふに、墨染の衣をかけたなり、住み初むとまでいへるにあらず。墨染の衣は、例の喪服なり。

一首の意は、私は御聞及びの通り、かやうの山邊に、もうはや住み付いて、亡人の思に泣き暮して、服の墨染の衣の袖の乾く時も無いのでありますワイとなり。

(評)近況報告的の作に近く、平凡を免れ難くや。

諒闇の年池のほとりの花を見てよめる

(七六九)

篁朝臣

(七七〇)

水の面にあづく花のいろさやかにも君がみ影のおもほゆる哉

(釋) 諒闇は、履中紀に、ミモノオモヒと訓せり。天子崩御ありて、國中の上下、悉く喪に居る稱なり。わが古制には、十三が月間とぞ。○まづく、沈み漬くの義。○さやか、鮮明、明亮などいふ意。○み影、御面影なり。

一首の意は、あの池の水の面に漬つて居る花の色の、いかにも鮮やかなるやうに、あざやかにまづくど、崩御あらせられし先帝の御面影が、思ひ浮べらるゝ事よとあり。

(評) 初二句は、さやかにもといはむ序なり。これを、めでたき花の色を、龍顔に思ひ擬へたりとするは、整なるべし。諸註皆、嘉祥三年三月廿一日に崩御せられし仁明帝の諒闇中としたり。景樹も、これに従ひて、猶曰く、詞書に、「諒闇の年」と緩びたるを見れば、必ず櫻の時とも思はれず、この頃、櫻は櫻とありて、たゞ花とのみあるは、諸木の花なり云々といへり。さては、あながち仁明帝の諒闇にも限らざるべきか。事情を揣摩するに、卻て承和七年三月に崩御ありし淳和上皇の諒闇や打合ひたらむ。時に、篁流されて隠岐にあり。その四月に召し還されて、後木位に復されき。始めて、再び西院の御庭を立馴らしけむも、寵遇あらせられし上皇は、既にましまさず、空しく池邊の花木の榮ゆるを見て、この御池に御遊かごせさせ給ひし折の御面影を偲びまつれるならむ。されば、序詞は、當前の景物にて、景樹が、無心の序と解したるは、

非あらむ。

深草のみかごの御國忌の日よめる

文屋やすひで

草深きかすみの谷に影隠して日くれし今日にやはあらぬ

(釋) 深草のみかごは、仁明帝を申す。山城國紀伊郡深草陵に葬め奉りければなり。御國忌は、ミコキと訓む。天皇崩御の御忌日をいふ。御忌日は、嘉祥二年三月二十一日なり。御年四十一。

一首の意は、盛に照る日が、深き霞に隠れて暗くなりたるやうに、未だ御盛の御年にして、俄に崩御遊ばされ、草の深い深草山の霞の谷へ葬り奉つた其の日は、丁度去年の今日では無いか、いや今日ではあるワイとあり。

(評) 悲みに取紛れて、月日の経つをも覚えざりし間に、早くも御一周忌の今日に逢へるを驚嘆したるなり。蓋し、この日に諒闇は果てて、皆人、常の態に復する時なれば、特に感慨の深かるなり。草深き霞の谷といへるに、折ふし三月にて、霞の深く立てる深草山を暗喩したり。日を天子に喩ふことは、古來の常套なるも、てる日のくれしといひて、未だ寶算の御盛に崩れ給へ由をも思はせたる、巧緻といふべし。例のこの作者の口吻。

深草のみかごの御時に、藏人の頭にて、よるひるなれ仕うまつりけるを、諒闇になりければ、更に世にもまじらずして、

(七七二)

比叡の山にのぼりて、かしらおろしてけり、その又の年、みな人御ぶくぬぎて、あるはかうぶりたまはりなど、よろこびけるを聞きてよめる、

僧正遍照

みな人は花のころもになりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

(釋)藏人頭は、藏人所の長官あり。藏人所は、嵯峨帝の朝に、始めて置かれ、類聚國史に「弘仁元年三月十日、始置藏人所、令侍殿上、掌機密文書及諸訴」とあり。比叡の山にのぼり云々は、比叡山に上り、延暦寺にして剃髪せしをいふ。御ぶくぬぎては、諒闇の間の喪服を脱ぐをいふ。かうぶりたまはりは、位階を賜はるをいふ。○苔の袂 蘿薜の衣なり。隠者の服をいふ。故に、僧衣に通はせ用ゐる。

一首の意は、世間の人は、皆もはや、御服をぬぎ換へて、花やかなる衣になつてまゐつたワオ、ひとり自分は、花の衣ごころか、未だに涙を流して泣いてのみ居れば、せめて、この涙に濡れたる苔の衣の袖よ、乾きなりとも来て呉れよとあり。

(評)藏人の頭は、殿上の貫首として、威勢並び無かりき。枕草子に、めでたき物の中に、藏人をいふに「うへの、近く仕はせ給ふさまなど、見るには嫉くこそ覺ゆれ」と見えたり。今の大臣に對する秘書官の如き關係なれば、天子の親昵を旨とするが故に、一旦崩御に際するや、大概辭任交代する定めなりき。特に作者良岑宗貞が、藏人頭として、仁明帝の優渥なる寵遇を得たり

し趣は、大和物語などにも見えたれば、げに諒闇にあひては、世にも人にも交らはしと思ひなりけむかし。况や、好色者の名を取りしほどの、情に脆き性質は、この大打撃を受けては、暫時も冷静なる能はず、三十五歳といふ年の盛を、天台座主圓仁に就き、出家得道したりしは、あたらしといふもおろかなり。曉に星を載いては花を摘み、夕に月を踏みては闍伽を汲む。難行苦行も、みな是れ、君の御菩提の爲と、偏に戀ひ聞ゆるうちに、たまく事の便に、都を聞けば、今は諒闇果てたりとて、皆人は、鈍色の衣を争ひ脱ぎて、位官昇進、新恩に浴しつゝ悦びあへるさま、全然先朝の舊恩を忘れたらむやうなるに慨して、露けき苔の袂を取出でて、その輕薄を驚かすものならむ。皆人の色ある花の衣に、わが露けき苔の衣を對照せしめたる、この間の消息を審にするに足るべし。大和物語にも、仁明帝の御大葬の夜、少將宗貞の、跡を晦して失せにけることをいひて、

御はてになりて、御服ぬぎに、よろづの殿上人、河原に出でたるに、童のやうなるなむ、柏葉に書きたる文をもて來たる。取りて見れば、(こゝに本文の)とあり。見れば、この良少將の手に見なしつ。いつらといひて、持て來し人を、世界に覺むれどなし。法師になりたるべしとは、これにてなむ、皆人知りける。云々。

とあるは、例の作話あるべけれど、誠に如上の意を得て書けるにやと覺し。猶思ふに、この皆人は、おもに、わが主管あたりし藏人所の下輩にして、藤衣を脱ぎ捨てて悦ばへる五位、或は五位に叙爵して、またり顔なる六位の藏人等を指しあらむ。さてあむ、さし當てたるどころ

確かなれば、汎然と歸着するところなきよりはをかしかりぬべき。悲哀沈痛、滿紙をして涙ならしむ。四五句のはてに疊用せるよの辭、この情趣を助けて、大に力あり。

(七七四)

河原のおほいまうち君のみまかりての秋、かの家のあたりをまかりけるに、紅葉の色、まだ深くもならざりけるを見て、かの家に、よみて入れたりける、

近院右のおほいまうち君

うちつけに寂しくもあるかもみち葉も主なき宿は色なかりけり

(釋)河原のおほいまうち君は、河原左大臣源融公をいふ。河原の下、左の二字脱けたるならむ。上にはあり。この公の薨去は、寛平七年八月廿五日なり。かの家に云々は、かの公の河原院の家のうちの人に、歌を詠みて遣れるなり。○うちつけ 卒爾の意。○あるか かは嘆辭、一首の意は、主人の歿くなられたるこの院に来て見れば、さし當つて、俄に寂しくもある事よ、それも其の筈、見事ある庭の紅葉さへも、主人の無い宿は、流石に色が無かつたワイとなり。(評)鳴好む大臣既に仙し去りて、纔に月餘、撫寇の烟早く絶え、遺愛の楓樹、誰が爲にか紅なる。河原院の今昔を思ひては、何人か、この感懐を起さしむ。况や、作者源能有公は、次席の大臣として、常に院主に昵び、院中に立入られけむをや。三句は、色ある紅葉さへもの意にて、結句

に、反禮去たり。軽く看過すべからず。この一ふし、即ちこの歌の生命なり。

三句、一本に、もみぢ葉のさあるはわろし。

藤原たかつねの朝臣のみまかりての又の年の夏郭公の鳴きけるを聞きてよめる、 つらゆき

ほこしぎすけさ鳴く聲に驚けば君が別れし時にぞありける

(釋)藤原たかつね 季吟の抄に、内藏頭左中辨右兵衛督正四位下、寛平五年五月十九日卒と見えたり。

一首の意は、今朝時鳥の啼く聲に驚いて、目が覺めて、つくづく思うて見れば、月日の経つは早いものよ、今が、去年君が死に別れて往かれたる時節でサ、あつたワイとあり。

(評)景によりて情を起し、幾聲の杜鵑に、故人の別哀を聯想し來る。故人や、逝いて返さず、杜鵑や、時節を忘れずして、又去年の舊聲に啼く。兩々對映して、一段の感懐あるが如し。四句、一本、君に別れしとある、聞えたれど、本文の、故人を主として、君がといへるには劣れり。

櫻を植ゑてありけるに、やうやく花咲きぬべき時に、かの植ゑける人、身まかりにければ、その花を見てよめる、

きのもちゆき

(七七五)

花よりも人こそあだになりにつれいづれを先に戀ひむとか見し

(七七六)

(釋)植ゑける人 望行が家族にても、召仕にてもあるべし。伊勢物語には、「昔男、友だちの、人を失へるが許にやりける」と詞書ありて、この歌を擧げたり。

一首の意は、櫻の花は、もろく散るはかない物なるが、今その花が咲く時分に、それよりも先に、植ゑたりし人がサ、はかなくなつてまうたワイ、かねては、花と人とは、どちらが先へ仇になつて、戀ひ焦れうとサ思つたことか、勿論花を先にと思つたに、さて意外なる事よとなり。

(評)不定なる人の命、無常なる世の中を、花と人とを對比して説明したり。見しは、思ひしといふべきを、花の方につきて轉義えたるなり。下旬、洗煉の語にして、措辭婉微なり。

あるじ身まかりにける人の家の梅の花を見てよめる

貫之

色も香もむかしのこさに匂へども植ゑけむ人の影ぞこひしき

23

(釋)詞書、家集には「あるじ失せたる家に、櫻を見てよめる」とあり。

○こさ 濃さなり。○匂へども 匂ふは、色には光澤あるにいひ、香には芬芳の高きにいふ。一首の意は、この梅の花を見れば、色も香も、昔の通りの濃さに變らず、美しく咲いて、よく香ふけれども、花の賞翫はさし置かれて、これを賞翫すべく植ゑたであらう、昔の人の亡き面影が

サ、戀しいワイとなり。

(評)色もと云へるによれば、紅梅あり。古へは、軒近く植ゑられて、櫻にもまさるにめでられたりき。家集の詞書に「櫻を見て」とあるは、これを心得かねたる者のさかしらあるべし。想はや、理路に涉れり。

二句、顯本、及び、六帖に、昔にこさすあるは、ことわりたす。

河原の左のおほいまうち君のみまかりて後、かの家にまかりてありけるに、鹽竈といふところのさまをつくれりけるを見て、よめる、

君まさでけぶり絶えにし鹽竈のうらさびしくも見え渡るかな

24

(釋)鹽竈といふところのさまをば、融公の河原院中に、陸前國千賀の鹽竈の浦(今の松島灣)の景

を摸しつくれるをいふ。毎月、難波の潮二十斛を汲まして、菰を焼かしめられきとぞ。續古事談に「河原院は、融左大臣の家なり。喜園水石、風流をつくして、作りみがきて住み給ひけり。失せ給ひて後、その子、法皇に奉りて、時々渡り給ひけり。云々。その後、佛寺になり

けり。云々」と見え、山城名勝圖會に「今按、舊跡、自三六條坊門至三六條、自三萬里小路至三京極、此内淨徳寺鎮守、曰融公靈社、又、有稱鹽竈町」とあり。○まさで 座さすしてなり。

(七七七)

○菹籠のうらさびしく 菹籠の浦寂しく、心寂しくを寄せたり。
一首の意は、融君が御座なさらずして、その節から、菹も焼かねば、烟の絶えてままひしこの
お邸の菹籠の浦は物寂びて、一方から心寂しうまわ、見渡さるゝ事よとなり。

(評)この好個の詩題に對して、感興何ぞ淺薄なる。源順の如きは、長篇を賦して、その荒廢の跡を
歌ひしにあらさや。わづかに、菹籠のうらさびしくの秀句、豈にいふに足らむや。
初句、六帖、朗詠、卅六人撰等に、君なくとあり。

藤はらのとしもとの朝臣の、右近中將にて住み侍りけるさ
うしの、身まかりて後、人も住まずなりにけるに、秋の夜ふけ
て、物よりまうできけるついでに見入れければ、もこありし
ぜんさい、いさあげく荒れたりけるを見て、はやくそこに侍
りければ、昔を思ひやりて、よみける、
みはるのありすけ

君がうるしひとむら薄虫のねのまげき野邊ともなりにける哉

(釋)詞書は、藤原利基が、右近衛の中將の時、住まれたりける曹司の、利基の薨後、住む人も無く
てありたるに、作者有輔が、秋の深夜、餘所よりの歸途、邸内を窺へば、もこありし前裁の甚

しく荒蕪歸にしたるを見て、以前作者は、其處に家人として居りたる事あるによりて、昔
思ひ出して詠めるとなり。利基は、贈太政大臣良門の子、内大臣高藤の兄にして、堤中納言兼
輔の父なり。曹司は部屋、前裁は庭前の植込なり。○ひとむら薄 一叢薄なり。

一首の意は、貴方が植ゑて置かれたる、わづか一叢の薄が、何時の間にか茂つて、虫の音のま
げく聞ゆる野原のやうにまわ、意外にもなつてままうた事よとあり。

(評)虫のねの喧しきをまげきと轉義したるに、おいづから一叢薄の、繁く生ひ延びたる光景の聯想
せられて、面白し。元來前裁の草木荒れたりとて、何ばかりの事もあらぬを、野へともなりに
ける哉と誇張せるは、これ一叢薄との對映上、甚しき變化、いみじき荒廢の跡を想見せまむる
手段なり。作者は、延喜年中に、左衛門の權少志に任せられしこと見ゆれば、もこより武人の
出身なるべし。利基在世の砌は、右中將なれば、想ふに、隨身などにて、利基の家に出入せし
にや、蒼涼凄酸、體調またよく、この趣に協ひて、完作と稱すべし。

惟喬のみこの父の侍りけむ時によめりけむ歌どもとこひ
ければ、かきとおくりける奥に、よみてかけりける、
とも のり

ことならば言の葉さへも消えななむ見れば涙のたきまさりけり

(釋)歌どもとこひければは、歌ども見せよと請ひけるなり。友則の父は、有友とて、貫之の父なる望

(七八〇)

行の弟なり。一家悉く歌に名ありて、有友も、集中に二首を数へたり。されば、惟喬親王の、遺稿を見せよと請はれしも、故あり。○ことならば 春上「ことならば咲かずやはあらぬの條に釋けり。○なむ 希望の辭。○たき 四段活の語にて、取上ぐ、極上ぐなどいふ意。

一首の意は、我が親は、とても死なれたる位ならば、詠み置かれたる歌までも、一所に消え失せて貰ひたかつたワイ、その故は、あまなか形見の歌をどが、目にかへれば、一しほ思ひ出されて、いよく悲しく、落つる涙が抑へきれなくなつて來るワイとなり。

(評)大事ともはやすべき形見を、むしろ消え失せなむと希へるが、この一ふしならむも、類想多かるうへに、措辭平凡なり。

題あらす

よみ人あらす

なき人のやごにかよはば時鳥かけてねにのみなくと告げなむ

(釋)○なき人のやごにかよはば 時鳥を冥途の鳥といひ倣すに本づきて云へり。本説、十王經に「一切衆生臨命終時、閻羅法王遣羅卒、(中略)縛三魂、至門關樹下、樹有荆棘、宛如鋒刃、二鳥栖掌、一名無常鳥、一名拔目鳥、我汝舊里化成鸚鵡、示怪語、鳴別都頓宜壽云々」とあるに據れるにて、玉篇に「鸚鵡鳥、今之郭公」とあり。但、十王經は偽經にして、郭公の事は、かの蜀魄の故事に附會して、更に敷演せしものなるべし。其の古き偽作なるが爲に、夙くより、典故として詠作せる詩歌も多かり。○なき人 世に亡き人なり。

一首の意は、時鳥は、この世に亡き人の所へ通ふ鳥といふ事であるが、果して通ふ事ならば、これ時鳥よ、自分が、亡き人の事を、不斷心にかけて、聲に出して泣いてばかり居ると、あちらへ知らせて貰ひたいワイとなり。

(評)伊勢集に、

死出の山こえてや來つる時鳥こひしき人のうへ語らなむ

と、描寫を反對にえたるまでにして、著想は同一なり。當時に弘通せし佛教思想の結果として味ふ時は、また特種の趣味あり。

たれ見よと花咲けるらむ白雲のたつ野と早くなりにしものを

(釋)一首の意は、この宿の花は、誰れに見てくれよと云うて、このやうに、昔に變らず咲いてある事であらう、主人は死に、家は荒れて、早もう、白雲の立つほどの、里遠い野原となつてまうたものをサとあり。

(評)白雲のたつは、野の修飾なり。軽く見るべし。重くする時は、現前に、雲の立昇ること聞えて、この景致に慥はず。眞淵が、火葬の烟に寄せたりと云へるも、おなじ謬見より出でたる牽強なり。無情の花を、有情のわれに對へ、有爲轉變の迹を、不斷の花に對へたり。

式部卿のみ、閑院の五のみこに住みわたりけるを、いくば

(七八一)

(七八二)

くもあらず女みこのみまかりにける時に、かのみこの住みける帳のかたびらの紐にふみをゆひつけたりけるをとりて見れば、昔の手にて、この歌をなむかきつけたりける。

かずく^くにわれをわすれぬ物ならば山の霞をあはれさは見よ

(釋)式部卿のみこは、宇多帝の皇子敦慶親王にて、玉光宮と稱せられ、好色無双の美男に物し給ひしとぞ。閑院の五のみこは、誰れとも定かならず。帳のかたびらは、御帳臺に懸けたる帳の布帛あり。帷をかたびらと訓む。紐は飾のなるべし。昔の手とは、故人の筆といふことにて、閑院の女五のみこの筆跡なり。

一首の意は、若し在世の砌に變らず、何につけかにつけ、私の事を御忘れ下されぬ物ならば、山へ立ちます霞を、何卒、あはれいとしやと思召して、御覽じて下さりませ、山の霞は、私が煙になりましたる跡のゆかりで御座りまする程にとあり。

(評)大空の霞に紛ふ北邙一片の烟となりて、萬事こゝに休せむとす。わが亡き後に於ける好色無双の玉光の宮に、山の霞をあはれと見るばかりの、些の人情あらむことを希へる、衷情哀ならずやは。

をここの、ひこの國にまかりけるまに、女にはかにやまひを

えて、いと弱くなりける時、よみおきて、みまかりける、
よみ人あらず

聲をだにきかて別るゝたまよりもなき床に寝む君ぞかなしき

(釋)ひこの國は、例の他國の意。まかりけるは、萬治本、まかれりけるとあり。○たま 魂魄なり。

○なき床 妻の無き床なり。

一首の意は、貴方が、他國に御出の爲、御姿はさておき、御聲をさへもえ聞かずに、死に別るゝ、誠に残念に悲しい私の魂ひよりも、追付け京へ御歸なされて、私が居らぬ跡の床に、獨御休みなさるであらうと思ふ貴方が、御いとしいワイとなり。

(評)靈魂の存在を認むることは、古代宗教皆然り。神儒佛耶、その歸を同じくす。さて、生別にかさぬるに、この死別を以てす。境遇、既に、他の同情を惹くに充分なり。況や、わが身の悲、傍にして、偏に夫の、孤炎依る所なき悲境に沈淪せむことを豫想して、惻阻の情に堪へざる、これ實に、人情美の極處を發揮せしものと稱すべきか。死ぬるわれよりもといふべきを、別るゝ魂よりもと轉義したるが、いよくはかなげに聞えて、身を亡き物に去たる口吻、哀あり。結句、悲しきは、露骨の嫌あり、くちをし。

三句、六帖に、われよりもとある、劣れり。四句も、同書に、人を悲しきとあり。

やまひに煩ひ侍りける秋心地たのもしげなくおぼえけれ

(七八三)

大江千里

(七八四)

もみち葉を風にまかせて見るよりもはかなき物は命なりけり

(釋)心地たのもしげなくは、快意の覺束なきをいふなり。

一首の意は、もみちの葉を、風に心任せに吹かせて見るは、何時散るかも知れぬ、頼み少ないはかない物であるが、それよりも優つて、頼み少ないはかきい物は、私の命であつたソイとなり。

(評)佛數に所謂、飛花落葉の聲聞觀に似たり。但、今散るをいへるにはあらず。風前の燈など、ふ趣にて、今や散らむと、覺束なく思はるゝはかなきをたくらべたるなり。

身まかりなむこてよめる

藤原これもこ

露をなごあだなる物と思ひけむわが身も草におかぬばかりを

(釋)○ばかりを、ばかりなるものをの意。

一首の意は、日頃草の葉に置く露を、はかなく消ゆる、頼み少ない物ぞとは、何故に思ふたのであらう、今かう病み勞れて、何時死ぬかも知れぬ、頼み少ない事を思ひまはせば、自分の身も、草の葉に置かぬと云ふばかりであるものをサとなり。

(評)この種の觀想、漢書の蘇武傳に、「人生如朝露」、又、文選の古詩に「年命如朝露」と見え、金剛

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを

(釋)一首の意は、死の道は、誰れも何時ぞは、是非に行く道ぞといふことは、かねて聞いて居りたれども、それが、昨日や今日の事とは思はなかつたものを、早その時節が来て、行かねばならぬ事かまあとなり。

(評)佛語にも、有待の身など、専らひ觸れたれば、豫て聞きしとは云へるならむ。死ぬることを途に行く道といひ做したる、措辭婉曲を極む。きのふけふは、昨日は知れざしかば、取出でていふまじく、道理のうへよりは、けふあすとはといふべきなれども、抑も、こは只、詞のあやにして、この頃とは思はざりしをの意を、具体的に轉義したるに止まれば、更に差支あし。况や、けふあすといひては、四句詞といはず。却て、昨日といひ副へたるに、いたく末期のさし迫れる趣さへ躍如として、感深し。流石に一代の才人が最後の囁吐、刻せず割せず、偶爾と

なりひらの朝臣

(七八五)

れを得、おのづから絶調を成せり。自然の聲なり。誠心の響なり。純乎たる天籟、仰ぐべく、まねぶべからず。

(七八八)

かひの國にあひありて侍りける人ごぶらはむとて、まかりける道なかにて、にはかに病をして、いまくとなりにければ、よみて、京にもてまかりて、母に見せよといひて、人につけ侍りける歌、
ありはらのまげはる

かりそめのゆきかひちごぞ思ひこし今は限のかごでなりけり

(釋)道なかにて云々 甲斐に居る知人を訪はむとて下りける途中にて、急に煩ひ付きて、臨終の期になれるより、この歌を詠みて、京に持ち歸りて、母に見せよとて、人に託したるなり。滋春は、業平の次男にて、母は右大臣藤原良相公の女、染殿内侍なり。この詞書、一本には、「甲斐の國にまかりて、身まかりけり時よめる」とあり。○ゆきかひち 往反の道といふを、甲斐路に寄せたり。

一首の意は、甲斐の國へ行くこの旅を、つゝ一寸したる往き來の道とサ思つて、出て來ましたワイ、然るに、只今となりては、これが、この世の門出で御座りましたワイとなり。

(評)さて、か、らむとは思ひ掛けざりし事よの餘意あり。他國他郷に流寓して、他人の手に死せ

むとす。かの故郷なる慈母の膝下、先づ慕はれて、假初の門出の、死別の門出となれる、ことを悔しみ、遙に永訣の情を叙ぶ。事態、頗る悲惨といふべし。措辭、猶一層の洗煉を要すべし。か
甲斐路の秀句の如きは、抑も末なり。大和物語に、

この在次君、在中將の、東に往きたるけにあらむ、この子どもも、人の國通ひをなむしける。心ある者にて、人の國の、哀に心細き所々にては、歌よみて書付けなどなむしける。(中略)かくて、人の國ありきく、甲斐の國に到りて住みける程に、病して死ぬとて詠みたりける、
(歌あり、本文のと同じ。)
と見えたり。事情、大方差はずやありけむ。

(七八九)

古今和歌集卷第十七

雜歌上

題あらず

よみ人あらず

わがうへに露ぞおくなるあまの川とわたる舟の櫂の志づくか

(釋)雜歌 ザウノウタ、又、クサノノウタと訓む。序文に、「春夏秋冬にも入らぬ、くさくの歌を選ばせ給ひ」と見えて、四季、戀、賀、別離、羈旅の部に入れ難きを收めたり。

○題しらす 伊勢物語には、「昔、男、京をいかゞ思ひけむ、ひむがし山に住まむと思ひ入りて云々、かくて、物いたく病みて、死に入りければ、おもてに、水洒ぎなどして、息出でて」と詞書ありて、この歌を擧げたり。○とわたる 門渡るなり。門は、こゝにては、天の川の川門をいふ。川門は、川岸の迫りて、水瀬の、一つに流るゝ處、迫門、水門の門、またこの意なり。○しづくか かは疑辭なり。

一首の意は、自分の體のうへに、思ひがけず、露がサ置いたワイ、これは、あの空の天の川の渡しを渡る舟の櫂の志か知らぬワイとなり。

(七九〇)

(評)契沖いふ、この歌のつゞきは、皆、歡める歌のたぐひなるを、その始に出せるをもて思へば、七月七日の夕べ、思ひがけず、内宴に召されて、祿など賜はりし人の、御惠のかゝれるを、かく寄せたるにやといひ、景樹は、この歌の調、いとはかなげなれば、歡喜の情もて詠めるものならじ、勢語に、面に水洒きたるとある、いと似つかはしく聞ゆ、さる傳などありて、それを飾りて作れるも計り難しといへり。熟ら思ふに、この歌、ア列の開口音多くして、聲調、いと花やかなれば、決して、景樹のいふが如くならず。勢語の傳説、亦、もとより信すべからず。さりて、必ず、契沖の説の如くならむも覺束なし。只、七夕の夜、さる故ありて、露に立ち濡れたる人の詠めりとせむぞおだしかるべき。元來、二星を主として詠じたるものならねば、七夕の部にも收め難く、さりて、秋の露の部にもふさはしからねば、雜の初に置けるならし。わがうへにといへるは、天河の水の洒ぎかゝるに、恰當の措辭なり。袖になどいひては、餘に、區域を狹むる恐あるべし。落想奇拔、體格、また雄健にして、百鍊の鐵の如し。萬葉集十、

このゆふべふりくる雨は彥星のはやく舟の櫂のちるかも

は、この同想同型なり。但、修辭に於ては、數段の進歩を認む。

○ 思ふどちまとゐせる夜は唐錦たまくをしき物にぞありける

(釋)まとゐる 團樂の義。○唐錦 漢土より舶載せる錦なり。蜀錦などといへるならむ。たまくしき

しきといはむ序に用ゐたり。錦は、貴重なる織物なれば、切斷することの惜まるゝものなるが故に、裁たまく惜しきに、立たまく惜しきをかけたるなり。○たまくしき まくはむの延言。

一首の意は、かう、心の合うたる友達同志打寄つて、語り合つて居る夜は、唐錦の裁つのが惜しいやうに、座を立つて去なうとすることが、惜しいものであつたワイとなり。

(評)平凡の想なれども、その真なるを失はじ。わづかに、唐錦たまくをしきの剪裁によりて、一首、光彩を生ず。

○ うれしきを何につまむから衣袂ゆたかにたてといはましを

(釋)○袂ゆたかに ゆたかには、廣く大なる意。

一首の意は、このやうなる嬉しい事を、何に包まうぞ、ちひさいこの袂には、なか／＼包まるゝ事ではない、かうと知つたら、装束の袂を、もつと寛に裁つてくれいといはうであつたものをサとなり。

(評)無形の感情を、有形の事物に取倣して、袂に包まむといふ、何たる詩的ぞ。況や、袂ゆたかにたての痴呆、詩味をたすけて、餘あり。けだし、踊るばかりの嬉しき事あるを包みかぬるよりいへるにて、かゝるを、いかゞ包まむとなり。その包むといふより、袂を思ひ寄せたり。景樹が、昔は、袖の尺、いと長ければ、何くれに用ゐじなり、今の不用の類にあらず、故に包むといへば、

(七九一)

袖の事となるなりといへる、よし。又、初句を、うれしさをと、體言にいふべき由いへるは拘れり。本文のまゝにて、事もなし。

(七九二)

○
限なき君がためにとさる花はときしもわかぬ物にぞありける

ある人のいはく、この歌は、さきのおほいまうち君のなり。

(釋)伊勢物語に、「昔おほきおほいまうち君と聞ゆるおほしけり。仕うまつる男、長月ばかりに、梅の作枝に、雉をつけて奉ると」と、詞書ありて、この歌を擧げたり。○限なき 壽命の限なきなり。○ときしも 時しもなり。しは強辭、もは歎辭。

一首の意は、御壽命の限ない君に、さし上げませうと思つて折る花は、かやうに、何時といふ時節の分ちも無しに、咲くものでサありましたワイとなり。

(評)御壽命の限もなき故に、花も、時節の限なしに、何時も咲けるなりの餘意あり。反映の花などを折りて、御門、或は、わが主君などに奉れるなりけむ。勢語の詞書によれば、ときしも、雉を隠せりといふべけれど、例の作話なれば、以て、これを説くは非ならむ。

六帖には、形見の題に收めて、二句、君が形見にとあり。勢語には、初句、わが頼むとあり。左註は、勢語によりて、後人の書き添へしものならむ。さきのの下に、おほきの三字落ちたり。この集に、「前のおほきおほいまうち君」とあるは、忠仁公藤原良房なるより、これをも、忠仁公の作とするは、左註に泥めるなり。

○

紫のひともとゆるにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る

(釋)○武藏野 武藏の國の中央の平原、紫草の産出を以て名ありき。紫草のことは、戀三「戀しくば下にを思へ紫の」の條下を看よ。○みながら 皆ながらの略にて、悉皆の意。

一首の意は、色深き紫の一株を、あはれなつかしい物と思ふ故に、その縁にひかされて、限もない廣い武藏野中の草が、皆残らず、あはれになつかしいと思ふワイとなり。

(評)全然諷諭なるべし。さらば、わが愛する妻一人故に、そのゆかりの人は、悉くなつかしく思はるといふ裏面の意あらむ。數多あるべき紫草を、必ず一本といへるも、この意をたしかにせむとてなり。さて、この歌よりして、紫を、「ゆかりの色」といひ慣へり。

めのおとうとをもて侍りける人に、うへきぬのを贈ると
て、よみてやりける。

なりひらの朝臣

紫のいろこきときは目もはるに野なる草木ぞわかれざりける

(釋)女のおとうと云々 女は妻、おとうとは、こゝにては妹なり。うへのきぬは袍なり。意は、妻

(七九三)

の妹に連れ添へる男に、袍を贈り遣るとて詠めるとなり。伊勢物語の詞書には、姉の夫を貴し、妹の夫を卑しき者とし、師走の晦日に、妹は、手づから、夫の袍を洗濯したるが、慣れぬ事として、袍の肩を張り破り、せむ方もなくして泣き居たるを、姉の夫聞きて、あはれに思ひて、位に合へる緑袍を贈りやるとて、この歌を添へたりとあり。○目もはるに 目路遙になり。

一首の意は、紫の花の、色濃く咲く時は、見渡し遙に、野にある草木までが、差別もなくなつかしいワイ、といふが表面の意にて、古歌に、「紫の一本故に云々」と詠んであるが、いかにもその通りで、私も、妻一人を思ふ心が深い時は、それにひかされて、そのゆかりの人は、誰でも皆サ、妻同前に、かけ隔なしに、大切に存せられますワイ、といふが裏面の意なり。

(評)されば、失禮をも顧みず、この袍を進呈致し申すといふ餘意あり。思ふに、この袍や、緑色なりしならむ。女の寵深きを、紫の色濃きに譬喩して、上の歌の意を、下に踏みなせり。必ず、紫草生ふる武藏野の實景とせむは、いかゞあらむ。勢語に、その男を位浅き卑しき者のやうにいへるは、例の作話ならむ。

大納言ふぢはらの國經の朝臣、宰相より中納言になりける時に、染めぬうへのきぬのあやをおくるとして、

近院右のおほいまうち君

いろなしと人や見るらむ昔よりふかき心にそめてしものを

(釋)○大納言ふぢはらの國經云々 藤原國經が、宰相より中納言に昇任せしは、寛平六年五月五日なり。宰相は參議の唐名、染めぬ云々は、袍の料に、白綾を贈るとて、この歌を詠み添へたりとなり。

一首の意は、これは白綾なれば、何も、色がなくて、興のないやうに、貴方はお思ひなさう、しかし、私は、以前から、貴方に、大層深切なる志を、濃う染めて置いたる、この綾であるものを、不興には思うて下さるなとなり。

(評)國經は、官位を、弟基經に超えられ、後には、甥時平の爲に、その愛妻を奪はれし程の氣の毒なる人なり。作者能有、皇親の尊を以て、よく、この人に、同情を寄せたりといふべし。色の有無に、志の淺深を寄せたる構想、おのづから、語言の技巧に傾かざるを得ず。

いそのかみのなみまつが宮づかへもせで、石の上といふ所にこもり侍りけるを、にはかに、かうぶり賜はりければ、喜びいひつかはすとて、よみて遣しける。

ふるのいまみち

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里の花も咲きけり

(釋)いそのかみの云々 石上の並松が、奉公もせずして、大和の石上に籠り居けるが、急に、冠位

を賜りけるに就いて、賀詞をいひ造るとして、詠めりとなり。かうぶり賜りは、叙爵として、五位に叙せらるるをいふ。三代實錄に、「仁和二年正月五日、授從七位上朝臣並松從五位下」と見えたり。

○やぶし やぶは藪なり。草深き處をいふ。今、篋をさしていふは轉れるなり。しは、強辭。一首の意は、日の光は、どのやうなる草深き藪原をもサ、分け隔てなしに御照しなさるゝから、石上の荒れてさびれてしまつたる里にも、流石に、春が来て、花が咲いたワイ、といふが表面の意にて、御上の御恵は、何處までもサ行き渡つて、分け隔てが無いから、世に舊されたる貴方の御身の上にも、名譽の花が咲きましたワイ、といふが裏面の意なり。

(評)單に、表面の意のみを以て論ずれば、なほ、理筈に着する嫌あるべけれど、譬喩の巧は、そを償うて餘あるが如し。渾然として、斧鑿の痕なきは、老手なり。新撰姓氏錄に據れば、布留氏は宿禰姓にて、布留の神主なり。その族人にて、當時造酒正たる作者は、同郷の好に、並松の身叙を賀したるなりけむ。

二條の後の、まだ、東宮のみやす所と申しける時に、大原野にまうで給ひける日よめる。 なりひらの朝臣

大原野をしばの山もけふこそは神代のことと思ひいつらめ

(釋)二條の後の云々 二條の後は、清和天皇の皇后藤原高子なり。大原野は、山城國乙訓郡にして、こゝにもうで給ひとある故は、關院左大臣藤原冬嗣の、氏神春日の社の、遠地にありて、神拜に

不便なるを愛ひ、この地を相して、春日を勸請あり。文徳天皇の仁壽元年より祭儀始り、藤氏の皇孫、必ず行啓ありき。二條後の大原野詣は、同後の、東宮の御息所の稱ありし貞觀十一年より、同十八年までの間にあらむ。伊勢物語には、「昔、二條の後の、まだ、春宮の御息所と申しける時、氏神に詣で給ひけるに、近衛司にさむらひける翁、人々の祿給はりける序に、御車より給はりて、詠みて奉りける」と、詞書あり。○大原野をしばの山をしばの山は、大原野の神の鎮座じまじませる小鹽山なり。○神代の事も 古事記に、天照大神の御子邇々藝尊の天降ります條に、「爾天兒屋命云々、并五伴緒矣、支加而天降也」と見え、日本紀、古語拾遺にも、天つ神の御孫の、この國に天降り給ひし時、輔佐し奉り給へる神の中に、天兒屋命を、特に重かりける趣見ゆ。この天兒屋命は、春日の御神にして、即ち藤原氏の祖先なり。

一首の意は、かやうに、御子孫の藤原氏の御息所が、東宮の御母儀として、御參詣あるなれば、この大原野の小鹽山に、御鎮座あらせらるる氏の御神も、かの神代に、天照大神より、天孫を輔佐すべき由の勅定承りし昔の御事も、何時はともあれ、今日こそは思し召し出されて、御満足に思はるゝで御座らうとなり。

(評)大原野をしばの山もといはで、山もと轉義して、思ひ出づらめと擬人したるを、この巧とす。山もものは、わが神代の事を思ひ出づるに對へたるなり。眞淵は、いと安らかにめでたしと評せり。舊説の、勢語に據りて、山もは、二條后を喩へたりとして、作者と密事ありし早くの事を思ひ出づらむといふ意に釋けるは非なり。勅撰の集に、恐多くも、皇后密通などの隱事を歌へるものを

掲ぐべしやは。勢語なるは、もとより、一場の作話なるべし。
三句、大鏡には、けふよりは、六帖には、けふしこそとあり。又、勢語には、四句、神代の事を、
同途龍本には、二句、をしほの松もとあり。

五節の舞姫を見てよめる よしみねのむねさだ

あまつ風雲のかよひぢふきとぢよをとめの姿あばしとめむ

(釋)五節の舞姫 五節の舞姫は、陰曆十一月中の丑の日、豊明節會に、臣下に、酒宴を賜はる儀式
ありて、その時行はるゝ女樂なり。舞姫五人、公卿國司などより、美しき少女を、花やかに裝束
せしめて奉りて舞はしむるを、臣下に見せ給ふなり。後には、大嘗會の時のみに行はる。續日本紀
天平十五年五月、橘諸兄公、太上天皇に傳奏し給ふ詔に、天武天皇、禮樂なくしては、世を治む
る事缺けたりとて、この舞樂を作らせ給ふとあり。この舞の來由は、政事要略に、「五節舞者、淨
御原天皇之所制也、相傳曰、天皇御吉野、日暮、琴有、俄爾之間、前岫之下、雲氣忽起、疑如
高唐之神女、髮髻應曲而舞、獨入、天闕、他人無見、舉袖五變、故謂之五節、其歌曰、乎度綿
度茂邑、度綿左備須茂可良多萬乎多茂度、邇麻岐氏乎度綿備須茂」と見え、三善清行の意見封事に
も、「按舊記、昔神女之來舞云々」と見えれば、神女が五變の舞を象るといふが、古き傳説なるべ
し。宣長曰く、この古傳説は、古事記に、雄略天皇、吉野に行幸して、吉野川の濱に、美麗なる童女
にあひ給ひ、御みづから、御琴を弾じて、そをして舞はしめられし事見えたるに據りて作れるも

のならむと。

一首の意は、空を吹く風よ、あの天女が歸り上らうとする雲の中の通路を、雲を吹き寄せて塞ぎて
くれい、さうして、あの面白い天女の舞姿を、もうこの間の間なりとも、留めて置いて見ようワイ
となり。

(評)五節の舞の古傳説によりて、所がら、今の舞姫を、直に、天女と看做し、その舞ひ果てて還り
入らむとする名殘を惜みて、雲路を吹き閉ぢよと詠めるは、業平朝臣の、
あかなくにまだきも月の隠くる、か山のは逃げて入れずもあらなむ

と共に、同巧異曲の妙作なり。殊に、五節の舞姫は、當時の若殿原の、大騷をしたりしものなれ
ば、宗貞も 同じく、その一人なるべく、舞姫の姿に見とれて恍惚たりさま、思ひ遣られたり。
色即是空、これが、法徳四海に遍照せる花山僧正の前身と觀じ來れば、更に、一段の面白味を加
ふ。

五節のあしたにかむざしの玉の落ちたりけるを見て、た
がなむと、とぶらひてよめる。

河原の左のおほいまうち君

主やたれとへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

(K00)

(釋)五節のあした云々 五節の舞ありし翌朝、舞姫の簪の玉の落ちたるを見て、これは、誰のならむと、落し主を尋ねて詠めりとなり。○あはれ 可憐の意にて、いとじと思ふをいふ。一首の意は、この簪の玉の落し主がなつかしさに、これの主は誰ぞと、玉に問へども云はぬによつて、それならば、いつそ、夜べの舞姫を、誰彼といふ事なしに、皆々、あゝいとしやと思はうかとなり。

(評)まことは、舞姫に問へども、いづれも知らぬ顔して、我がのといふ者なかりしならむ。乃ち、この玉のうへに轉じて、擬人したるなり。なべてやあはれと思はむの狂痴、この生命なり。

寛平の御時に、うへのさぶらひに侍りけるをのことも、かめを持たせて、きさいの宮の御方におほみきのおろしと、きこえに奉りたりけるを、くら人ども笑ひて、かめをお前にもていでて、ともかくもいはずなりにければ、使のかへり来て、さなむありつるといひければ、くら人の中におくりける。としゆきの朝臣

玉だれの小かめやいづらこよろぎの磯の浪わけ沖に出でにけり

(K01)

(評)寛平の御時に云々 寛平は、宇多帝の御代の年號、うへのさぶらひは殿上の間、きさいの宮は皇后藤原温子なり。おほみきのおろしは大御酒の下しなり。このあたり、誤寫あるべし。顯註には、きこひにとあり。きさいは、を文字の誤寫にて、大御酒のおろしをこひにとありけるなるべし。さてなむ、事狀も明らかに、歌の趣にも協へる。くら人は女藏人にて、皇后宮の御方に侍へる女官なり。意は、寛平の御時代に、殿上に詰めて居たる衆が、酒瓶を、使に持たせて、後の宮の御方へ、御酒のおさがりを下さりませと申し上げたりけるを、女藏人共、その瓶を、後の御前に持ち出しながら、笑ひこけて、折角の口上を、何ともいはずにしまひしかば、使、立歸り来て、しかぐと復命したりければ、その女藏人の中にいひ送りける歌となり。○玉だれの小かめ 眞淵いふ、玉簪の緒と續けたる枕詞なり。されば、小かめは小がめと訓むべしといへり。小がめは小瓶なり。小龜を寄せたりと。顯註には、玉だれとは、小瓶をいふ、瓶の上に塗りたる物の、玉のやうにさがりたればいふ。玉だれのみすとも續くるは、玉すだれとて、玉を貫きても、簾には懸くれは、玉を垂るといふなりとあり。清水光房は、この説に據りて、玉だれのを、枕詞にあらずとして、玉垂の小瓶、玉垂の小簾と訓むべき由をいへり。諸本、已に、コガメとあり、六帖も、本文と同じければ、姑く、顯註の説に従ひ置く。○こよろぎの磯 小洵の磯にて、相模國中郡にあり。一首の意は、先程の小瓶はサ、どれ何處にあるぞと、使の者に問へば、風俗の謠物にある小瓶とは違つて、その小瓶といふ小龜は、小洵の磯の浪を分けて、存外に、沖へ出てしまつたワイ、即ち、後の宮の御前にサとなり。

(評)この歌の趣を案するに、瓶など持たせて、大御酒のおろし乞に遣はすは、若殿上人等が、女蔵人に向ひての打解け業と知られたり。されば、后宮の御前に、その小瓶を持ち出でたるは、殿上人等の意外とせし所ならむ。即ち、風俗の謠物なる、

多萬多亂乃、平加女乎奈加仁須惠天、阿流之者毛也、佐加奈未幾二、佐加奈止利仁、己由流木乃、伊會乃和加女加利阿介二。

を捉へ来りて、典據とし、かの小瓶は、主客の中に据ゑられしかども、この小瓶は、小海の磯をさへ離れて、沖遠く出でたりと、秀句をもて洒落れたるなり。玉垂の風俗は、當時、誰も知れる謠物なれば、この機智頓才は、大喝采を博せしならむも、今日となりては、興味索然たるなき能はず。結句、千秋が、田中道麿の説によりて、けむの誤寫ならむといへるは、あらず。意釋を見て、その非を知るべし。

二三の句、六帖に、こかめはいづらゆるぎのとあり。

女の見て笑ひければよめる

けんげいほうし

かたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ

(釋)一首の意は、女中達よ、さやうに、御笑ひなさるな、この通り、形こそ、見る影、無い深山の奥の朽木のやうなれ、しかも、心は、花にせうならば、花にもならうはサとなり。

(評)古木倚寒巖、三冬無暖氣の消極的靜と異りて、一道の春風、常に、心頭に存するは、この作

者、なかく、只の風にあらず。朽木なれの隱喩、及び、その縁にて、心は美しくといふべきを、花にと轉義したる對映、意簡に、詞約なり。

方たがへに、人の家にまかりける時に、あるじのきぬを著

せたりけるを、あしたに返すとてよめる。きのともりの

蟬のはのよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな

(釋)方たがへ 源氏物語河海抄に、「金櫃經云、天一立中央、故號中神二歟、伴方、古來所違來也」

と見え、この中神、日毎に巡行するが故に、又、一夜巡りの神ともいへり。物へ行きて歸らむとする時、その方、この神塞りの方なれば、又一夜、他家に假寝して歸る、これを方違へといふ。

中古、陰陽家のしいでし事なり。○蟬のはの 蟬の羽の如きの意。

一首の意は、昨夜拜借したるこの衣は、時節がら、蟬の羽のやうに薄いけれど、移香が、濃くま

あ匂ひましたる事よとなり。

(評)時は、これ夏なるべし。かく、その餘香を賞愛するは、即ち、かの人柄を稱へて、その親切を感謝する所以なり。濃きと薄きとの對照は、餘に親粘に過ぎて、却つて淺膚なり。

題えらす

よみ人えらす

おそくいづる月にもあるか山のはのあなたおもても惜むべらなり

(釋)○あるか かは歎辭。

一首の意は、待てども、遅くいづる月でまあある事よ、これを思ふに、此方で、かう待つやうに、あの東の山のあちら面でも、山へ入るのを、人が皆、惜むさうな様子だワイとなり。

(評)この著想、地平説の行はれし昔時においては、實に、破天荒の没理想といはざるを得ず。これらの空想は、今日は、既に、學理上立證せられて、事實となりたれば、詩味一半を減するが如し。然れども、猶、月の、人に惜まれて、運行を躊躇する有情の取做し、詩としての價值を失はず。四句のものは、わが、月出を待つことを本としていへる辭なり。注意すべし。

二句、六帖及び、新撰和歌に、月にもあるかなとあり。又、六帖再出のには、三句以下、山のはのあなたの里もをしむなるべしとあり。本文のに比すれば、大に劣れり。

○

わがこゝろなぐさめかねつ更科やをばすて山にてる月を見て

(釋)○更科やをばすて山 信濃國更科郡にあり、姨捨山と書く。

一首の意は、自分の心が、何となく物悲しくなつて、慰めかねたワイ、この更科の姨捨山の照る月を見てサとなり。

(評)遊子、秋月を、姨捨山に見る、折柄、處がら、その境遇と相俟ちて、この愁思ありしならむ。姨捨の名によりて釋くは非なり。大和物語に、「この山に、姨を捨て置きて歸るとて、甥が詠める」

とて、この歌を擧げられたれど、こはもと、雜寶藏經の乘老國縁第四に見えたる事を、わが國の事めかして作り設けたるものと見ゆ。今の集解に、信濃の俗、老人を捨つる事ありし由をいへれど、皆、この誤を襲へるにて、信すべからず。

なりひらの朝臣

おほ方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの

(釋)伊勢物語には、「昔、いと若きにはあらぬ、これれ友達ども集りて、月を見て、それが中にひとり」と、詞書あり。○おほ方は 大概の事ならばの意。○これぞこの 「これやこの」などの類にて、このは、下の老といふ語に跨續す。

一首の意は、月は面白い物であるが、大概の事には、さう、その月も、餘り賞翫すまいワイ、なせなれば、この月をめづることがサ、段々とたび重なると、何時か、光陰が經つて、この人間の老となるものであつたワイとなり。

(評)一年の盈虚、よく幾何ぞや、月に狂し、月に執して、老の、まさに到らむとするを知らず。その詩的生活、眞に羨むに堪へたり。俄然、二毛の白きに愕きて、月をもめでじといふ。必ず、月は、老に關し、老は、月によつて催さるゝものとしたる没理想の構想、この作者が擅場なり。結句、老となるものなり。といふべきをいひさしたるにて、體調勁健の素を成せり。

初句、勢語の眞字本に、大方のとあるを、眞淵は執したれど、わろし。結句、家集には、老とい

ふものとなり。

(八〇六)

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによ
める。 紀つらゆき

かつ見れど疎くもある哉月影のいたらぬ里もあらじと思へば

(釋)○かつ 片一方の意。

一首の意は、あの月を、片心では、見はするけれども、疎くまあ思はるゝ事よ、何故なれば、あの月の光は、此處ばかりに、心あつて照るのではなくて、何處もかも、行き渡らぬ土地もあるまいと思へばサ、といふが表面の意にて、躬恒の來れるを、親切には見れども、かつは疎くも思ふ事よ、何故なれば、そは、月故に來れるなれば、月の照るかぎりは、躬恒の往かぬ處もあるまいと思へばサ、といふが裏面の意なり。

(評)月を、躬恒に擬へての諷諭なり。詞書の「月おもしろしとて」とあるに、心を注ぐべし。躬恒の來れるは、主人は傍にて、月が主なればと、一寸、嫌味をいへるは、素より、親しき間柄の戯謔なり。夏部に、

時鳥がなく里のあまたあればなほ疎まれぬ思ふものから
とあるに、構想を同じくして、これは、諷諭の巧を加へたれば、理路に着する裏を免れて、おもしろし。

二句、新撰和歌に、疎ましきかな、四句、新撰和歌には、里の、六帖、及び家集には、里はとあり。

池に、月の見えけるをよめる。

ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月影

(釋)一首の意は、月は、二つ無い物で、山の端から出るばかりの物と思つたものを、それにまあ、あれ、山の端では無い、池の水底にも出る月影なることよとなり。

(評)かくては、月は二つあるものの如く見ゆの餘意あり。秋下に、友則が、

一本と思ひし菊を大澤の池の底にもたれが植ゑけむ
と同型の構想にして、尖新なり。

題あらず

よみ人あらず

上の川雲のみをにてはやければひかりとどめず月ぞながるゝ

(釋)○みを 水脈なり。水筋をいふ。

一首の意は、上の川は、下界の川とは違つて、雲の水脈で、瀬が早い故に、光を、暫くも留めずに、月がサ、早う流れて行くワイとなり。

(評)今少し、光の淀まはしきを、残多きことよの餘意あり。上の川の名に據りて、くだち行く月

(八〇七)

を流るるといひ、さて、雲のみをにてと、混喩を用ゐたり。貫之が土佐日記に、照る月のながるゝ見れば天の川いづる湊は海にざりけると詠めるも、これにや胚胎したりけむ。

○

あかずして月の隠るゝ山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

(釋)○山もと 山麓なり。

一首の意は、また見飽かずしてあるうちに、山に支へられて、早くも、月の隠るゝ西の山本では、月の入るこの山のあちら面がサ、戀しうあつたワイとなり。

(評)上なる「遅くいづる月にもあるかな」と、その場合を反對にして、同巧異曲の觀あれども、これは、遂に下れるが如し。蓋し、戀しかりける、と道破したるは、露骨に失して、かの「惜むべらなり」と、詩的想像を逞しうしたるに及ばざること遠し。

三句、新撰和歌に、山里はとあり。

惟喬のみこの狩しける供にまかりて、やどりけるに、歸りて、夜ひと夜、酒のみ、物語をしけるに、十一日の月も隠れなむとしけるをりに、みこ酔ひて、うちへ入りなむとしけれ

ば、よみ侍りける。

なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月の隠るゝか山のはにげて入れずもあらなむ

(釋)惟喬親王の云々 伊勢物語には、惟喬親王、年毎の花の盛には、山城國水無瀬の別業におはして、常に、右馬頭なる人を、供に率て遊び給ひしが、河内國交野に狩して、渚の院に至り、天の川を経て、再び、水無瀬の宮に還り給ひて、酒宴せられし折の事として、「還りて、宮に入らせ給ひぬ、夜更くるまで、酒のみ、物語して、主人のみこ、急ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬の頭によめる」と詞書して、この歌あり。○あかなくに あかぬになり。○隠るゝか かは歎辭。

一首の意は、面白くて、見ても見足らぬのに、入るべき時刻よりも、一通りならず早うまの、月の隠るゝ事よ、あの月の隠るゝ山の端が、脇へ逃げ退いて、月を入れずにまああつてほしワイ、といふが表面の意にて、この興宴の愉快の盡きぬのに、早くもまあ、親王の、席を辭して、お奥にお入りなさるゝ事よ、あの親王のお姿をお隠し申す御簾や御帳やが無くなつて、親王をお入れ申さずにまああつてほしワイ、といふが裏面の意なり。

(評)月を、親王に比興したる、巧は巧なれど、さばかりの高手ならぬも、猶いふを得べし。只これ、山のはにげての一語ぞ、實に、超凡の大手腕なるべき。高情の極、遂によく、一切の理筈を脱

離し得て、詩趣の妙諦に達し、こゝに、天外の痴想を現じ來れり。李長吉が、「黑風吹、山作平地」と作り、人麿が、「妹が門見む、靡けこの山」と詠めると共に、豪宕の奇作たり。逃げての擬人、猶緯々として、願阿の餘裕あるを見る。然るに、論者、往々、この語を以て、雅馴ならずとなす。所謂、駘駘を見て、馬の肉腫を病むものと思へる儻ならむ。十一日の月の、はや、山の端に落ちなむとするまで、夜は更けたるに、酒宴、興なほ酣に、玉山、將に頽れて、親王は、座に堪へ給はざらむとす。この時、この人、この歌あり。情味與會、果して如何。
二句、新撰和歌に、まだきにとあるはわろし。

(八一〇)

田村のみかどの御時に、齋院に侍りけるあきらけいこの
みこそ、母あやまちありといひて、齋院を易へられむとし
けるを、その事やみにければ、よめる。

あま敬信

大空をてりゆく月し清ければ雲かくせどもひかりけなくに

(釋)田村のみかどの御時に云々 文徳天皇、山城國葛野郡田村に葬め奉る。故に、田村の御門と申す。齋院は、もと、伊勢の齋宮に倣ひて置かれたる、山城の上下加茂の神に奉仕する齋女にて、内親王を以て、これに充つ。慧子は、文徳天皇の皇女なり。母は列子、從五位上藤原是雄の女なり。母あやまちありとは、慧子の母列子に、罪過ありてなり。その事やみければは、慧子の、齋

院を廢せらるゝ事やみたるなり。然れども、その後、また、他の事によりて、慧子の廢せられし事は、文徳實錄に見えたり。天安元年二月、廢鴨齋内親王慧子、更立述子内親王、遣右大臣正三位藤原朝臣良相於神社、告事由、其事秘者、世無知之也」とあるこれなり。○けなくに消えぬになり。

一首の意は、あの廣い空を照つてゆく月がサ、清いによつて、いくら、雲が隠しても、光は消えはせぬにサ、といふが表面の意にて、素より、曇の無い御身は、一旦、人が、いろく〜と無き名を立てても、おきに、明りが立つツイ、といふが裏面の意なり。

(評)所謂晴天白日の譬喩を、月にかへていへるまでなり。但、喜氣、楮表に溢るゝ觀あるが如し。

だいゑららず

よみ人ゑららず

いそのかみふるからをのの本がしはもとの心は忘られなくに
(釋)○いそのかみふるからをのの本がしはもとの心は忘られなくに。石上布留のことは、夏歌「石の上ふるき都の時鳥云々」の條に既出。古幹斧は、柄の古き斧にて、本は手元なりとは、寄居歌談に出でたる和田正主の考なり。又契沖は、布留枯小野にて、布留野の冬枯れたる時をいへりといひ、眞淵も、これに従へり。景樹は、古幹なる小野の略といへり、前説は、孫姬式に、舊枯野とあるによりていへるなめれど、牽強にして、語を成さざるはもとより、後説と雖も、猶妥當を缺けるが如し。又、大和の地名とするは、舊註の説なり。本がしはは、景樹が、若生に對へたる名に

(八一)

て、元木の柏なり。野には、古木、若木立交りて、實に然るものなりといへるぞ宜しかるべき。雅嘉は、柏は、梢の方は散りても、本の方に、葉の残りてあるものなれば、本柏といひ、本心を忘れぬといへる譬喩の序に用ゐたりといへり。

一首の意は、石の上ふるからをのの本柏のもとといふやうに、もとからの心は忘れぬにサ、さう思つて下されとなし。

(評)秋上、躬恒の歌、

秋はぎのふる枝に咲ける花見れば本のこころはわすれざりけり

といふは、これを本歌として詠めるが如し。景樹曰く、この歌、その頃もてはやして唱へたりしならむ、孫姫式に、難波津の歌と並べていへるにて知らる、その歌さま、實にめでたければなりといへり。序の意解、なほ心ゆかず覺ゆれば、今は、姑く、是非の評を下さず。

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をある人ぞくむ

(釋)○野中の清水 舊くは、播磨國印南野にありといひ、十六夜日記にも、同じ趣にいへり。又、一説には、大和國布留野にありといひ、貫之集、「石の上布留野の道の草分けて清水汲みには又も歸らむ。寂超法師」昔見しふる野の澤の忘水なに今更に思ひいづらむ。堀川初度百首「いにしへの布留野の道を尋ねきて清水を猶もむすびつる哉」などを證として、布留の社は、崇神帝の時の

鎮坐にて、瑞垣の久しき所なれば、昔より、舊き心にいひなし來れるより、古野といふ意になして、いにしへの野と續けたるかといへり。後説、や、勝れるか。但、布留野の社云々は従ふべからず。只、布留の野中に、よき清水ありて、遂に、野中の清水と、固有名詞にいはれたるを、今は、その水のよかりし昔をかけて、いにしへのといへるなり。○ぬるけれど 温けれどなり。水は、冷冽なるを以て勝れりとす、温きは下なり。

一首の意は、つめたいよい水と云うので、名の高かつた、昔の野中の清水は、今は、もう生温いけれども、やはり、昔の事を知つて居る人はサ、今でも汲んで飲むワイ、といふが表面の意にて、この節衰へたれども、前方繁昌であつた時の事を忘れぬ人は、やはり訪らうてくる、ワイ、といふが裏面の意なり。

(評)昔よかりし人の詠なるべし。今は、世に悔りすてられたるものの、猶二三、故舊の情を忘れぬ人あるを嬉しき喜びて、みづから慰藉したる、その衷情憐むべきものあり。况や、暗喩の工を添へたるをや。

いにしへのまづの苧環いやしきもよきも盛はありしものなり

(釋)○いにしへのまづの苧環 いにしへのしづは、上代に始りし倭文布をいふ。青と白とを織りませたれば、今いふ縞織に似たり。これを、シヅリとも、シドリともいふは、倭文の義織なり。苧

環は、その倭文を織る料の卷子なり。さて、このしづの苧環を、卑しきの枕とするに就きて、眞淵は、倭文に、賤の音あるが故といひ、正義に引ける榎並隆璉の説には「卷子は、いやが上に巻くものなれば、彌繁といへるを通はせたるならむ」といへり。後説可なるが如し。

一首の意は、身分のよい者ばかりでは無い、我等がやうなる賤しい者でも、一度は、男盛はあつたものであるワイとなり。

(評)老いたりとして、さのみ侮り給ふな余意あり。身柄卑き老人の、世を憤りての作なるべし。よきものは、只いひ添へて、調を諧へたるなり。自負の言、次なる歌の「今こそあれわれも昔は」といへると、その趣を同じうす。

結句、六帖に、ありこしものをとあり。

今こそあれわれも昔はをとこ山さかゆく時もありこしものを

(釋)○今こそあれ、今こそ、かくてあれの略。○をとこ山、山城國久世郡男山なり。石清水八幡宮の鎮坐します山、清和天皇の貞觀元年、八幡の神を、宇佐より勧請す。○さかゆく、榮行くなり。

一首の意は、今こそ、このやうに、年も寄つて老い朽ちたれ、自分とても、昔は、男山の神威の榮行くといふやうに、一廉の男と榮え行く、若盛の時節もあつてきたものを、あゝくち惜しいこ

とよとなり。

(評)清和の朝の頃の人の作なるらむ。初句を、字餘りにていひ切りたる語調の強さ、われも昔はと思ひ入りたる自負の氣持、ありこしものをといひさしたる餘情、皆これ、無量の感慨を惹く所以なり。われものものは、人に對へていひ、時ものものは、今衰へたるに當てていへり。四句は、男山は、山上に、社殿あれば、阪行くにかけたるなりといへる説もあれど、俗解なり。

世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり

(釋)○津の國の長柄の橋、攝津國長柄郡長柄の里なる長柄川に架けたりし橋なり。元明帝の和銅六年に、國郡の名を、二字に定めて、好名を用ゐしめられし時、津の國を、攝津の國と稱せらる。されど、打解けたる假名物や、歌などには、昔のまゝに、津の國といひならへり。

一首の意は、この世の中に、段々蓄くなつて衰へ行くものは、よく思ひまはして見れば、外には無い、たゞ、あの津國の長柄の橋と、自分とであつたワイとなり。

(評)老人の感懷なり。文德帝の仁壽三年十月、攝津國よりの奏言に、

長柄三國兩河、頃年、橋梁斷絶、人馬不通、請准堀江川置二艘船、以遠濟渡、許之、

と見えれば、この歌は、仁壽より以前、長柄の橋梁の、いまだ斷絶せざりし時代の人の作なるべし。猶思ふに、頃年云々とあれば、橋梁の腐朽も、年久しきことにて、當時、物の舊りたる例

には、この橋を、専らいひならへりけらし。されば、われの對比に取出づるに、この橋を以てして、聴者の記憶を喚び起し、彼の事態を借りて、我が感懐を映帶せしむ。蓋し、作者の狡手段なり。長柄に、存在の意を寄せたりとするは、穿鑿に過ぐ。

(八一六)

さゝの葉にふりつむ雪のうれを重み本くだちゆくわが盛はも

(釋) ○うれ 未なり。○くだち くだりの古言。○はも 嘆辭。

一首の意は、笹の葉に降りつもる雪が、笹のするの方が重さに、斜に靡いて、本の方が崩れて、段々に墮ちて行くが、まづ、そのやうに、段々に傾いてゆく、自分の若盛であるはまゝとなり。

(評) 四十を越したる人などの、老の將に來らむとする述懐ならむ。四句までは序なり。上に、雪のとあれば、くだちゆくも、雪のくだつなり。笹の本のくだつにはあらず。誤解し易ければ、一言しつ。

初二句、一本に、わが宿の竹の白露とあり。結句、六帖に、わが心かなとあるは、更に聞えず。

大あらしきの森の下草おいぬれば駒もすさめず刈る人もなし

又は、櫻あさのをふの下草おいぬれば

(釋) ○大あらしきの森 萬葉集十一に、「大荒木の浮田の杜」とあるも、同處か。神名帳に、大和國宇智郡荒木神社あり。その森なるべし。能因歌枕には、「山城國にあり、尤もあらはなる森なり」とあり。○すさめず すさむは進むこと。○左註、櫻あさは、櫻の色したる花のさく麻とも、櫻花の色に似たる麻ともいへり。をふは麻生にて、麻畑なり。

一首の意は、大荒木の森蔭の草も、盛過ぎてからは、馬も喰ひたがらず、又、刈る人も無いワイといふが表面の意にて、人も、このやうに、年が寄つてからは、皆厭がつて、寄りつく人もないワイ、といふが裏面の意なり。

(評) 大荒木の森をいへるは、作者の住まへるあたりなればならむ。下句の層々反復、詠嘆の味、いよく永し。草も、馬にすさめられざるに至りては、もはや論外といふべし。傷心の句なり。かくて、諷諭の嘆意は、こゝに活躍す。作者を、六帖に、小町とあれど、更に、かの娘子の風調にあらず。しかも、婦人の口氣にあらず。櫻あさ、六帖には、櫻麻とあり。

數ふればとまらぬ物をとしといひて今年はいたく老いぞしに

(八一七)

ける

(釋)〇とし 疾しに、年をよす。

一首の意は、暫時もとまらずに過ぎて行くものを、早いといふ名の年と云うので、數へて見れば、忽ちの間に、今年は、存外に、甚だ、年寄にサなつたツイとなり。

(評)初句は、四句のうへにまはじて心得べし。

おしてゐるや難波のみつにやく鹽のからくも我は老いにける哉

又は、大伴のみつの濱べに

(釋)〇おしてゐるや 難波の枕詞。おしてゐるは、「襲ひたてるの約にて、波の高く襲ひ立ちてあるをいふ、難波は、そのかみ、浪の速きところなりし故に、難波にかけたなり。〇難波のみつ みつは御津にて、官船の出入する津なれば、貴びていへり。〇左註、大伴のは、御津の枕詞なり。古語に、才徳勇威のあるを、稜威といひ又みづといへり。古事記に、「みづくし久米の子らが」とあるこれなり。〇往古、大伴氏は、武勇の家柄にて、みづくしきより、うつりて、御津にかけたるならむ。一首の意は、あの難波の御津でやく鹽は辛いものであるが、そのからくも、即ちつらくもまゐ、自分、年が寄つてしまつたことよとなり。

(評)三句までは序なり。

三句、六帖に、難波の浦にとあり。又、和歌九品に、荒沙の沙の八百會にとあるはわろし。

〇 おいらくのこむと知りせば門さしてなしと答へてあはざらましを

この三つの歌は、昔ありけるおきなよめるとなり。

(釋)〇おいらく 賀、業平、「櫻花ちりかひくもれおいらくの來むといふなる道まがふかに」の條を看よ。

一首の意は、この老といふものが、自分を尋ねて來うといふことを、早く知りもしたならば、門をしめて置いて、留守と云うて、逢はずに居ようであつたものを、さうしたならば、このやうに、年は取るまいとなり。

(評)老の擬人、既に、一つの趣向なるに、なしと答へて逢はずに居るの痴呆の想は、このをかき所以にして、覺えず破顔せらるゝなり。業平の「櫻花ちりかひくもれ」の歌よりは、やく古き世のものか。さらむには、これを據として「來むといふなる」と詠めりとすべし。左註は、もとよりの事にて、いはでもありぬべきなり。すつべし。

さかさまに年も行かなむとりもあへず過ぐる齡やともにかへると

(八二〇)

(釋)一首の意は、月日がまあ、逆に、あとへいつてもらひたいツイ、何する間もなく經つて行く齡がサ、その月日と一所に、あとへ戻つて、若がへるかと思へば、試にサとなり。

(評)あとへ、年を取りたしとは、よく、人のいふことなり。しかし、當時には、尖新の語なりけむ。

とりとむむる物にしあらねば年月をあはれなうと過しつる哉

(釋)一首の意は、月日のたつのは、取止めらるゝ物でサないから、仕方がなさに、あゝさて、愛いことぞと、歎きながら過したことよとなり。

とどめあへずうべもとしとはいはれけりしかもつれなくする齡か

(釋)〇としとは、疾しに、年を寄す。〇か 嘆辭。

一首の意は、年のたつのは早くて、止めうと思つても、止むる間もない、道理でまあ、疾しとい

ふ名をつけられたツイ、それは、仕方が無いとしても、そのうへにまあ、年につれて、氣強、過ぎてゆく、自分の齡であることよとなり。

(評)年ゆるには、重ね、難儀なる目を見る由なり。諸註、しかもの意を解き得たるなし。

鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

此歌は、ある人のいはく、大とものくろぬしがなり。

(釋)〇鏡山 近江國蒲生郡、古は、野州郡のうちなり。

一首の意は、鏡山といふ山なら、人の影が、よく映るであらうほどに、年を、ひどく久しう經てきたこの身は、老いくちたかどうかと、どれ、たち寄つて見てゆかうツイとなり。

(評)初老の程の人の、鏡の宿あたりを過ぎての作なるべし。山口ながら、年寄の部に入りたれば、鏡山の名を聞きては、面影も變りやしつらむ、いざたち寄りてとさればみたるなり。全くの老人ならむには、老いやしぬると疑はむやうなきをや。前人、皆、箇中の消息をえ曉らで、耆老の人の作としたり。疎漫といふべし。鏡山の名によりたる著想は凡なれど、立ち寄りて見むといへるは詩的なり。

左註に就いて、眞淵は、例の採らねば、論なし。景樹は、黒主は、近江の滋賀郡大友郷の人なれば、立ち寄りて見むとやうに珍しむべからずといひ、又、この歌は、老いて後の意なるに、黒主

(八二二)

の遊賀にありしは、若き程なり、女と戯れたるにて知るべしといひて、黒主説を否認したり。然れども、假令、同國同郡なりとも、未見の地ならむには珍しむべく、况や又、これは、元來、狂痴の想を歌へるものにて、まことに珍しがりて詠めるにはあらざるべし。女と戯れたる云々は、既にいへる如く、四十の聲を聞きたるばかりの初老の人ならむには、常あることなり。されば、景樹の論據、極めて薄弱なり。故に、必ず、黒主のといふ證もなく、又、あらずといふ證もなし。姑く、左註を存するものなり。

業平の朝臣の母のみこ、長岡にすみ侍りける時に、なりひら宮づかへすとて、時々も、えまかりとはず侍りければ、しはすばかりに、母のみこの許より、とみのこととて、文をもてまうできたり。あけて見れば、詞はなくて、ありける歌。

おいぬればさらぬ別もありといへばいよく見まくほしき君哉

(釋)業平の朝臣の云々 この詞書、勢語にもありて、異れるところ多けれど、長ければ省きつ。母のみこは、桓武帝の皇女伊登内親王なり。長岡は、山城國乙訓郡築冠井にありて、桓武帝の延暦三年遷都の地、古來、この地を、大極殿と稱せり。とみは、頓の字音にて、俗の急用の意。○さら

ぬ別 さらぬは、え去らぬことにて、遁れ難き別、即ち、人世に於ける死別をいへるなり。

一首の意は、今は、親子が、都と長岡とに、別々で居るが、そればかりか、このやうに年寄つては、世の中に、是非とも遁れぬ別も、またあると云ふことなれば、それが氣になつて、常々逢ひたく思ふ其方に、いよく、この頃は逢ひたく思はるゝことよとなり。

(評)作者伊登内親王は、夫阿保親王とは、叔母、甥の關係なれども、阿保親王は、父帝の壯時の初孫にして、承和九年五十一歳にて薨せられ、内親王は、御姉甘南美内親王が、弘仁八年に、十八歳にてまじしより推算すれば、承和九年に、四十三歳よりは若くておはせしものなること著し。されば、貞觀三年薨去の御時は、六十歳程と見て誤なかるべく、業平は、時に三十七歳なり。

「とみの事とて」とある詞書と、この歌とを併せ思ふに、内親王が薨去の前年の師走、心地煩ひて、こたびはと思し召し給ひし折のことと知られたり。夫親王に後れてより、父帝の、一旦遷都ありし長岡の舊土に寡居すること、二十年に垂んとせり。その愛子は、世過ぎ、身過ぎの京住居、公務に忙殺せられて、僅々一里内外の道ながら、往省する遠だになく、殆ど、生別に等しき觀あり。剩へ、さらぬ別の死に目に近き顔齡の病身なり。況や、今は師走にて、又しも、一箇の老を加へむとするをや。いかんぞ、いよく見まくほしき感起らざらむ。眞にこれ、心の聲なり。彫琢の語の、遠く及ぶところにあらず。さらぬ別もと、婉曲にいへるに、凄愴の意、殊に活躍す。もよ、離居の生別に對へたる辭にて、下のいよくの語も、その響を受けてこそ落着するを、諸註、別のといふも同じやうに解きなしたるは、粗しといふべし。

句一本及び、伊勢物語に、別のとあり。このわろき由は、上にいへるが如し。恐らくは、次なる返歌の詞のまぎれしならむ。

(八二四)

かへし

なりひらの朝臣

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため

(釋)一首の意は、何卒、世の中には、遁れぬ別などいふことの無いやうにしてほしいことよ、親の壽命を、千年もあれかしと歎いて願ふ息子の子の爲にサとなり。

(評)單に、子の爲といひても聞ゆることを、人のと修飾したるが、親持の子の爲にといはむ程の意ありて、多様の姿致を生ず。萬葉、「人の祖の立つること立て」「人の子は祖の名絶たず、大君にまつろふもの」と、又、後撰集兼輔、「人の親の心は闇にあらねども」の類、皆これなり。さて、歌は、世の中の人の子にかけていへるさまにて、中に、わが事は含めるなり。真情眞詩。

四句、伊勢物語に、千代もと祈るとあり。又、眞字本伊勢物語には、齋の字をかきたれば、千代もといはふと訓むるべし。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

ありはらのむねやな

白雪の八重ふりしけるかへる山かへるくも老いにけるかな

(釋)〇かへる山 離別、「かへる山ありとは聞けど云々」の條に出でたり。〇かへるくも かへりくといふべきを、かへる山の語調を承けていひかへたるなり。かへしくといはむに同じ。一首の意は、自分の頭はまゝ、雪の、幾重くも降り積つたる北國の鹿藪山のやうに、眞白になつて、その山の名のかへるがへるも、ひとく年寄つたことよとなり。

(評)山に寄せて、頽老を歎けるなり。山の雪を、白髮頭に喩へ、しかも、八重ふりしけるは、かへるくもにかけ合ひたれば、打任せたる序歌にはあらず。さて、寛平后宮の歌合の歌は、寛平五年の撰なる菅家萬葉に收められたれば、歌合は、寛平の初年に行はれしものなるべく、作者の父業平は、寛平元年より十年前なる元慶四年に、五十六にて卒したれば、假令、業平存命なりとも、寛平歌合の頃には、六十五六の齡なり。その子たる作者棟梁の齡の若からむこと思ひ遣るべし。歌の趣、これに適はず。さりとして、擬人して、山のけしきを詠めるものとも思はれず。前後の都立にもかかはぬことなり。或は題詠か。然れども、古人は、題詠にても、述懐などには、虚構して詠むとはかりき。されば、棟梁の歌にはあらざるべきか。姑く、疑を存す。四句、顯本に、かへすくもとありて、定家も、異存なき由なれど、かへる山を打返したること明なれば、いかゞあらむ、新撰萬葉にも、「白雪之八重降敷留還山還々管(茂の字)老丹莖留鈍」とあるにて、本文の方正しきを知るべし。

おなじ御時うへのさぶらひにて、をのこどもに、おほみき

(八二五)

給ひて、おほみあそびありけるついでに、つかうまつれる。

としゆき朝臣

おいぬとてなどかわが身をせめきけむおいずばけふにあはま
しものか

(八二六)

(釋)うへのさぶらひは殿上の侍所。おほみあそびは大御遊にて、管絃の御遊なり。○せめきけむせめきは迫めきにて、迫めくと活く。めくは、形容の接尾語なり。毛詩に、「兄弟鬩干牆、外禦其侮」とある、鬩の字を訓ませたり。鬩は、註に「鬩很也」とあり。争ひもとること、いさかふことなり。責め來けむの意に解けるも一説なり。

一首の意は、ひとく、年が寄つたと云うて、我とわが身を、これまでなせに責めたげたことであつたらうぞ、よく思うて見れば、年の寄つたは嬉しい事かな、かう年の寄るまで生きて居すば、めでたい今日に逢はうものか、いや、逢はるゝものでないゾイとなり。

(評)老を賛して喜べるは、老を歎ける餘の強語なり。面に笑ひて、心に泣く、同情に堪へたりといふべし。二つのか、上のは疑辭、下のは反動辭なれば、こともなけれど、おいの語の重複したるは、洗煉を缺けりといふべきか、作者は、わざとしたるなるべけれど。

二句、六帖に、などやとあるは誤れり。家集に、わが身などてかとあるも、意とはらず。

題あらず

よみ人あらず

ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬ
ば

(釋)○ちはやぶる宇治の橋守 ちはやぶるの解は、秋下「千早ぶる神代も聞かす云々」の條にいへり。こゝは、宇治とはいはむ枕詞に用ひたり。冠辭考に「宇治は、稜威と同音にて通へば、千早ぶる宇治といひ下したり」といひ、萬葉古義に「宇治は、俗に、いちある人、いちはる、いちのわるきなどいふと同音にて、(意地とかくはあて字)平穩ならず、烈しき意ある言なる故に、ちはやぶる宇治と續けたり」といひ、古説は、物部の八十氏は逸隼ぶるが故に、千早ぶる氏と續け、さて、宇治にいひかけたりといへり。橋守は、野守、山守、關守などの類にて、宇治に、橋守のあることは、日本紀天武の卷に「命_ニ免道守橋者_ニ遮_ル皇太弟宮舍人運_ニ私糧_ニ事_トと見えたるにて知らるべし。○なれ 汝なり。

一首の意は、宇治の橋守よ、外の人よりは、其方をサ、取分けて不憫な者ぞとは思ふゾイ、自分と同じやうに、ひとく年寄つた者と思ふによつてサとなり。

(評)わが老によりて、人の老を憐。所謂相見互の同情なるべし。打聽の或説に、才徳ある人の、世に沈みてあるを憐みて、橋守に寄せていへるかといひ、眞淵は、宇治に住める人の、宇治の橋守に寄せて、そのいふかひなくて年老いたらむを、高貴の人の憐み給へるにてもあるべしといへり。

(八二七)

いづれも面白き説なれど、「題知らず」とあれば、さまでは、想像の説を用ゐがたし。

(八二八)

われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ

(釋)○住の江の岸の姫松 住の江の松のことは、賀部「住の江の松を秋風云々」の條にいへり。所は、細小にして愛すべき物を形容するに用ゐる語なれど、こゝは、單に松といはむに同じ意なり。一首の意は、この住の江の岸の姫松は、自分が見はじめてから、もう久しいことになつて居るが、一體、抑もの始からは、いか程、年を経てきたことであらうぞとなり。

(評)さばかり久しく見來れる作者は、即ち老人なり。萬葉集七、

いにしへのことは知らぬを我見ても久しくなりぬあめのかぐ山

を踏襲したれど、語調の流暢にして、姿清げなるは、この特色と稱するに足らむ。初句、わがと讀むべき由、景樹の説あれど、僻言なり。

住吉の岸のひめまつ人ならばいくよか經しと問はましものを

(釋)○住吉 住の江と同じ。攝津國住吉郡(今東成郡に合セリ)。吉の古訓ニなり。住吉と書きて、猶「スミノエ」と訓むべきを、夙く、この頃は「スミノシ」と訓みけるなり。下にも「住みよしと髪はつ

ぐとも長居すな」と詠めり。

一首の意は、住吉の岸の姫松は、大層、年久しい物のやうに噂せらるゝが、これが人間ならば、いか程、年を経たかと問うて見ようものを、人間ならぬ故、仕方がないワイとなり。

(評)この種の構想は、先型あることなり。景行紀に、日本武尊の御歌、

尾張にたゝにむかへる、をつの崎なる一つ松あはれ。一つ松、人にあるせば、きぬ著せましを、太刀佩けましを、一つ松あはれ。

これ、最も古く、物に見えたる、いとめでたきものならむ。

をぐる崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを(本集大歌所)

くり原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを(伊勢物語)

また、その響をつぐものなり。中に、この住吉の松は、やゝ、狂痴の想にぞしくて、人ならばと設けいへる證うすぎが如し。但、こゝは吹毛の難をいふのみ。格調、すべて、おなじ儻なるべし。

初二句、六帖に、玉津島入江の小松とあり。

あづさ弓いそべの小松たが世にか萬代かねて種を蒔きけむ

このうたは、ある人のいはく、柿本人まろがなり。

(釋)○あづさ弓 解は、春上「梓弓おしてはる雨けふふりぬ云々」の條に既出。こゝは、礎といは

(八二九)

ひ枕詞なり。梓弓射といふ響に、磯をいひかけたり。○かねて かけてといはむに同じ。

一首の意は、この磯岸の上の小松は、ひどく古びて居るが、昔、いつの誰が時代に、これから後何万年もかけて、生え茂れと思つて、種を蒔いて置いたことであつたらうかとなり。

(評)この小松は、二葉のにあらず、巖に根させる老樹の矮松なり。宣長が、小松は、たゞ松なり、小きをいふにあらずといへるは、強言なり。樹こそ古りたれ、猶小松なれば、普通の長立タカダテとならむには、萬年の久しきを要すべく思はるより、さては、たが世にか、萬代かけて、かくは蒔きおきけむと訝かれるが、この趣向にて、面白きなり。左註の非なることは、この風調を知る者の、ひしく點頭くところならむ。

かくしつゝ世をやつくさむ高砂のをのへに立てる松ならなく

(釋)○高砂 播磨國加古郡高砂港のあたり。高砂は、もと普通名詞にて、いづくにもあれ、濱風の吹き上げたる砂の積りて山となれるをいふ。やがて、松など生ひて、眞の山といひつべし。播磨の高砂も、さる景色の所なるより、一轉して、これは、固有名詞に呼ばれたるなるべし。序文に「高砂、すみの江の松も、相生のやうに覚え」とあるは、この歌に據りて書けりと覺しければ、撰者も、播磨の名所としたることうつなし。

一首の意は、自分は、この年になるまで、何一つ仕出したる事もないが、毎日毎日、このやうにして、つい、一生を送つてしまふであらうか、あの高砂の山の上に立つて居る松こそ、何の役にも立たずに、年久しうある物なれ、自分は、その松でもないのにサとなり。

(評)世に無用の長物たらしむことを慚悔せる對比に、高砂の松を取出でたる、無量の感慨を寓せり。或は、世に、大材を抱ける者の、老境に至るまで、時に合はずして沈淪したるを嗟傷せるものか。こは、試にいふのみ。

藤原興風

たれをかも知る人にせむ高さごのまつもむかしの友ならなく

(釋)○知る人 知己なり。

一首の意は、自分は、かう年寄つて、今では、生き残つて居る友達も無いによつて、誰をまゝ近付として、交をせうか、あの高砂の松も、年久しい物なれど、それも、昔からの友ではないによつて、話相手にもならぬツイとなり。

(評)上句を、下句にてことわりたるなり。松の有をいひて、故舊の無を嘆ずる對照の間、無限の感を生ず。白居易の「十八酬和九人無」と同じく、老境に於ける孤獨の酸味思ひやるに堪へたり。高砂は、山の意にて聞ゆれど、撰者は、これも、名所として採れるならむ。

わたつみの沖つ潮合にうかぶ泡の消えぬ物からよる方もなし

(釋)○沖つ潮合 潮合は、さしひく潮の満ち合ふところ。○物から 物ながらの意。

一首の意は、海の沖の潮合に浮く泡は、消えずにはありながら、寄りつく場所もないが、自分も、その泡のやうに、命は消えずにはありながら、何處と云うて、たよる所もないワイとなり。

(評)おなじはかなき物ながら、磯邊の泡は、猶寄りつくところあるべし。然るに、これは、沖つ潮合の泡なり。老大、猶、志を得ずして、世に浮沈する意を寄託し得たり。真淵が、上は、消えぬのからといはむ序なりとのみいへるは精しからず、全然譬喩なり。

四句、六帖に、たえぬ物からとあるはわろし。美成が、この歌、或人の本に「よみ人しらす」とあり、興風集にも、以下三首、ともに見えす、善本なるべしといへり。さる証本あらば、諒に従ふべし。

海神

わたつみのかざしにさせる白たへの波もてゆへるあはぢ島山

(釋)○わたつみ こゝは、海神の名とせり。陰陽二神、國産みませる次に、海神を産み給ひしことを、古事記に、「次生海神名大綿津見神」、日本紀に、「又生海神等一號三少童命」と見えたり。古事記

傳に、「師説(真淵)に、綿は海、津は助辭、見は毛知の約りたるにて、海津持の意なり、これ、海を持つ神なればなり」とあるが如し。海を「ワタ」といふは、渡る意より出づとぞ。さて、轉じては、直に、海のことにも用ゐたり。○かざし 挿頭なり。冠帽の巾子の脇に、造花、或は、生花を挿して、飾とすることあり。○ゆへる 結へるなり。

一首の意は、海の神が、簪に刺してお出なさるゝ白波を以て、くるりと結びまはして居る淡路島であることよ、さても面白い景色よとなり。

(評)播磨のあたりより、海越に見渡して詠めるならむ。海神の挿頭、おのづから、崇高の觀念を興ふ。白、妙のは、枕詞ながら、こゝは、その本義に立ち返りて、白き色相を聯想せしむ。

わたの原よせくる波の志ばくも見まくのほしき玉づ島かも

(釋)○波の 波の如くの意。○玉づ島 紀伊國海部郡若の浦(今の和歌の浦)にあり。三代實錄に、玉出島とかかれ、空穂物語に、玉出る島ともあり。されば、つは濁りてよむが正し。玉津島明神の社あり、衣通姫を祀る。

一首の意は、この海原から、絶間もなく、しばく寄せてくる波のやうに、何處も来て見たいと思ふ玉津島であることよとなり。

(評)さても面白き景色かなの餘意あり。有心の序歌なり。玉津島の景は、聖武帝、いたく愛で給ひ

登_レ山望_レ海、此間最好。不_レ勞_二遠行_一、足以遊覽。故改_二弱濱_一、名爲_二明光浦_一云々。春秋二時、差_二使官人_一奠_二祭玉津島之神_一明光浦之靈。と詔らせ給ひき。爾來、奈良人の賞翫するところとなりて、以て、この朝に至れり。今は、海潮減退して、昔時の觀なしといふ。

なには瀉潮みちくらしあま衣たみのの島にたづ鳴きわたる

(釋)○あま衣たみのの島 あま衣は雨衣にて、たみのの島のといはむ序に用ゐたり。和名抄に、「和名美能、雨衣也」とあるを思ひ合はすべし。たみのの島は、攝津にありと、古註にいへど、今は、場處不明なり。秋成の説に、「今大わたと呼ぶ里あり、近昔までは、みのわたと呼びしなり。是たみののわたりなるべし。今、難波とよぶ里も、そこに遠からず」といへり。

一首の意は、あゝ、難波の浦の干瀉に、潮が満ちてくるらしいワイ、その證には、あのたみのの島へ、鶴が飛び騒いで鳴いて渡るワイとなり。

(評)神韻を以て勝る。又、ア列音多くして、聲韻爽快なり。

難波瀉沙干にたちて見わたせば淡路の島にたづ渡る見ゆ(萬葉七)
わかの浦に沙みちくれば瀉をなみ蘆邊をさしてたづ鳴きわたる(萬葉六)

の如き、皆同型にして、格調蒼古なり。但、當代より論せば、萬葉の糟粕、奈良人の餘睡を祇れるものならむ。

貫之が、いづみの國に侍りける時に、大和よりこえまうで

きて、よみてつかはしける。 藤原たゞふさ

君を思ひおきつの濱になくたづのたづねくればぞありとだに

聞く

(釋)○思ひおきつの濱 思ひ置くに、沖津の濱をかけたなり。濱は、和泉にありとぞ。

一首の意は、私は、貴方のことを、心にかけておいて忘れずに、この沖津の濱に鳴く鶴の名のやうに、尋ねて來たればこそ、御無事で御出なさるといふことだけなりとも聞いたれとなり。

(評)それに引換へ、貴方からは、一向、音信も給はらぬことかなと、暗に怨じたる餘意あり。忠房が、大和守となれるは、この撰集後、延喜廿二年のことなれば、當時は微官にて、大和に在任せしものか。貫之が、蟻通明神の社頭にて、歌詠みしけることをも思ひ合はすれば、これも、和泉の國衙にありける小吏なりけらし。されば、公務などにて、和泉の沖津の濱まではきたれど、私に、閑を偷みて、貫之を訪はむことなり難かりけるより、歌のみ贈りしものならむ。

かへし つらゆき

おきつ浪たかしの濱のはま松の名にこそ君を待ちわたりつれ

(釋) ○おきつ浪たかしの濱 沖つ浪高しといふに、高師の濱をかけたなり。濱は、和泉國泉北郡(もと大鳥郡) 高石の海岸、濱寺あたりなり。

一首の意は、あの沖つ浪の高いといふ高師の濱の、その松の名の通りにサ、自分は、とうから、久しう、貴方をお待ち申して居つたワイとなり。

(評) 彼より、なかつたづのたづねくればぞといひおこせるを受けて、此方も、高師の濱の濱松の名にこそといひて、疊音の巧を聞はせたる、時に取りて、興なからずやは。作者は、流石に老手なり。松を、待つに取做すは、例のことなり。こそその用法、後さまなるに注意すべし。この歌、拾遺集雜戀に再出したるには、詞書「和泉の國に侍りける程に、忠房の朝臣、大和よりおくれる返し」とあり。然れども、上なる忠房の歌に「尋ねくればぞ」とあれば、却りて、事實違ふべし。

なにはにまかれりける時よめる

難波瀉おふる玉藻をかりそめの海士とぞ我はなりぬべらなる

(釋) ○玉藻をかりそめの 玉藻を刈りといふに、假初をかけたなり。

一首の意は、たまき、京地より来て、この難波瀉の風景を見れば、さてく珍しく面白くて、歸ることも忘れて、當分、玉藻を刈る海士にサ、自分はなつてしまひさうな様子だワイとなり。

(評) 面白さに長居せらるゝを、海人になりぬべらなりと誇張したるを、手柄とす。

上句、六帖浦本に、生の浦におふる玉藻のかりそめにとあり。本文のにおれり。

あひ知れりける人の住吉にまうでけるに、よみてつかはしける。

みふのたゞみね

住吉とあまはつぐとも長居すなひとわすれ草おふといふなり

(釋) ○住吉 地名の住吉に、住み好しの意を寄せたり。○人わすれ草 人を忘るといふに、わすれ草をかけたなり。

一首の意は、貴方が、住吉に行かれたなら、所の名の通りに、住みよい處であると、海士は申さうとも、必ず、長居をなさるゝな、かの住吉の岸には、人を忘るといふ名の忘草が生えて居るといふことだワイとなり。

(評) 何分、早く戻り給への餘意あり。人は、大やうにいひて、自身を含めたるなり。住吉の神詣、假初の出立ながら、風光明媚にして、長居しぬべき處がなるより、忘草を撮み合はせて、一ふし巧みたる、又、初句の口合ひなど、皆、この作者の風骨なり。人わすれ草は、一寸面白きが、この作者のはじめたる造語にはあらず。既に、萬葉にも、戀わすれ貝と作り、この集聖滅の歌にも、戀わすれ草と詠める貫之のがあればなり。

なにはへまかりける時、たみの島の島にて、雨にあひてよめ

る。

雨によりたみのの島をけふゆけばなには隠れぬ物にぞありけ

つらゆき

(八三八)

(釋)○たみのの島 上に既出。○なには 名にはなり。難波を寄せたり。

一首の意は、雨が降るによつて、筏といふ名をめてにして、この難波のたみのの島を、今日行けば、存外に、名には、身體カラダの隠れぬものでサあつたワイとなり。

(評)やはり、さんくさんくに滞れたるはの餘意あり。俄雨に遇ひて隠れたるに、所しも、たみのなりしかば、名には隠れぬと思ひ寄せたり。さて、本の句をも、雨の降るによりて、もしやと、わざと、田舎に行きたるさまに構へなせりと、景樹のいへるが如し。但、縁語の仕立を主想としたる尖銳の格調、わが諾はぬところなり。

三句、顯本に、けふゆけどとあり。意は聞え易けれど、本文の方、含蓄ありてよかるべし。

法皇、西川におはしましたりける日、つる洲に立てりといふことを題にて、よませ給ひける。

あしたづの立てる河べを吹く風に寄せて返らぬ波かとぞ見る

(釋)法皇西川に云々 法皇は宇多の上皇。西川は大堰川なり。京都より西に當ればいふ。つる洲に

立てりは、鶴立洲の漢字題を譯せるなり。日本紀略に、「延喜七年九月十一日、天皇幸大堰河」と見えて、その前日に、「法皇召文人、賦眺望九詠之詩」とあり。鶴立洲は、眺望の一つなるべし。序文は貫之、歌人は、序者、及び躬恒、是則、賴基等なり。

一首の意は、あれは、白い鶴の立つて居る河邊であるものを、自分は、ついては、吹く風につけて寄せたまふかへらずにある波かとす、見るワイとなり。

(評)色相上の聯想より、浪を點出し、更に、寄せてかへらぬの巧を添へたり。さて、これは、この集奏進後の歌なり。

中務のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめて、遊びける日、法皇御らんじにおはしましたりけり。夕さりつ方、かへりおはしまさむとあける折に、よみて奉りける。

伊勢

水のうへに浮べる舟の君ならばこゝぞとまりといはましものを

(釋)中務のみこ云々 中務の親王は、宇多法皇の御子にて、玉光宮といはれし敦慶親王なるべし。

この親王、延長八年二月に、四十四歳にて薨せられしより逆算すれば、延喜の頃は十七八歳にて

(八三九)

おはしますなり。初冠し給ひて、直に、中務卿に任せられ、後、御弟敦實親王に、中務卿を譲りて、式部卿に轉じ給ひき。中務卿にておはせし程の御女を、中務と稱して、名譽の歌人なり。諸註、こゝを、敦實親王といへるは差へり。敦實親王は、この集撰進後の延喜七年に冠させ給ひ、尋いで、中務卿となり給へるなればなり。おろしはじめては、新造の舟を、始めて進水すること、遊びは、例の管絃の遊なり。法皇は宇多の上皇。〇とまり 舟泊なり。

一首の意は、水の上に浮いて居る、今日、御召になつた舟が、法皇様であるならば、こゝが、その泊所でありますと申し上げて、お留め申さうものを、舟でない法皇様には、さやうにも申し上げられず、お留め申さぬが、残多いことに存じ上げますとなり。

(評)舟の君ならばといへる空中樓閣、幻化の手段妙といふべし。作者は、中務の君の母なるよしなれば、この頃は、敦實親王の妻にて、亭主方として、法皇の御駕を迎へ奉りしものか。さては、法皇との關係は、すでに絶えたりしものと看做すべきに似たり。物の音、名残をかしよう、池の中島にすさび、木の香新しき朱のそほ舟は、汀の波にただよへり。見送仕うまつると、御車のへに侍ふ、一雙玉の如き人、御心ゆきて笑ましげに見おこせ給ふ法皇の御顔、この時の情景、おもひやるだに、限なくおもしろうなむ。況や、別れがてなるこの三十一字の歌聲、今日の掉尾の興を添へたるをや。

この歌、及び、上の歌の詞書に、「法皇云々」とあるが、他の例にたがへるを訝りて、廣蔭が、後人の書入ならむと推し量れるは、却りていかゞなるべし。そは、宇多帝御在位中にかゝれるものは、

「寛平の御時」と書し、御讓位後にかゝれるものうゝ、御出家後は、「法皇」とのみ書けるなり。史によると、この帝、御讓位の後、朱雀院太上天皇と稱せられ、昌泰二年、太上天皇の尊號を辭して、單に、朱雀院とのみ稱せむことを請ひ給ひしかども、醍醐天皇さかせ給はざりしかば、これより、法皇と申すと見えたり。この集の詞書、正に、これに符合す。その差別の嚴なること思ふべし。猶、おなじ人の作を、一は良岑宗貞、一は僧正遍昭と書きわけたるが如し。

唐琴といふところにてよめる

眞せい法師

都までひゞきかよへるからことは波の緒すげて風ぞひきける

(釋)唐琴 備前の國なる泊とぞ。〇すげて 附けての音轉なり。

一首の意は、京まで、名の響いて聞えてある唐琴の浦は、どうして さやうにひゞいたかと思はば、波の糸をすげて、風がサ弾いて、音をたつるのであつたツイとなり。

(評)これは、無理のないこと、人間業にあらざればの餘意あり。唐琴より、響かよへるといひ、さて、波の緒に風の弾手の空想を案出せる、恰も、春蠶の糸を吐くが如し。たゞ、その縁語にからまれたるを飽かずとするのみ。

四句、六帖に、波の緒よりとあり。

布引の瀧にてよめる

在原行平朝臣

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる

(八四二)

(釋)布引の瀧 攝津國、今の神戸市の北端、布引山の半腹にかゝれり。雄瀧十五丈、雌瀧七丈餘。勢語の傳ふるところに據れば、「この山の上におりといふ布引の瀧見にのぼらむといひ、のぼりて見るに、その瀧、物よりことなり。高さ二十丈、廣さ五丈ばかりなる石の面に、白絹、岩を包めらむやうになむありける。さる瀧のかみに、蓑蓋の大きしてさし出たる石あり。その石のうへに走りかゝるは、小柑子栗セウカクシの大きにてこぼれ落つ」とあり。

一首の意は、丁度、緒につないである玉を引きしごいて撒きちらすやうなる、この瀧の水玉を拾うておいて、世の中の愛い時節の自分の涙にサ、借りてつかはうワイとなり。

(評)百尺の素練、絶壁に翻りて、大珠小珠を、瑠璃盆に跳らす。この絶景も、何の思ふところなくてこそ面白けれ、身はこれいかに、胸中高解の愁思は、ひげせども消し難きにあらすや。いきほひ、遂には、塵世のうきを感ずるに至りぬべし。乃ち、その時の涙として、かばかりおびたゞしき瀧の白玉をかるべしといふ。以て、その涙の甚しきこと知るべき、又、世のうきの一方向ならざる事見つべし。四句、豫定の語なり。ひろひおきてと、その意相應す。さらば、結句、からむと、未來にいふべきを、現在に断定せるは、強いひつめたるものなり。作者が、この布引に来れるは、下に、「田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふとちちに籠り侍りけるに」とある度ならむか。程も遠からぬ、同じ國內の名所なれば、排悶の便にもとて、訪ひけるならし。

布引の瀧のもとにて、人々あつまりて、歌詠みける時によめる。
なりひらの朝臣

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

(釋)一首の意は、誰ぞ、繫いである緒から抜いて、ばらくにちらす人がサ、あるらしいワイ、このまゝ、狭い袖に、包まれもせぬ程、うつくしい白玉が、絶間なしにまゝ、散りかゝる事よとなり。

(評)例の玉の緒、著想に珍しげなけれど、ぬき亂る人を捉へたるは、時にとりての思ひつきか。詞書も、その心して、「人々あつまりて」の一句を加へて、上のとわかちたり。瀧のしぶき、面をうちて、衣袂、皆沾ふあたりの歌まとの、興に乗じては、さる業する戯者イラツクモノなしと限らむや。その打解けて遊び耽りたるさま想ふべし。伊勢物語に、この歌を掲げて、「かたへの人、笑ふことにやありけむ」とあるは、正に、この意を得て書けるものなり。景樹は、勢語に、作者の兄行平も同伴したる由に書けるを見て、上なる行平の歌をも、同時の詠とし、この詞書を、後人の書入なりといひ、殊に、その説を立てむとは、「人々集りて」を、徒書なりとまでいへるは、歌の趣を無視したる妄論なり。何も、同時の詠とすべき確証なく、また、その必要なし。彼これ、更に相渉らぬ事と知るべし。

(八四三)

六帖に、四句、間なくもふるか、結句、袖のせばさにとある、いづれもわろし。

(八四四)

よし野の瀧を見てよめる

承均法師

たが爲にひきて晒せる布なれや世をへて見れどとる人もなき

(釋)よし野の瀧 萬葉集に、「鮎はしる吉野の瀧」など詠みて、吉野河の、早瀬となりて落ちたきつところなり。宮の瀧など、皆然り。

一首の意は、誰が著物にする爲にと云うて、引張つてはしてある、あの布であればかして、年月へて久しく見れども、いまだに、そのまゝにて、別に取入るゝ人も無いワイとなり。

(評)不思議なることかなの餘意あり。怪訝の意を、この性命とす。

六帖に、二句、かけて晒せる、結句、きる人ぞなきとあり。又、季吟の抄に、結句、とる人のなきとあり。かけては、垂水のさまなれば、吉野の瀧にはかなはずと、景樹のいへるよろし。又、結句、六帖のは、てには調はねば論なし。抄のも、本文に劣れり。

題をらす

神たい法師

清瀧の瀨々のしらいとくりためて山わけ衣おりてきましを

(釋)○清瀧の 清き瀧つ瀨は、清瀧なり。その固有名詞になれるものには、山城高雄山の麓なる清瀧川、最も有名なり。○山わけ衣 山を行く時の衣なり。山ごもりする僧、又は、隠士などの

服をいふ。

一首の意は、この清瀧の瀨々の水は、宛も、白い絲のやうであるが、これを、澤山繰りためて、山わけ衣を織つて著ようものをサ、さうもならぬが惜しい事よとなり。

(評)作者の身上相當の構想ならむ。出家の服は墨染なるべきをなど、いひ泥むべからず。さて、瀧の絲の混喩は、到底、奈良時代のものにあらず。或は、この歌にはじまれるか。後人の、みだりに踏襲するところとなれり。

龍門にまうでて瀧のもとにてよめる。

伊

勢

たちぬはぬ衣きし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

(釋)龍門に云々 龍門は、大和國吉野郡なる龍門山の龍門寺なり。山は、高さ三千二百餘尺。二條の瀑布あり、一を龍門の瀑、一を白倉の瀧といふ。いづれも、高さ三丈、濶さ三尺ばかり。寺は、今は退轉して、跡かたなし。扶桑略記に、

古老傳、本朝往年、有三三人仙、飛龍門寺、所謂大伴仙、安曇仙、久米仙也、大伴仙、有基無舎、餘兩仙室、今猶在云々。

懷風藻に、葛野王遊龍門山一絶、

命駕遊山水、長冠冠冕情、安得王喬道、控鶴入蓬洲、

など見えて、龍門に、仙人の住みし傳説ありけるなり。○たちぬはぬ衣きし人 仙人を、

(八四五)

天衣無縫などいひて、仙衣は、裁縫を要せずとなり。○山姫 山を守る女神。一首の意は、裁縫せぬ衣を著たりし昔の仙人も、今は居もせぬのに、何の爲に、山姫の、あのやうに、布を晒すのであらうぞとなり。

(許)垂水を、布と見立つること、すでに、瀑布の字面すらありて、何の奇だになし。これによりて、いかに、想を構ふとも、そは徒に、織巧に流るゝのみにして、詩味、いよゝ索然たらむ。このわたりの作者、惜むらくは、語言の末をおふに急にして、かの自然の大觀を忘れたり。銀河の、九天より落つる李青蓮が胸吐、いづこにかもとめむ。嘆すべきかな。この歌、仙衣をさらすを、山姫の仕業としたる詩的空想、なに、山姫の、といへる一番の嘲笑、いづれもをか。瀑布の布の中に、は、最もすぐれたり。

朱雀院のみかど、布引の瀧御覽ぜむとて、ふむ月のなぬかの日おはしましてありける時に、さぶらふ人々に、歌よませ給ひけるによめる。 たちばなのながもり

ぬしなくてさらせる布を棚機にわが心とやけふはかさまし
(釋)朱雀院のみかど云々 此は、宇多上皇が、大に遊幸せさせ給ひし昌泰元年、二年の間の出来事なるべし。○棚機 例の織女星なり。神代の棚機姫のことにあらず。

一首の意は、主なしにさらしてあるあの白布を、織女に、自分だけの取計で、借さるゝものならば、外の日はともかく、七夕の今日は借さうワイとなり。

(評)織女に借さむといふは詩的なれども、七夕祭には、物を手向くるにいふ套語にて、作者の新案にあらず。只、主なき瀑布の布を、けふの祭に取合はせたる當意のをかしさのみ。

ひえの山なるおとはの瀧をみてよめる。

たゞみね

おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしな黒き筋なし

(釋)ひえの山なる云々 山科の音羽瀧と區別せむとて、「比叡の山なる」と冠せたり。空穂物語に「住みわたりけるところは、そのあたりは、比叡の坂本小野わたり、音羽川近くて、瀧の音、水のことゑ、あはれに聞ゆるところなり」とある瀧の音は、この音羽の瀧なるべし。六帖、及び、源語に、小野山に、音なしの瀧をよみ合はせれば、或は、この瀧を、音無の瀧ともいひしか。○おちたぎつ 水の落ちてたぎること。

一首の意は、たぎつて落つる、この瀧の水上が、久しくなつて、年寄つてまうたさうな、みるところ、白髪ばかりで、黒い筋は、一すぢも無いワイとなり。

(釋)初二句、聲調よろしけれど、こは、萬葉にいくらも見えて、一種の成語となれり。唯、全體の調の勁健なるを、この特色とす。元來、國歌に、擬人を運用すること少ければ、耳なれぬ心地に

(八四八)

は、この歌などは、俳諧にも入りぬべく思はるゝなるべし。水上に、皆髪をかけたるといはむは、この歌を俗丁するのみならず、意のたじろぐことを知らせるものなり。よくよく味ひみよ。三句、打聽本に、年をへてとあり。語調、やゝよわし。

おなじ瀧をよめる

み つ ね

風ふけど處もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞありける

(釋)○さらぬ 去らぬなり。

一首の意は、風が吹けども、同じ所を去らずにゐる、あの白雲は、不思議のことと、よくよく見れば、昔から落つる瀧の水でサあつたワイとなり。

(評)忠岑、躬恒の兩歌仙が歌によりて想ふに、音羽の瀧は、垂水にはあらで、山腹の本繁きあたり、白泡立ちておつる溪流なるべし。この二首、同時の詠か、異時の詠か。そは明らかならず。結局、六帖に、瀧にざりけるとあり。

田村の御時に、女ばうのさぶらひにて、御屏風の繪御覽じけるに、瀧おちたりけるところ面白し、これを題にて、歌よめと、さぶらふ人におほせられければ、よめる。

三條の町

思せくこゝろのうち瀧なれやおつとは見れど音のきこえぬ

(釋)田村の御時に云々 田村の御時は、文徳天皇の御時なり。この帝の陵、山城國葛野郡田邑郷にあり。故に申す。女ばうのさぶらひは、女房達の詰所にて、即ち、臺盤所なり。清涼殿中、朝餉の間の南、鬼の間の北にあり。○思 名詞法なり。

一首の意は、人が、物思を詠へて居る心のうちには、音こそせね、瀧のやうにわかかへる物であるが、この繪の瀧は、その心の内の瀧であればかして、落つるとは見えながら、一向に、音が聞えぬワイとなり。

(評)戀の心を、瀧によそへて詠みなすことは、古歌にも、集申にも、例多かり。たゞ、心のうちの瀧を、一ふしとす。題畫の詠、おのづから、過巧の弊あるは、是非なし。二句のはてのの文字を、の如くの意と見ば、意、やゝ明快ならむも、この語勢は、しか打弛ひて聞き做すことを許さず。又、作者は更衣なれば、その人柄として、下には、おのが思をほのめかせりともいはるべけれども、さまであなぐる要なかるべし。

屏風の繪なる花をよめる

つ ら ゆ き

咲きそめし時よりのちはうちはへて世は春なれや色の常なる

(釋)一首の意は、咲きはじめし時から後は、長くうちつゞいて、世の中は、いつも、春であればかして、この花は、色が、常住おなじ事であるワイとなり。

(評)屏裡、常に、春風を藏する底の詩味あれど、措辭、やゝ冗漫にして、結句、ことに凡なり。繪にゆづりて、花の字を着けず。

屏風の繪によみあはせてかきける 坂上これのり

かりてほす山田の稻のこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

(釋)屏風の繪によみあはせて 繪に、おのが情をよみあはするなり。○こきたれて 扱き垂れてなり。

一首の意は、この繪にかいてあるやうに、刈つてはほす山田の稻をこきおろすやうに、涙を、はらゝ流して、雁のなくやうに泣いてサ、月日をたつるワイ、秋がつらいによつてサとなり。

(評)繪様は、かたへには、刈りほしたる稻塚ありて、賤の、稻をこきおろすところ、空には、雁のつらねて、鳴き渡るさまなるべし。初句、かりてに、雁をよせたり。秋上、躬恒、

うきことを思ひつらねて雁が音のなきこそ渡れ秋のうければ
と、全く同意ながら、一段、理趣におちて、措辭も、簡淨ならず。

古今和歌集卷第十八

雑歌下

題あらず

よみ人あらず

世の中は何かつねなる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる

(釋)○飛鳥川 大和國高市郡飛鳥を流る川。

一首の意は、飛鳥川を見れば、昨日まで、淵であつた所がサ、今日は、もう浅い瀬になるワイ、あの川でさへさうである、世の中では、何が、いつも變らぬ物か、いや、變らぬ物といふは無いワイとなり。

(評)廣蔭が、淵瀬の變らぬ繪に、古歌に詠まれたる飛鳥川すら變るなればと解したるは、まことに面白き新説なり。されど、古歌に、さか詠まれたる例を知らず。萬葉を檢するに、山川にて、瀬の早きこと、淀のあること、玉藻のおひたること、蛙の鳴くこと、身をさきすることなどのみ見たり。恐らくは、杜撰ならむ。さて、この飛鳥川は、あながちに、要あるにあらず、淵瀬の變り易き山川ならば、いつにても可なれど、只、きのふけふといへる因に、明日をまじへて、文としたるのみ。但、明日は、また、淵になるならむの意を添へてきかむは、蛇足なり。けふと飛鳥にい

り「飛鳥川あすさへ見む」と「飛鳥川あすも渡らむ」、「飛鳥川ゆきたむ岡の秋萩はけふふる雨に散りかすぎなむ」など歌ひし奈良朝歌人は、昨日今日明日とまで數へたてたる、この大胆に、舌を卷くなるべし。着想は、例の佛教思想にして、即ち、涅槃經の諸行無常觀なり。その奇警なる點は、餘り、變轉なき物のやうに、人の思ひすてたる地象に屬する川を拈出して、その證左としたり。また、措辭奇巧に。調、渾然として、一の浮辭漫辭なし。これ、千古、人口に膾炙せらるゝ所以か。

○

いくよしもあらじわが身をなぞもかく蟹の刈藻に思ひ亂るゝ
(釋)○いくよしも　いくよは幾世、しは強辭、もは歎辭。○刈藻に　刈る藻の如くにの意。
一首の意は、いか程長生すればとて、千年萬年もはサ、まああるまいと思ふこの身なるものを、なせまあ、かう、海士の刈る藻の亂るゝやうに、とつおひつ思ひ亂れて、苦勞するのであるぞとなり。

(評)浮世は、まゝ皮にせよやの餘意あり。人生いくばくもなし、李白が、
處世若大夢、胡爲勞此生、

と、その想相同じ、初二句の、理をいひつめたると、わが身を、と制限して、詩味を狭めたるとは、この、大に劣れる點なり。只、蟹の刈る藻の修辭を、この優れるところとせむか。初二句、

あらじと思ふわが身なるものをとあるべきを略きたり。諸註、今は、いくばくもあるまじきわが身を、もはや、盛過ぎたる人の述懐とせり。さては、いくばくもあらじなどあらでは當らぬ事なり。新撰六帖には、いくばくもあれども、彼によりて、必ず、此を解かむとするは非なり。又、四句、六帖に、かる藻のとあり。

○

雁のくる嶺のあさ霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

(釋)一首の意は、雁のくる時分の、その嶺の朝霧の曇つてあるやうに、心が晴れずにはかり、常住、おもひ事の盡きぬ、この世の中の愛さツイとなり。

(評)初二句は序にて、時の景物をあしらひたるなるべし。孟郊が、「出門皆有礙、誰言天地寬」の如く、韶酸の氣の迫るにたへず。

結句、六帖に、うさとあり。

小野たかむらの朝臣

中　ゑかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の

(釋)○背かれなくに　背くは、世を通るゝこと。

15

(八五四)

一首の意は、さうであつたとて、世を通れらるゝこともないのに、何ぞ、事がサあれば、まづ一番に、あゝ愛い世の中ぞと云うて、歎かれたワイとなり。

(評)こゝに悲観し、こゝに厭世す。只、しかりとて背かれなく、の理性のあるありて、わづかに、死の手を免るゝのみ。流石の野狂その人も、境遇の不平は、遂に、この愚痴に墮ちたるか。六帖に、初句、まかありとて、四句、歎かるゝとあり。又、新撰和歌には、結句、あれば世の中とあり。

甲斐のかみに侍りける時、京へまかりのぼりける人につ
かはしける。 をのゝさだき

み、やこ人いかにととはば山高みはれぬ雲るにわぶと答へよ

(釋)京へまかりのぼり まかるは、退出の意なるが、この頃は、行くと同意に用ゐられたり。

一首の意は、もし、京の人が、自分の事を、どうして暮して居ると尋ね問うたならば、山が高く、常住、雲の晴れぬやうに、心もはれぬ遠い國に、難儀して居ると答へてくれとなり。

(評)事にあたりたるさすらひの身にあらす、又、往むべき國もとむるにもあらす、大君のまけのまゝに、事とりもちて、民草をやはずべき官人にして、いふところ、かくの如し。高山のかひの國、處がらとはいへ、餘に女々しきを憾む。否、こは、人の同情を求むべく、わざと、旅愁を誇張したるのみ。下なる行平の「わくらばにとふ人あらば」と、全く同型なり。いづれか踏襲なるべき。

ぶんやのやすひでが、三河のぞうになりて、あがた見には、
えいでたゝじるといひやれりけるかへりごとによめる。

小野小町

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ
思ふ

(釋)ぶんやのやすひでが云々 三河のぞうは、三河國の椽にて、國司の三等官なり。あがた見は、

田舎見物なり。あがたは、上田アガタの略にて、田舎にある御料地をいひしが、轉りて、縣主の治むゝ地の稱となり、又、轉りて、地方官の任國をいひ、更に、田舎の稱となれり。えいでたゝじやは「えう出掛けまいかどうか」の意。

一首の意は、自分は、今では、ひどく難儀にくらして、身を愛いつらいと思つてゐるゆゑ、丁度、浮草の根がきれて、水のゆく方へ誘はるゝやうに、誰でも、誘うてくるゝ人があるならば、どこらへなりと往かうと思ふワイとなり。

(評)康秀が、縣見には、えいでたゝじやといひおこせたるを承けて、田舎見物位の洒落にはあらず、誘ふ水だにあらば、いづこへなりとも、往き切に參らむと答へたり。これ、一時の辞令なり。康秀の好意に對する挨拶なり。詞のうへにのみ泥みて、真に、田舎住せむとするものと連断すべからず。又、落花流水の風流消息ありと付度すべからず。さはいへ、彼が、當時、失意の境遇にあ

(八五五)

りける事は、論なし。春下、

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

後撰雜一、定めたる男もなくて、物思ひける頃、

養のすむ浦こぐ舟のかちをなみ世をうみ渡るわれぞ悲しき

などを思ふに、漸く、縮緬皺の、小鼻に寄るに驚き、さて、生涯の苦樂を託すべき、眞面目なる戀瀬を思はざりし不覺に想到して、懊惱煩悶に禁へざりし折も折、康秀が誘ふ水にあひけるならし。本居内遠が考に、當時、康秀五十餘歳、小町三十七八歳なるべくいへり。措辞巧慧、作者の才思を見つべし。詩の鄭風に、

籟兮籟兮、風其吹女、叔兮伯兮、倡予和女、

と、全く、その體製をひとしようして、聯璧の觀あり。

題あらさず

あはれてふことこそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ

(釋) ○うたて うたたの轉。○ほだし 古語ふもだし、馬の足を繋ぎとむる綱なり。

一首の意は、人を、あゝいとしいと思ふことがサ、この愛い世の中を、生憎に、えう思ひ切つてすてられぬ羸絆であつたワイとなり。

(評) わびて、世を背きなむなど思へる折の作なるべし。諸註、人の、あはれといひてくる、詞こそ、浮世の絆とはなれと解きたるは、面白きものから、いひ過したる嫌あり。新撰和歌には、二句、ことこそうけれ、結句、けりとあり。

よみ人あらさず

あはれてふ言の葉ごとにおく露はむかしをこふる涙なりけり

(釋) 一首の意は、昔の事を思ひ出して、あゝと歎きたび毎に、涙がこぼるゝ、すれば、そのあゝといふ言の葉に、ひとつゝおく露は、涙であつたワイとなり。

(評) 言の葉の混喩より、涙を露にいひなしたる隱喩、意巧に、詞簡淨に、調流諧なり。但、珠はらひぬ。

○

世の中のうきもつらきもつげなくにまづしる物は涙なりけり

(釋) 一首の意は、世の中の愛いことも、つらいことも、云うて聞かせもせぬのにまあ、存外に、一番に知るものは、涙であつたワイとなり。

(評) 愛きにつけ、つらきにつけ、ちききに、涙のこぼるゝを、涙の、まづ知るとやうに擬人したるが、この一ふしなり。告ぐれども知らぬふりする人、いかに、背に汗すらむよ。しかし、つげなくには、

餘に、理をいひ詰めたり。

(八五八)

よの中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらずありてなけれ
ば

(釋)一首の意は、この世の中は、夢か正真か、いや、正真とも夢とも知られぬツイ、世の中は、あつて、しかもないのであるからサとなり。

(評)想は、天台にはゆる三諦の理なり。萬有の現象、有と観すればうつゝなり。無と観すれば夢なり。有の假諦にあらず、無の空諦にあらざる實相、これ中諦なり。現とも夢とも知らずば、中諦にあたる。この真如の妙諦を、三十一字に發展し得たるを、作者の技倆とす。初二句は自問、三句以下は自答なり。促句まじりの四段切の中に、漸層法と反轉法とを用ゐて、語調の勁健をつとめ、同時に、同語を反復せしめて、聲調の和諧をはかれるなど、作者苦心のところなるべし。

世の中にいづらわが身のありてなし哀とやいはむあなうとや
いはむ

(釋)一首の意は、この世の中に、とれどに、わが身があるぞ、今日明日にも死なうも知れぬば、

あつてないものである、されば、あゝ悲しいといはうか、あゝ愛いといはうかとなり。
(評)例の無常觀、平々凡々なり。四段切の促句仕立にて、四五の句、同型の語を反復したるうへに、アの頭韻を押せるを、異色とす。

山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりけ住みよかりけり

(釋)一首の意は、山家は、物さびしいことこそわるけれ、それでも、世の中の愛いのよりは、存外に住みよかつたツイとなり。

(評)境は、即ち心移す、人生の行路に蹉跌し、世をすて、世にすてられて、山里に思ひ入りぬる時、いかで、この感なからむ。哀なり。

六帖、小町集に、二句、物のわびしきとあるを、しまりて優れりと、景樹はいひたれど、うなづき難し。うきといふの類語なるわびしきにては、一向、對照の妙を見ず。又、朗詠に、物さびしかる事はあれどとあるは拙し。

これたかのみこ

白雲のたえずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそあり
けれ

(八五九)

(八六〇)

(釋)一首の意は、雲の、不斷たなびく高山の峰でさへ、住めば、かうして住んで居らるゝ世の中であつたワイとなり。

(評)この親王の御事に就いては、既に、春上「世の中にたえて櫻のなかりせば」の條下にいへるこゝとあり。参照すべし。失意の極、遂に出家して、山城國愛宕郡小野の里に住ませ給ひき。伊勢物語に、

む月に、拜み奉らむとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪、いと高し。しひて、御室にまうでて拜み奉るに、つれづれと、いと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など聞えさせけり。

とは、この間のことなり。金殿玉樓にのみ起臥させ給ひし御心地に、住み遂げ難く思し召されし山住なるを、住めば都と覺らせ給ひけむ御心中、思ひやるだに、いと悲しく、はた畏し。住めば、住みぬるの同語の折りかへし、沈痛の意を深むる所以なり。六帖には、「よみ人しらす」とあり。又、四句、古本貫之集には、住めばすまるとあり。

ふるのいまみち

ありにけむきゝても厭へ世の中は浪のさわぎに風ぞあくめる

(釋)〇しくめる、しくは頻の意、重波のしきに同じ。

一首の意は、これ、世間の人達よ、もう知つてしまうて居るであらう、もし知らずば、今、自分

が云ふことを聞いてなりとも、この世を厭うて捨ててしまへ、この世の中は、丁度、海ならば、浪の騒しう、風が吹きかけくするやうなるものと見えたワイとなり。

(評)法華經の偈文、

三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、甚可怖畏、

の意をのべたり。下句は、古物語などに、疫病などにて、人数多死ぬるを「世の中騒しき頃」と書けると同意にて、無常迅速、物安からぬ貌を、浪の立ち騒ぎ、風の吹きさするに喩へたり。千秋が、風吹きて、浪を騒ぎしくめるといふ意なるを、さはいひ難き故に、風と浪とをわけたりといへるは非なり。實景はしかならむも、こゝは、たゞ、關聯したる事項を排對したる譬喩なるのみ。

そ　せ　い

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

(釋)一首の意は、どちらの方へ、この世を捨ててゆかうぞ、この心といふものがサ、野に往つても、山に入つても、やはり惑ひさうな様子だワイとなり。

(評)我ながら、わが心には、愛想のつきたる事かなの餘意あり。華嚴經にいはゆる、「三界唯一心、心外無別法」の理は、かくて暗示せられたり。四句は、野にても山にてももの意なるが、辭様、やゝ、明快を缺けり。

(八六一)

雑部下の古本に、初句、いづこにかとあり。

(八六三)

よみ人あらず

世の中は昔よりやはうかりけむわが身ひとつの爲になれるか

(釋)○やはやは疑辭、はは添辭。

一首の意は、世の中は、昔から、この通りにまあ、愛いのであつたであらうか、それとも又、自分の身ひとつの爲に、このやうに愛い世の中になつてあるのであらうかとなり。

(釋)わが身ひとつの爲といふことはあるまじきを、まかも疑ひて、兩端を叩ける愚痴を聞くべし。

○

世の中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色に出にけむ

(釋)○あなうの花 あな愛に、卵の花をかけたなり。あなは歎辭。

一首の意は、あゝ愛いと思つて、世の中を厭つて引込む山邊の草木といふことだが、愛いといふ名の卵の花が、かう、色にあらはれたのであつたらうとなり。

(評)正義に引ける赤尾可官の説に、うつ木の一種を、今、比叡の山人「あなうつ」といへり、色も薄紅なれば、色に出にけむといふかといへるよろし。抑も、うつ木には、常いふうつ木と、山うつ木と、箱根うつ木との三種あり。比叡山なるは、山うつ木なるべし。白きをのみ見馴れたる目に、

その淡紫紅色なるを訝りて、處から、非情の草木も、猶かつ、あな愛の色に出でたるかとなり。うつ木な灌木なるを、草木とやといへるは、熟語の常なり。

○

三吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

(釋)○かくれが 隠處なり。隠家とかくはあて字。

一首の意は、吉野山は、深い山であるが、その吉野山のまだあちらに、家がまあほしいことよ、それがあらば、世の中の愛いと思ふ時の隠場所にせうワイとなり。

(評)到底憂き世と見なして、早手廻しの隠宅穿鑿、大覺の眼より見れば、唯これ、一箇の痴案のみさはいへ、境は以て、心をうつす。凡夫は、この詩的方案なかるべからず。

○

世にふればうきこそまさされみ吉野の岩のかけ道ふみならして

む

(釋)○岩のかけ道 和名抄に、棧道を「山のかけみち」とよめり。こゝも、棧道をいへるか。一説に、岩の陰道といへり。さては、かげと濁るべし。○ふみならし 踏み平しなり。

一首の意は、世に、かうして居れば、次第に、愛いことがサ増るワイ、これではかなはぬ故、いつそ、

(八六三)

吉野山の難所をも踏み開いて、奥深く引籠らうぞとなり。
(評)四五句、山ごもりせむといふことを轉義したるにて、婉曲なり。しかも、かく辛き岩のかけ道をも厭はぬに、ますく、世の憂さのはげしきを見せたり。

いかならむいはほの中にすまばかは世のうき事は聞えこざらむ

(釋)○いはほの中 岩のたちめぐる山中をいふ。岩窟の内をいふにはあらず。○かは かは疑辭はは添辭。

一首の意は、どのやうなる岩山の中に住むならまあ、この世間の憂い事が、聞えてこぬ事であらうぞとなり。

(評)作者は、一方ならぬ大なる憂き事ある人なるべし。世の常の山住などには、猶聞えくべく心許なければ、いかならむいはほの中にと、思案にくれたるなり。山の中をいはほの中と轉義したるが面白く、後人の踏襲するところとなれり。

三句、この部の古本に、すまばかもとあり。又、結句、六帖に、たづねこざらむとあり。

あしひきの山のまにへ隠れなむうき世の中はあるかひもなし

(釋)一首の意は、山のあるについて、どこまでなりとも往つて、隠れてしまはうワイ、なせなれば、このやうに憂い世の中は、住んで居る詮もないワイとなり。

世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれるゆきやけなまし

(釋)○うけく 憂くの延言。○ゆきや 雪に、行きをかけたなり。

一首の意は、もうく、世の中の憂くあるのに飽きはてたワイ、いつそ、奥山の木の葉に降つてある雪が消ゆるやうに、自分も、其の奥山へ往つて、跡をかき消してしまはうとなり。

(評)厭世のあまり、まづ、奥山の隠處を思ひよせ、次に、木の葉の雪を聯想して、ゆきや消なまし一案を立てたり。秀句仕立ながら、思ひ入りたるところ見えて、あはれなり。消なましは、こゝにては、死に失する意にはあらず。或説に、行倒となりてしまはむと解けるは、過ぎたり。

おなじもじなき歌

ものへのよしな

(八六五)

✓世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそ絆なりけれ

(八六六)

(釋)おなじもじ云々 一首のうち、同字なき歌となり。歌の意によりて、こゝに序でたり。

一首の意は、世の中の愛い事の見えも聞えもせぬ山の中に這入らうとするには、戀しう思ふ人がサ、存外、その邪魔立するきつなであつたワイとなり。

(評)恩愛の羈絆をいふは常套にして、陳腐なり。

山のほうしの許へつかはしける

九河内躬恒

世をすてて山に入る人山にてもなほうき時はいづちゆくらむ

(釋)山のはうし 山住の法師なり。或は、平安の京このかたのならひにて、山は、比叡山をいへるか。家集の詞書には、「世を怨みて、山寺によかる人につかはす」とあり。

一首の意は、世の中が愛いとて、山へ引き込む人よ、その山にても、やはり愛い時は、どちへ行くのであらうぞとなり。

(評)詩としての妙味あるにあらぬど、好皮肉、巧語言として存すべき價值あり。

家集に、初句、世をうしと、三四の句、山ながら又うき時はとあり。

物思ひける時、いとさなきこを見てよめる。

今更に何おひづらむ竹の子のうきふし繁き世とは知らずや

(釋)○うきふし 愛き場合なり。竹の節をかけたなり。

一首の意は、生えずとも事を、竹の子が、今更に、何とて生えて來たのであらうぞ、愛い事のある折節のおほい世の中とは知らぬのかどうかとなり。

(評)この稚き子は、わが兒が、人の兒が、いづれにてもあるべし。さて、これを、竹の子に擬へていひはてたり。ふし、まげきも、竹の縁語なり。世も、或は、竹の節を寄せたるか。物思ひける時は、五月の竹の子時分なりしならむ。輕雋にして、まかも、人生の半面を説明し、人情の機微に接觸し、うたゝ、感愴を深からしむ。作者、時々、かゝる手柄あり。當代の歌仙たるにはちず。

題ゑららず

よみ人ゑららず

世にふれば言の葉しげき吳竹のうきふし毎にうぐひすぞなく

(釋)一首の意は、世にあれば、人に、何のかのといはるゝ事が多いが、繁つたる竹のふしづくに、鶯がなくやうに、その人の言葉の愛い折節ごとに、自分も泣くワイとなり。

(評)譬喩と縁語の修飾とをまじへたる、巧緻に過ぎて、煩瑣に堪へず。

木にもあらず草にもあらず竹のよのはしにわが身はなりぬべ

(八六七)

らなり

(八六八)

ある人のいはく、たかつのみこの歌なり。

(釋)○竹のよよは節と節との間なり。○はし半とおなじ。何方へもつかぬにいふ。一首の意は、木でもない、草でもない竹の節のやうに、どちらつかずの物に、自分の身は、なつてままひまうなワイとなり。

(評)上句は、晋の戴凱之の竹譜に、

植之中有名曰竹、不剛不柔、非木非草、云々。

とあるに據れるなるべし。木にも草にもと、兩端をたゞけるが、句法に、姿致あるのみならず、對映の妙ありて、竹のよのはしたなるを歎する意、いよ／＼深し。さて、作者の境遇は、いかなりけむ、左註にいへる高津の皇女は、桓武帝の皇女にして、大同四年六月嵯峨帝の妃となり、幾ばくならずして廢められしこと、續紀に見えたり。後撰集に、この皇女の御歌とて、

なほき木にまがれる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなき

その本文をひかへて詠める歌さ、相同じ。當時は、漢學隆盛の世なれば、わが國風も、おのづから、かゝるよみ口の行はれけるなるべし。さては、左註の説信すべきか。密勘に、内親王の身、思ひかけぬ入内をして、又、その本意あるさまにもなかりければ、木にも草にもあらず、はしたなる身とよみ給へるなりといへる、或は然らむ。

○

わが身からうき世の中と歎きつゝ、人の爲さへ悲しかるらむ

(釋)○わが身からからは、よりの意。

一首の意は、自分の身から、憂い世の中ではあると、歎き／＼して居れ、人は、さうもあるまいのに、何故に、人のうへまで、身につまされて、悲しくあるのであらうワイとなり。

(評)作者は、以て、自家の解嘲となさむとするものか。

おきの國に流されて侍りける時によめる。

たかむらの朝臣

思ひきやひなのわかれに衰へてあまの繩たぎいさりせむとは

(釋)おきの國云々 羈旅歌「わたりの原八十島かけてこぎいでぬと」の條下を看よ。○ひな ひろく、都の外なる國をいふ。田舎なり。○繩たぎ たぎは手繰ること。○いさり 漁り。

一首の意は、都にゐる時分に、思ひ寄つたことか、いや、思ひも寄らなかつたワイ、このやうに、遠い田舎に流されたる別の悲みにくづをれて、その日のたつきには、海人の釣繩をたぐつたり、魚など釣つたりせうとはサとなり。

(評)今昔、境遇の劇變は、たゞなるすら、無量の感にうたれぬべし。况や、これは救勘なり、流人

(八六九)

(八七〇)

なり。當時三十七八歳の元氣旺盛なる、まかも、硬骨野狂の名を負へる作者も、いかで、幾多の感懐なかるべき。殊に、名家の子弟として、弱冠より、順調の運路をのみ踏み来りたれば、一旦、この逆境に臨みては、心膽、俄に沮喪したりしなるべし。下句、海人のえわざをせむとはといふべきを、具象的に轉義したるに、大に、詩味を生ず。原來、燈烟屋雨、磯臭きあたりに住み馴れたることを、海人の所業を、みづからするやうにいひなせるも、誇張なり。萬葉卷一麻績王が、うつそみの命ををしみ波にぬれ伊良古が島の玉藻刈りをすと歌ひ給ひしと、同趣なるを思ふべし。

田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮のうち侍りける人につかはしける。

在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へ

よ

(釋)田村の御時云々 田村の御時は、文德帝の御世なること、すでにいへり。事にあたりては、敷勘を蒙るをいふ。津の國の須磨は、攝津國武庫郡の須磨なり。真淵曰く、今は、いさゝか、御氣色のあしかりけるを、まばし避けて、須磨に籠り居られしなるべし。罪ありて流されしこと、文德

實録に見えず。この天皇の御在位は、わづか十年が程にて、その間、官位昇進、年々にこそあらね、滞なく見えたりといひ、秋成は、更に、これを敷演して、須磨に避け給ふは、御父阿保親王、攝津守に任せられしこと見えれば、そのよせなどの、猶かしこにありけるにや、業平も、津の國に遊びしことのあるも、いづれ、在原氏の領地ありし故なるべし、今も、菟原の郡打出の里に、御父親王の遺蹟と稱ふる寺院あるによりて、まか思はるゝなりといへり。○わくらばに たまさかにの意。○藻鹽たれつゝ 藻鹽に、鹽垂るをよせたり。藻鹽は、海藻の鹽水より採る鹽なり。海藻を、篋の上に掻き集めて、鹽水を汲みかけて垂る。さて、その鹽の染みつきたる藻を焼きて、水に掻きたれ、上澄を、釜にて煮て、鹽とす。鹽垂るは、もと、その鹽水を垂らすことなるが、轉じて、こゝにいふ如く、涙に濡れそぼつにいひ、又、歎に沈むにいへり。

一首の意は、もし、たまさかにも、問うてくるゝ人もあるならば、その時、貴方は、私が、須磨の浦で、海士のする仕事をして、まはたれて、ひどく難儀をして居ると云うてくだされとなり。(評)日陰のさすらへ人、今は、誰問ふべきにあらず。まかも、鍾情の昔を忘れぬ人、萬に一もありて問はば、云々と答へよとは、蓋し、假託の言なり。まことは、宮の内なりける人に、わが現況を報じて、同情を求むるを、その本意とす。想ふに、その人は、わくらばにだに問はざりけるならむ。さるを、餘所げに、とふ人あらばといへる暗刺、わぶと答へよの冷語、骨に徹るを覺ゆ。その人、もし、たゞならぬ關係にてもありしならむには、いよいよ、慚愧に堪へて、天地縫なきをや恨みしならむ。藻鹽たれつゝは、上の歌のあまの繩たぎといへると、その趣、全く相同じき誇張な

(八七一)

り。唐の章莊の、

若見青雲舊相識、爲言流落在天涯、

の詩に比して、更に、一段の感懐と、幾層の巧趣とをそなふ。

左近將監とけて侍りける時に、女のとぶらひにおこせた

りける返事に、よみてつかはしける。

をのゝはるかぜ

あま彦の音づれじとぞ今は思ふわれか人かと身をたどる世に

(釋)左近將監とけて云々 左近は左近衛府、將監は、その判官(三等官)に相當する役にて、從六位上に叙せらるゝを常とす。五位に進み、中には、殿上許さるゝもあり。とけては、解官せられしこと。女は妻。とぶらひには見舞になり。○あま彦の 天彦の字をあつべし。山彦とおなじにて、初を神視したる名なり。こゝは、音といはむ序なり。集中、貫之の長歌にも、あま彦の音羽の山と詠まれ、又、貫之集にも散見したり。宣長が、天上の人をいへり、物語どもに、これかれ見えたりといへるはいかが。物語なるは、天人とこそいへ、天びことあるは、なか／＼誤なり。一首の意は、貴方へも、たよりはすまいとサ、もはや思ふワイ、この頃の不仕合に、當惑のあま、心も空になつて、自分のからだを、誰人のか自分のかと、辨へかねて居る時節にサとなり。

(評)妻女の情報には、久しく、音信なきことをば怨めるふしありしなるべし。さてなむ、その理由を具陳したるなる。蓋し、作者の解官せられしは、喪解にもあらず、病解にもあらず、藤原保則の奏議中に、

前左近將監小野春風、累代將家、驍勇軼人、前年、頻遭讒謗、免官家居、

と見えれば、讒言の致すところなり。われか人かと、身をたどるまでに歎かれしぞ宜なる。當時のならひ、妻女は、親里に在りて、作者、獨家居せしなるべし。武辨の人にして、是等の言辭あり、歌は、よしとはあらねど、ゆかしからざるにあらず。

初句、新撰和歌に、山彦のとあり。

つかさのとけて侍りける時よめる

平さだぶん

うき世には門させりとも見えなくなどかわが身のいでがてにする

(釋)つかさとけて 免官なり。

一首の意は、自分の家こそ、閉門して居れ、この憂い世には、門をさしてあつて、出入のならぬものとも見えもせぬに、なせまあ、自分の身が、この憂世を遁れて、出家しにくうすることか、さて、合點の行かぬことワイとなり。

〔評〕失意の極。厭世の念をおこせるものの、とかく執着するところありて、いさぎよく、え思ひ立たざりけらし。さるを、愛世には、門させりの一語を假構して、などと疑問したるを、この詩趣のあるところとす。には、の助辭を味ふに、作者は、閉門して籠り居りしものなるべし。さらば、その司解けたるは、過失などありしならむ。諸註、多く、立身出世しがたきを歎く意とせるは、皮相の見なり。且すでに、上に、愛世とあるからは、出家遁世を願ふ意に見るぞ至當なるべき。後世の、無意味に、うき世をいふとは異れり。

拾遺集雜上に再出したるには、詞書「つかさとられて侍りける時、いもうとの女御の許につかはしける」とあり。げに、事實は、この詞書の如く、妹の女御に愁訴して、その救護を求めけるならむ。年代をおすに、光孝天皇の女御平等子は、この妹の女御か。

○
ありはてぬ命まつまの程ばかりうきごとしげく思はずもがな

〔釋〕一首の意は、とても、この世に生きどほしにはせられぬ、わづかなる命の終るのを待つあひだのその程ぐらゐ、何卒、愛い事を、多く思はぬやうにしたいワイとなり。

〔評〕浮生の須臾なること、電光石火の如し。されば、命まつまの程ばかりは、即ち、一生愛きことなしに暮したしと希へるなるべし。上と同時の詠なり。
三句、古本に、程だにもとあるぞよき。

みこの宮のたちはきに侍りけるを、宮仕つかうまつらす

とて、とけて侍りける時に、

みやぢのきよき

筑波ねのこのもと毎にたちぞよる春のみやまの陰をこひつゝ

〔釋〕みこの宮の云々。みこの宮のたちはきは、東宮の帶刀なり。この東宮は、醍醐帝の皇子保明親王(文獻太子)を中す。延喜四年二月立太子、延長元年三月、廿一歳にして薨じ給ひき。帶刀のことは、春下「はる風は花のあたりを云々」の詞書の解を看よ。宮仕つかうまつらすは、帶刀の官にありながら、不奉公なるをいふ。○筑波ね。常陸國新治郡にある山。ねは嶺の上略。○このもと。木の下なり。○春のみやま。春の宮に、深山をかけたなり。春の宮は、皇太子、又は、皇太子の座す御所をさしていふ。

一首の意は、筑波山の、ひどく茂つてあるやうに、惠深い方々へ、御わびを頼みにサ、たち寄ることワイ、春宮様の御蔭を戀ひ慕ひ、申してサとなり。

〔評〕集中、大歌所の東歌、

つくばねのこのもかのに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし

によりて詠めるか。東宮の官人、又は、女房達へおくりて、復職を歎き願へるなるべし。

時なりける人のはかに、時なくなりて歎くを見て、みづ

からのなげきもなく、よろこびもなきことを思ひて、よめ
清原ふかやぶ

(八七六)

ひかりなき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思もなし

(釋) 時なりける云々 時なりけるは、時を得て、權勢のあること。

一首の意は、日の光の當らぬ谷では、春も、餘所の事であるから、花の咲く事もなく、そのかはりに、又、早く、花が散つて、悲しい思もないワイ、といふが表面の意にて、自分のやうに、本から、御見出しにも與からず、花も咲かぬ身は、あの人の、今度のやうなる歎も無いワイ、といふが裏面の意なり。

(評) 結句、これも増しならむと、時を得て沈めるを、みづから慰藉したるなり。官位高きは、日の惠よくあたる高嶺の如し、數ならぬ身は、日影もさゝぬ谷の如し。表裏の二面、各、よく聞えて、諷諭明白なり。巧手。

初句、六帖に、光まつとあり。

かつらに侍りける時に、七條の中宮とはせ給へりける御
返りごとに、奉れりける。 伊 勢

久方のなかにおひたる里なればひかりをのみぞ頼むべらなる

(釋) かつらに侍りける云々 かつらは、山城國葛野郡桂の里なり。七條の中宮は、昭宣公藤原基經の女にして、溫子と申す。宇多帝の女御なり。醍醐帝即位の後、尊んで、皇太夫人と爲し、中宮と稱し奉りぬ、延喜七年六月三十六歳にて崩じ給ひき。家集の詞書には、「この女は、これかれいへどきかず、宮仕をのみしてけるに、時のみかど召し仕ひ給ひけり。ようぞ、人の言をさかざりけると、心にも、親なども思ひ渡りけるうちに、孕みにけり。さて、男みこをぞ生み奉りける。わが親みづからも、嬉しと思ひけり。仕うまつりし御息所も、后になり給ひにけり。生みたりける男みこは、桂の宮といふ所におきて、みづからは、後の宮に侍ひけるに、雨のふる日、打詠めてあたりければ、後の宮のよみて給へりける。

月のうちの桂の人を思ふとて雨に涙のそひてふるらむ

御返しとて、今の歌あり。さて、歌の次に「かくて、みかどおりぬさせ給ひて云々」とあり。文體を案するに、勢語に倣ひて作りたるものと見ゆ。事實は、いまだ信すべからず。○久方の中におひたる里 月中に生ひたる桂といふ名の里の意なり。月桂の故事は、秋上、「久方の月の桂も云々」の條に既出。但、久方は、天象に關する多くのものに冠する枕詞なれば、久方の中にを、必ず、月の中にの意とせむこと覺束なし。眞淵は、中は、月の誤寫ならむといへり。この説に従ふべきが如し。

一首の意は、この里は、月の中に生えてあるといふ桂の里であるから、月の光ばかりをサ、一圓に頼むべきであつたワイ、といふが表面の意にて、自分は、中宮様の御内に成りいでたる者なれ

(八七七)

ば、中様宮の御餘光を、ひたすら、頼には致しませうと存じますワイ、といふが裏面の意なり。

(評)地名より着想したる諷諭なり。中宮を、月に喩へたるも、桂の縁なめれど、又思ふに、后宮を長秋宮と稱ふること、漢土の故事にて、此方にも、文辭の上にはいふことなれば、これをも、下に思へるか。假令、偶合とせむも、猶妙ならざるにあらず。桂の語をつけずして、廻護し得たるも巧なり。上の歌は、感慨を主とし、これは、當意の巧を主としたれば、詩味に、多少の深淺こそあれ、作者の伎倆に至りては、甲乙を見ず。

二句、六帖に、月のかつらのとあり。意は明らかなり。景樹は、これを執して、本文は、土佐日記に、「久方の月におひたる桂川底なる影もかはらざりけり」とあるを、後人の取入れたるなるべし、紀氏の、いと近く名高き、伊勢の御の歌をとりて詠まれむも、いかゞなりといへり。然れども、里なればと、婉にいへると、桂川と、あらはにいへるとは、既に、相違あり。况や、これは、生ひたるといへるに、多様の意趣を生ずるをや。意釋を味ひて、この分寸を曉るべし。

さのとしさだが、あはの介にまかりける時に、うまのはなむけせむとて、けふといひおくれりける時に、こゝかしこにまかりありきて、夜ふくるまで見えざりければ、つかはしける。
なりひらの朝臣

今ぞしる苦しきものと人またむ里をばかれずとふべかりけり

(釋)きのとしさだ云々 紀利貞が、阿波の國の介となりて、赴任するにつき、餞別すべければ、今日來れといひやりたるに、利貞は、あちこちあるさまはりて、その日、夜ふけまで待ちたれど、顔出しせざりければ、歌をよみてやれるとなり。利貞の、阿波介に任せられたるは、元慶五年二月なり。○かれず 離れずなり。

一首の意は、人を待つは苦しきものといふことを、貴方の、待てどもく來ぬにつけて、今サ、始めて知つたワイ、これでは、總体、人を待つであらう所をば、不沙汰をせず、早く往つて遣るべきであつたワイとなり。

(評)諷刺の妙、殆ど、人をして羞死せしむ。今ぞの一語、實に、骨に徹する冷語なり。

惟喬のみこの許にまかりかよひけるを、かしらおろして、小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶらはむとて、まかりたりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪、いと深かりけり。あひて、かのむろにまかりいたりて、をがみけるに、つれづれとして、いと物悲しくて、歸りまうできて、よみておくりける。

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

(八八〇)

(釋)惟喬のみこのもとに云々 かしらおろしては、三代實錄に、「貞觀十四年七月十一日、四品彈正尹惟喬親王、寢病、頓出家、爲沙門」とあり。小野は、山城國葛野郡小野郷。むろは庵室なり。この詞書、勢語に、「かくしつゝまうで仕うまつりけるを、思の外に、御くしおろし給ひてけり。む月に、拜み奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪、いと高し。しひて、御室にまうでて拜み奉るに、徒然と、いと物悲しくおはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など思ひ聞えけり。さても、侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、えさぶらはで、夕暮に歸るとて」とありて、この歌を擧げたるが、文辭、高妙を極めたり。相比すれば、この集の文の拙處、病處、歴々として數ふべし。想ふに、後人、勢語の文をいろひて、これを書き入れしならむ。景樹も、さなりと論へり。

一首の意は、あまりのことに、ふと忘れては、これ、夢ではないかと思ひますツイ、この深い雪を踏みわけて、かやうの山里にきて、君にお目にかゝらうとは、ほんに思ひも寄つたことか、いや、思ひも寄らぬことでありましたツイとなり。

(評)ふみわけてといへるに、その雪の淺からぬこと暗示せられ、従ひて、その、山里ならむことも推想せらる。さては、これ、賤山かつの住處に堪へたり。なま貴人も、更に立ち舞ひがたき處なるべし。然るに、こゝにして、先帝第一の皇子、あはよくは、儲貳の位にそなはり、遂に、天位をも踐ませ給ふべき君惟喬を、御年二十九の一若僧として見え奉らむこと、人生の有爲轉變のあ

深草の里にすみ侍りて、京へまうでくとて、そこなりける
人に、よみておくりける。

年をへてすみこし里をいでていなばいとど深草野とやなりなむ

(釋)〇いとど深草 里の名の深草をよせたり。

一首の意は、今、自分が、年久しう住み來つたる、この里を出て去なうならば、たゞさへ、深草の里が、いよ／＼草深くなつて、野となるであらうかとなり。

(評)あしに住み残りて居らるゝ貴方のさびしさを、御推察申すの餘意あり。蓋し、官途などに就きての京住居となるより、しばらく、閑居の軒を並べし深草の里人を驚しよなるべし。初二の

(八八一)

句、下句の観染なり。いと、の一語を、眼目とす。これによりて、もとより、草深く住みなしたりしことも明らかに、野とやなりなむの誇張も、唐突ならず。

二句、伊勢物語塗籠本に、宿をとあり。

よみ人あらず

野とならばうづらと鳴きて年はへむかりにだにやは君はこざらむ

(釋) ○うづらと鳴きて 鶉と共に鳴きての意。このとの助辭、雪と散る花などのとの意と見むはおだしからず。○かりに 狩に、假初をよせたり。

一首の意は、貴方のお詞によれば、この里が、野となるまでも、わざと尋ねて来ては下さらぬ思召と見ゆるが、まこと、野となつたらば、私は、その野に住む鶉と一所に、怨泣に泣いて、月日を送つて待ちませう、とすれば、せめて、狩ぐらゐには、一寸なりとも、貴方はお出でなさらなからうか、いや、お出でなされうと思へばサとなり。

(評) 野とやなりなむの一語、料らず、この奇怨を醸す。隣人の口舌、げに縦横なり。在五の君が詩敵たるに愧ぢずと稱すべし。さて、鷹狩は、當時流行の遊伎にして、百寮の大宮人、休沐の暇あれば、即ち、肥馬輕裘に、郊野をあさり、遂には、雉の産地を味ひわくる人すらありき。さればこそ、かりにだに、やは來さらむと下待てるなり。うづらを、契沖が、愛を寄せたりといひ、廣

蔭が、憂辛を寄せたりといへるは、共に鑿説なり。又、この贈答を、勢語に、「深草に住みける女を、やうく、他き方にや思ひけむ、かゝる歌をよみける」として、色めきたる男女の贈答に作りなしたり。例の拘るべからず。

二句、勢語、六帖、ともに、鶉となりてとあり。聞えやすけれど、今は、本文のまゝに據りつ。結句、六帖、業平集には、人のとあり。

題あらず

我を君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりに

この歌は、ある人、昔、をとこありけるをうなの、をとことはすなりにければ、難波の三津の寺にまかりて、尼になりて、よみて、をとこにつかはせりけるとなむいへる。

(釋) ○なには 何に、難波をかく。○うきめ 愛き目に、浮海布をよす。○みつ 見つに、三津かく。三津は、難波の御津の名によりたる三津寺をいへり。大福院と號して、今に、大阪にあり。○あま 海人に、尼をよす。

一首の意は、貴方は、私を、何のと、あるかなしになされたことゆゑ、私は、愛い目を見まして、かやうに、難波の三津寺の尼とまでなつてしまひましたワイとなり。

(評) この贈答の口氣を味ひて、事相を斷すれば、げに、左註にいへる如くならむ。眞淵は、いもせ

のことによりてならば、戀の部に入るべしとて、これを否認したれど、この前後、みな、閑居隱遁の詠を擧げたれば、これも、出家遁世のおもき方につきて、こゝに收めしのみ。歌は、縁語仕立の煩しけれど、全體を、過去にいひなしたるが、悔恨の追懐を促すに由ありて、感哀あり。

かへし

難波瀉うらむべきまもおもほえずいづくをみつのあまとかはなる

(釋)○うらむ 恨むに、浦見るをよす。○みつ 見つに、三津をかく。○あま 海人に、尼をかく。

○かは かは疑辭、はは嘆辭。

一首の意は、自分は、貴方に、そのやうに恨まれさうなる、夜離した事も覺えないワイ、それに、自分の心の、どのやうなる所を見つけて、愛想をつかして、三津寺の尼となつたのか知らぬなり。

(評)浦を見るべき間もなきに、いづれの所を見るぞといへるをもて、仕立てたるなり。この贈歌に對しては、かく、細やかにいひなすより外なかるべし。

いまさらにとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ

(釋)○八重葎して 八重葎を以ての意、八重は、多數を意味す。葎は雜草にして、今いふ「カナムグラ」なり。○門させりてへ てへは、といへの約。

一首の意は、今になつてから、尋ねて下されさうな人があらうとも思はれませぬ、この方は、八重に生え茂つた葎で、門口もさしこめてあるというてくれいとなり。

(評)殆ど忘るばかりにうち絶えたる人の、訪ふべき由の使おこせたるか、或は、言傳などしたらむ返しに、いひやれるならむ。八重葎して門させる誇張は、いよく、人の、久しく訪はざりしことを反映して、諷刺の妙を見る。

この歌拾遺集戀二に、再出したり。

友だちの、久しくまうでござりけるもとに、よみてつかはしける。 み つ ね

水の面におふるさ月の浮草のうき事あれやねをたえてこぬ

(釋)○浮草 萍なり。根はあれども、水面に漂へる故に、根のなきやうに、歌にはいひならへり。

○あれや あればやなり。○根を をは嘆辭。

一首の意は、貴方は、何ぞ、私に對して、浮草の愛いと思し召すことがあるかして、浮草の根の絶えてあるやうに、うち絶えて、近頃は、トントお出がないワイとなり。

(評)さもなくば來給ふべきものをの餘意ありて、人の久濶を諷したるなり。五月の浮草は、折から

の景物を借りたるにて、三句までは、うきといはむ序なること、すでに、萬葉に、

時鳥なくをのうへの卯花のうきことあれや君がきまさぬ(卷八)

鶯のかよふ垣根のうの花のうき事あれや君がきまさぬ(卷十)

とあるに同じ。さるを、今一きさみ、根を絶えての比喻を用ひて、序の道具を取りはやしたるは、蓋し、この時代の風調の異なり。たゞし、内容の主旨、既に、作者の物にあらざるを、いかにをむ。

人をとほで、久しうありけるをりに、あひて怨みければ、よめる。

身をすてて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

(釋)あひて怨みければ、面會して、その疎遠を咎めたるなり。て文字、一本によりて補ひつ。

一首の意は、自分は、不斷お尋したいとばかり思うてをるが、今に、御無沙汰してをるところを見れば、あの心奴が、よかく、餘所事に紛れて、この身を打捨てて、わきへ往つたのであらうか知らぬ、まことに、思の外のものは、あの心奴でありましたワイとなり。

(評)作者狡猾、心外なる奴は心と空恍けて、心と、思ふとの體用を、しばらく、別箇の物に取成したる没理想を、この詩味のあるところとす。

二句、古本に、いにやとある、妥貼にしてよろし。

むねをかのおほよりが、越の國よりまうできたりける時に、雪のふりけるを見て、おのが思は、この雪の如くなむつもれるといひけるをりによめる。

君がおもひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじと思へば

(釋)おのが思は、わが、君を思ふ思はの意。宗頼の言なり。

一首の意は、お詞のほとり、貴方の思が、この雪のやうに積ることならば、それは、とても、頼みにはなりませんワイ、その故は、貴方の思も、やはり、この雪のやうに、春からのちは、もうあるまいと存すればサとなり。

(評)かやうの座興的歌は、永久不變の味をかけたも、その場においては、出で榮えるものなり。後撰集戀六に、兼輔朝臣の契りける女の歌として、

白雪のつもる思も頼まれず春よりのちはあらじと思へば

とあるは、この歌を、すこし變へたるにや。初二の句、おのづから、剛柔の差ありて、男女の性格あらはれたり。

かへし

宗岳 大頼

君をのみ思ひこし路の白山はいつかは雪のきゆるときある

(釋)○思ひこし路 思ひ來しに、越路をかく。

一首の意は、いやしく、雪も雪によること、貴方の事ばかり思うて、はるくくと來る北國街道の白山は、何時まあ、雪の消ゆる時があるか、あの雪は、春でも何時でも、消えは致さぬとなり。

(評)わが思も、かくの如しの餘意あり。

結句、古本にきゆる時のあるとあり。

こしなりける人につかはしける きのつらゆき

思ひやる越のしら山しらねどもひと夜も夢にこえぬ夜ぞなき

(釋)○思ひやる 想像すること、こしは、排悶の意にあらず。

二首の意は、貴方の事を、不斷、都から思ひやつて居る故に、かの北國の白山は、どのやうなる山かは知らぬが、一夜さたりとも、夢に越えぬ夜は少ないワイとなり。

(評)夢中の山川をいふことは、詩に、あまた、例ありて、あながち、作者の物にあらず。たゞ、筆路の暢達自在なるを、多とすべし。しら山しらねども、一夜も、夜ぞなどの疊語、疊調の圓滑なる所以なるべし。

古本に、二句、越の白嶺の、四句、夢のとあり。

題えらす

よみ人えらす

いざこゝにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

(釋)○菅原や伏見の里 大和國添下郡。山城の紀伊郡にも、伏見の里あれど、この歌には關はらず。

一首の意は、どれ、料簡をきめて、こゝに、自分の一生は、住んでくらさうぞ、この菅原の伏見の里は、よい所であるに、今もし、自分まで、餘所へ移つて行けば、荒れてしまふであらう事がまあ、をしいワイとなり。

(評)菅原の里は、萬葉に、

大きうみの水底ふかく思ひつゝ裳ひきならし菅原の里(卷二十)

と詠みて、奈良時代には、西の京なれば、宮人等の、常に立馴らしし所なり。一旦、延暦に、遷都の擧あるや、世にある人、又は、その蔭を憑むほどの人は、皆、われ勝に、新都に移り住みて、故里は、見るがうちに、淺茅が原とぞ荒れ行くなる。されば、せめて、我なりとも残りともまりて、殘年を、こゝにして終へむとなり。その實は、作者が、宮仕など辭して、年老い、世に餘されたる憤を記せるものならむ。格調蒼古にして、神韻悠長なり。春上、故里となりにし奈良の都にも」の詠と共に、この舊都に寄懐せるもの双壁なり。

わが庵は三輪の山本こひしくばとぶらひきませ杉たてる門

(釋)○三輪の山 大和國城上郡。麓に、大物主神を祀れる大神神社あり。

一首の意は、自分の家は、三輪の山の麓である、逢ひたくば、尋ねてお出でなされ、杉の立つ門を、それであるワイとなり。

(八九〇)

(評)三輪山のはとりに、跡を晦まし、世を避けたる人の、流石に思ひ戀しきことありて、親しき友達にいひおくりし詠なるべし。そも、三輪の神山は、林木鬱蒼として、檜杉など多かるころ、その老杉を利用して、わが門のしるしの杉と取做したるを、趣向とす。造句簡勁にして、格調、また高し。景樹が、上句は、いまだ、所も知らぬ人に示したるなり、されば、友達の交にあらずといへるは、事體を、よく察せざる僻論のみ、隱逸、みづから喜ぶの士、豈に、一々、住處を報知する愚をなさむや。思ふべし。六帖に、三輪の大神の詠とあるは、もとより妄なり。初句、古來風體抄に、わが宿はとあり。俊賴口傳に、「こひしくばとぶらひまませ千早ぶる三輪の山本杉たてたる門」とあるは、これを誤り傳へたるならむ。

きせん法師

わがいほは都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり

(釋)〇たつみ 辰巳にて、東南の方位。〇しかぞ 然ぞの意。〇世をうち山 世を愛といふに、宇治山をかく。山は、山城國宇治郡、今、喜撰が嶽といふ。鴨長明の無名抄に、「喜撰が住みける迹あり。堂はなけれど、礎など定かにあり」といへるこれなり。

一首の意は、自分の庵室は、京から、辰巳に當る所で、世が愛いとして籠る宇治山であると、人は

いふのである、しかも、自分は、かくの通りサ、愛いとも思はず、氣樂に住んで居るワイとなり。

(評)厭世致の眞言僧が、却つて、樂天觀を述べたるは、大に詩的なり。されど、續けがら、更にをかしからず。貫之が、これを評して、「詞かすかにして、はじめをはりたしかならず。いはば、秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し」といへるは、古來、諸家の首肯するところなり。

六帖に、初句、わが宿は、結句、いふらむとあり。又、二條關白記に、人毛とあるを、近藤芳樹は執したれど、なほ、本文のまゝをよしとす。

よみ人ゑらず

あれにけりあはれ幾世の宿なれやすみけむ人の音づれもせぬ

(釋)〇宿なれや 宿なればやの意。

一首の意は、あゝ、この家は荒れはてたワイ、一體、このやうにして、何年になる家であればかして、昔住んだであらう人の、たえて、訪ひ音づれもせぬことぞとなり。

(評)廢宅を詠せしなり。住み捨てたれども、程經へざるは、その人の訪ひ音づれ、或は、預りのやのこなどありて、いたくは荒さぬものなれば、これは、數多の星霜を閱したる宿ならむと思ひやれるなり。初句にて切れたるは、この集にはじまれる體製なり。

六帖に、作者を、伊勢とあり。この歌、伊勢物語にも、詞を作りて出したれば、勢語を、伊勢の作と思へる人の、六帖のにも、その名を掲げしならむ。伊勢集にも出でたり。

(八九一)

奈良へまかりける時に、あれたる家に、女の、琴ひきけるを
きいて、よみて入れたりける。 よしみねのむねさだ

わび人の住むべき宿と見るなべになげき加はる琴の音ぞする

(釋)よみて入れたりける 歌を詠みて、その家のうちにいひ入れたるなり。

一首の意は、世にありわびたる人の住みさうなる家であるがと見れば、それにつれてまた、その
歎きの添ふ琴の音がサするワイとなり。

(評)御境遇は、深くお察し申すと、同情したるなり。琴の音に、歎きの加はることは、いにしへよ
りいふことにて、萬葉にも、

琴とればなげき先だつけどしくも琴の下櫛しもに妻やこもれる(卷七)

わがせこが琴とるなべに常人のいふなげきしもしやしきまますも(卷十八)
と詠めり。

初瀬にまうづる道に、奈良の京みやこにやどれりける時よめる

二 條

人ふるす里をいとひてこしかども奈良の都もうき名なりけり

(釋)初瀬にまうづる 大和の長谷寺に詣づるなり。

一首の意は、珍しい人ばかりもてはやして、自分などは飽かれて、古物にされる所を、いやに思
うて出てはきたれども、この奈良の京も、古里といふによつて、自分の爲には、愛い名であつた
ワイとなり。

(評)思ある身には、聯想の惹かるものは、名を聞くも厭はしきは常なり。想ふに、作者、人にふ
るされたる事ありて、その愛さ晴しに、初瀬詣を企てたりしならむ。下句の措辭、簡約を極む。

だいゑらず よみ人ゑらず

世の中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞ宿と定む
る

(釋)〇わがならむ わが物ならむの略。

一首の意は、この世の中は、假の世であるゆゑ、どれが一つ、これぞというて、自分の物であら
うぞ、自分の物としては無いワイ、それ故、住居も、何處であらうが、行きとまつた所をサ、自分
は、宿とさめて居るワイとなり。

(評)行雲流水、行脚の覺悟を述べたるにて、佛者が常套の文句なり。作者は僧侶なるべし。

逢坂のあらしの風は寒けれどゆくへ知らねばわびつゝぞぬる

(釋)〇ゆくへ 行方なり。

一首の意は、この逢坂山の風の風は、ひどく寒いけれど、さればとて、さして、外に行くべき方も知らぬゆゑ、難儀しながらもサ、辛棒して、こゝに寝るワイとなり。

(評)逢坂山に住み初めたる人の詠めるなるべし。馴れぬ夜風の、膚に寒くして、夢も成りがたきさまなり。今昔物語に、蟬丸の歌とて、

逢坂の關のあらしのはけしきにしひてぞぬたる世をすぐすとて

とあるは、或は、この下句を作りかへて、しか傳へしならむか。たゞし、本文は、理をいふこと、餘にきはやかにして、今昔のに及はず。

六帖に、三句、はやけれど、結句、わびつゝぞふるとあり。

〇

風のうへにありか定めぬ塵の身はゆくへも知らずなりぬべらなり

(釋)一首の意は、風にふき上げられて、居所の定まらぬ塵のやうに、軽々しいこの身は、丁度、その塵のやうに、何處へ、どうなつて行くか、行先もわからずなつてしまひさうな様子だワイとなり。

(評)想はさのみならねど、風前の塵のいひなし、極めて雅馴なり。

家をうりてよめる

伊

勢

あすか川淵にもあらぬわが宿もせに變りゆく物にぞありける

(釋)〇せに 瀬に、錢をよす。

一首の意は、飛鳥川の淵こそ、淺瀬に變る物とは聞き及んで居れども、飛鳥川の淵でもない自分のこの家も、思ひ寄らず、瀬にかはつて行く物でサあつたワイ、その瀬にといふのは、實は、錢のことサとなり。

(評)有爲の轉變を嘆ずる際にも、猶、錢に代るの洒落あるは、蓋し、この御の持前なり。古來の註家、皆、この御の零落のきはみ、家を賣りたるものとせり。されど、當時、この御を寵幸ありし宇多上皇もましましに、さばかりに衰へたるを知らず顔に過し給はむこといかゞ。况や、勅撰の集に、その名を署して擧げむこと、且は、君の過ちを擧げ、且は、作者が辱をあらはすに似たらすや。よりにて想ふに、こは、他に、さるべき理由ありて、家を譲りしなるべし。

初句、古本に、わが宿はとあり。

つくしに侍りける時にまかり通ひつゝ、碁うちける人の

許に、京に歸りまうできてつかはしける。きの友のり

故里は見しごともしあらず斧の柄のくちし處ぞ戀しかりける

(八九五)

(釋)〇見しごと ことは如くなり。碁をよす。〇斧の柄のくちし 爛柯の故事なり。書言故事に、「晋王質、代木到信安石室山、見二老叟圍碁、與質一物、如棗核、含之不覺飢、看棋未終、視斧柯已爛、歸無復舊時人」とあり。述異記には、老叟を、童子とせり。

一首の意は、久しぶりに歸つて見れば、京の故郷は、何もかも、模様が變つて、以前見たやうにもなく、知らぬ土地に來たやうであるワイ、それ故、却つて、故郷でも無い、貴方と碁を打つて、何事も忘れて、面白く暮した所がサ、戀しうあつたワイとなり。

(評)王質の境遇を、われに利用して、今の感想を詠めり。作者の、筑紫にありしは、國衙の小吏たりし折なるべし。さては、歸期、限あり。見しごと、もあらずとまで、故郷の變りはてむことあるべくもなし。蓋し、しか誇張して、斧の柄を取出でたるが、その碁客に對する挨拶なり。見しごとといひて、爛柯の故事を含ますは、この頃行はれたりしことと見えて、貫之も、見しごともあらずもある哉故郷は花の色のみあせさぞありける

と詠めり。

女ともだちと物語して、わかれてのちに、つかはしける。

みちのく

あかざりし袖の中にや入りにけむわがたましひのなき心あする

(釋)一首の意は、私の魂は、残り多く思うて別れたる、貴方の袖の中に這入つてしまつたのであらうか、貴方に別れてから、うか／＼として、魂が、こゝに無いやうな心持がしますワイとなり。

(評)想は、萬葉集卷四に、

わがせこが著せる衣の針目おちす入りにけらしなわがこゝろさへ
とあるに同じくて、これはいひ過ぎたれば、含蓄の味、やゝ乏し。

寛平の御時に、もろこしのはうぐわんに召されて侍りける
時に、東宮のさぶらひにて、をのこども、酒たうべけるついでに、よみ侍りける。
ふちはらのたゞふさ

なよ竹のよ長きうへに初霜のおきゐて物をおもふ頃かな

(釋)寛平の御時云々 扶桑略記に、寛平六年八月二十一日、遣唐使の詔ありしこと見えたり。但、こは、派遣のあらましのみにてやみたりき。もろこしのはうぐわんは、遣唐使の判官なり。遣唐使には、大使、副使、判官、主典あり。東宮のさぶらひは春宮坊の侍所なり。〇なよ竹の なよ竹は、長節竹の義ならむ。和名抄に、長間筍を、よなが竹と訓めり。さて、よ長きといひて、夜長きを寄せたり、〇おき 置きに、起きをかく。

一首の意は、爛竹の節の長いうへに、初霜がおくこの頃、夜の長いうへに、寝もせず起きて居て、遠方へ行く別のことについて、物思をすることよとなり。

(評)今昔物語に、敦忠の中納言が、「殿守の伴の御奴心あらばこの春ばかり朝清めすな」の名歌詠ま
れたる時、小野宮の實頼の大臣が、そのあへしらひに、この歌を誦せられたること見えたり。さ
ばかり宜しとも思はれぬを、いかなる故かありけむ。

(八九八)

題志らず

よみ人志らず

風ふけばおきつ白浪たつ田山よはにや君がひとり越ゆらむ 60

ある人、この歌は、むかし、やまとの國なりける人のむすめに、ある人すみわたりける。
この女、おやもなくなりて、家もわろくなりゆくあひだ、この男かふちのくにに、人をあ
ひしりて、かよひつゝ、かれやうになりゆきけり。さりけれども、つらげなるけしきも見え
で、かふちへいくごとに、をこの心のごとくにしつゝ、いだしやりければ、あやしと思ひ
て、もし、なきまに、ことごころもやあるとうたがひて、月のおもしろかりける夜、かふちへ
いくまねにて、せんざいのなかにかくれて見ければ、夜ふくるまで、琴をかきならしつゝ、
うちなげきて、この歌をよみてねにければ、これをききて、それよりまた、ほかへもまから
すなりにけり、となむいひつたへたる。

(釋)○立田山 大和國平群郡大和川の上流に沿ひたる龜瀬越なり。そこなる立野といふに、立田彦
立田姫の神祠あり。○左註、かれやは、離れ方。せんざいは前裁にて、庭前の植込なり。

一首の意は、風がふけば、沖の白浪は立つ事であるが、その立つといふ名の立田山を、時もあら

うに、よる夜中に、君が、只一人、越えてお出でなさるであらうかとなり。

(評)さても案せらるゝことかなの餘意あり。元來、立田山は、神武紀に、

赴龍田而其路狹峻、人不得並行。

とあれば、峻岨にして、晝だに歩み苦しく、心細かりぬべき山越なるべし。さるを、いかで夜はと
思ひやれる、婦人のやさしき情致見えたり。初二句の序は、

わたの底沖つしら浪たつ田山いつか越えなむ妹があたり見む(萬葉二)

と同一に、構想はまた、

二人行けどゆき過ぎがたき秋山をいかでか君が獨こゆらむ(萬葉二)

朝霧にぬれにしこもほさずして一人や君が山路こゆらむ(同九)

玉かつま島くま山の夕ぐれにひとりか君が山路こゆらむ(同十二)

と符合す。いづれ、これらを撮合して作れるならむも、おのづから、別趣をそなへて、千古不磨
の調を成せるは、老手と稱すべし。又、白波を、白波緑林の意として、立田山に、盗人を出した
る俗解あり。滑稽といふべし。

結句、六帖、新撰和歌、金玉集等に、ゆくらむとあるは、味あさし。又、六帖に、作者、かぐ山
の花の子とあり。據あるにや。

○

たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつ田の山にをりはへてなく

(八九九)

(釋)〇たがみそぎ云々 誰が禊して放したるゆふつけ鳥かの意。ゆふつけ鳥の、鶏なることは、戀一
「あふ坂のゆふつけ鳥はわが如く云々」の條にいへるが如し。但、この歌に、たがみそぎとあるを、
思へば、あながち、世の中騒しき時の公の菝のみにはあらざるべし。箇人と雖も、おのが罪科を
このものに負せて、禊菝をなし、さて、神に奉りしにや。社頭に、鳥居のあるも、この習より出
でたるなめり。〇から衣 たつといはむ枕詞。

一首の意は、たれが菝をして、放したる庭鳥であるかしらぬ、この立田山に、長く續けて、頻に
鳴くワイとなり。

(評)立田山に、鶏の鳴くことのふさはしからぬを咎むる勿れ。作者も、はやく、これをいぶかしみて、
一度は聞き咎めつるなり。しかし、立田の神垣あることに心付きて、たがみそぎゆふつけ鳥かと
思ひやれるものぞ。

結句、六帖に、たちかへり鳴く、猿丸集に、うちはぶきなくとあり。

忘られむ時しのべとぞ濱千鳥ゆくへも知らぬ迹をととむる

(釋)〇迹をととむる 濱千鳥の迹は、文字をいへり。昔、支那に、黄帝の時、蒼頡、鳥迹の文を見
て、字を作りし事、淮南子、呂氏春秋、史記等に見えたり。

一首の意は、のち、人に忘られう時に、これを見て思ひ出してもらはうと思つてサ、丁度、
濱千鳥が、飛んで行き方も知らぬのに、砂に、足迹を残すやうに、鳥の迹と、世にいふ手迹を、
ろくに書き方も知らぬのに、書きとめておくワイとなり。

(評)身後の爲に、何か書きおく時の詠なるべし。ゆくへも知らぬ跡は、文字の拙くて、筆の行き
も知らぬ意を、千鳥のうへにていひはてたるなり。

貞觀の御時萬葉集は、いつばかり作れるぞと問はせ給ひ
ければ、よみて奉りける。 ふんやのありする

神無月時雨ふりおける檜の葉の名におふ宮のふることぞこれ

(釋)貞觀は、清和帝の年號、その御時、萬葉集は、何時頃作れるぞとの御尋ありしなり。萬葉集の
ことは、序文のところにていへり。〇ならの葉の名におふ宮 檜ハナといふ名を負ひ持てる宮の意。

〇ふること 古言なり。

一首の意は、十月頃の時雨が降りたまる檜の葉の、その奈良といふ名のついたる宮の御時代に出
來ましたる、舊い調の集がサ、これ、この萬葉集で御座りますとなり。

(評)奈良時代の詞藻は、早くも、世に忘られて、清和帝の頃は、その出來の時代すら覺束なくなれ
るは、蓋し、弘仁、天長の厄運に際會したるが故ならむ。もとより、萬葉集は、平城帝以前のも
のなれども、撰者貫之が、この集の序文に書ける趣を以て推せば、この奈良の宮も、平城帝の代
の意にて採りたるものなること必せり。時代の如何はとにかく、筆鋒犀利にして、叙述の詩的なる
は喜ぶべし。上句の序、時雨の名殘の、檜の枯葉にたまれる、神無月の即景見るが如く、得易か
らざる好句なり。

寛平の御時、歌奉りけるついでに奉りける。

大江千里

蘆たづのひとりおくれでなく聲は雲のうへまで聞えつがなむ

(釋) ○聞えつがなむ 段々に、先へと聞えゆくを、聞え繼ぐといふなり。

一首の意は、芦邊の友鶴が、皆立つたる中に、一羽おくれで鳴く聲は、雲のうへまで聞えてほしい、といふが表面の意にて、他人は、皆、官位昇進せらるゝに、われ一人後れて歎いて居る聲は、お上のお耳にまで達してほしいワイ、といふが裏面の意なり。

(評) 詠歌を召されたる折ならむ、その序に、歌もて愁へ申ししなり。諷諭を用ゐたるは、かゝる場合に、最も適當したる裁製ならむ。下句は、詩經に、

鶴鳴千九臯、聲聽于天、

とあるによりて、詠めり。作者は、流石に、家の子なり、その句、多く來歴あり。

六帖には、作者、千古とあり、

ふぢはらのかちおん

人しれず思ふころははる霞たち出て君が目にも見えなむ

(釋) ○春霞 たちといはむ序。

一首の意は、人には知られず、ひそかに、わが望み願ふこの心は、春霞のやうに立ちあらはれて、

お上のお目にもとまつてはしいワイとなり。

歌めしける時に、奉るとて、よみて、奥にかきつけて奉り

ける。

伊勢

山川のおとにのみきく百敷をみをはやながら見る由もがな

(釋) ○百敷を 百敷は百磯城にて、宮の枕詞なり。大宮所は、あまたの石垣築き固めたればいふ。

然るに、こゝは、百敷を、直に、宮のことに轉用したり。○みをはやながら 身を、以前のまゝながらにしての意。はやは早くなり。水脈早を寄せたり。

一首の意は、山川は、音が高くて、水脈の早いものである、その山川のやうに、音にはかり、只今は承つて居る御所の御有様を、私が、宮仕を致して居りましたる以前の身で、今も參つて、拜見したいと存じますとなり。

(評) この御、七條の後の宮の女房として、はた、寵幸渥き更衣として、宇多帝の後宮にありし間は、何の思ふ事もなくつのみありけらし。今は、代も移り、時もなくなりて、わびしげにかき籠れる里居の徒然には、昔の榮華の夢を追想せざらむやは。みをはやながらの感ある、偶然ならず。しかし、詞は、例の刻琢に過ぐ。

古今和歌集卷第十九

雜體

長歌

題あらず

よみ人あらず

あふことの、まれなる色に、おもひそめ、わが身はつねに
あまぐもの、晴るゝ時なく、富士のねの、燃えつゝとはに
おもへども、逢ふ事かたし、なにしかも、人をうらみむ
わたつみの、沖をふかめて、おもひてし、おもひは今は
いたづらに、なりぬべらなり、ゆく水の、絶ゆる時なく
かくなわに、おもひみだれて、ふるゆきの、けなばけぬべく
おもへども、えぶの身なれば、なほやまず、おもひはふかし
あしひきの、山したみづの、こがくれて、たぎつこゝろを、

(九〇五)

たれにかも、相かたらはむ、色にいでば、人ありぬべみ、すみぞめの、ゆふべになれば、ひとりゐて、あはれくと、歎きあまり、せむすべなみに、庭に出でて、たちやすらへば、老ろたへの、ころもの袖に、おく露の、けなばけぬべく、おもへども、なほ歎かれぬ、春がすみ、よそにも人に、あはれと思へば、

(釋)雜體 ザツタイと讀む。この卷には、長歌、旋頭歌、及び、短歌の一部なる誹諧歌の詩體を収めたれば、くさくさの體と題せるなり。上なる雜歌と混すべからず。又、本卷の歌は、本集中の糟粕ともいふべく、殆ど、細評に値せず。故に煩をはぶきて、多くは略しつ。○長歌 古本、短歌とあれど、その歌は長歌なれば、誤なることうつなし。

○稀なる色 色は色彩の意と、色情とをかねたり。○思ひ初めしことを、染むるによす。○天雲の○富士の根の ともに枕詞。○とはに 常になり。○わたつみの 渡津海の如くの意。○沖を深めて 心の奥を深めての譬喩。○行く水の○かくなわに ともに枕詞。かくなわは、いにしへの唐菓子なり。和名抄に、「結果。形如結緒。此間亦有之、和名、加久之阿和」と見えたり。顯註に、「唐菓子の中に、とかくちがへたる物の透垣などのやうに亂れて裂りたる油物なり」

とあり。されば、かく繩の如くに亂るゝ意なり。○ふる雪の 枕詞。○えぶの身 閻浮の身なり。閻浮は、佛語にて、人界をいふ。この世の人間の身なれば、思はじと思へどもかなはずなり。えぶを、崇徳院の御本に、てふとあるに據る説は采らず。○あしひきの山下水の木がくれてたぎつ ひそかに、思にたぎるといはむ譬喩。戀一、足引の山下水の木隠れてたぎつ心をせまぞかねつるに據れるか。○墨染の 枕詞。○立休らへば 躊躇すること。○白たへの○おく露の○春がすみ ともに枕詞。

(評)人を恨みむの句、上下に續かず。思といふ語九箇所、思へどもと續きたるが三箇所、あふことと續きたるが二箇所、その他、同意の重複もあり、ふる雪の消なば消ぬべく、おく露の消なば消ぬべくは、わざとの疊句にして、對揚せしめたるならむとも思はるれども、それも覺束なく、殆ど、蕪雜、章を成さず。景樹は、或は、二首混同したるならむ、足引の山下水云々より切離して見れば、めでたき長歌なりといへり。六帖には、古き長歌とて、これを擧げたり。誠に、平安の京となりての古製なるべく、その五七の格調の亂れは、僅に二箇所あるのみにして、しかも、語句の今調なるは、仁明帝の代に奉れる興福寺の僧徒等の長歌のさしつきと見えきなり。

ふる歌奉りし時のもくろくのながうた つらゆき
ちはやぶる、神のみよより、くれ竹の、よゝにも絶えず、
あま彦の、音羽のやまの、春がすみ、思ひみだれて、

さみだれの、そらもとどろに、さよふけて、山ほととぎす、
鳴くごとに、たれも寝覺めて、からにしき、たつたの山の、
もみぢばを、見てのみしのぶ、かみなづき、しぐれく、て
冬の夜の、庭もはだれに、ふる雪の、なほ消えかへり、
としごとに、ときにつけつ、あはれてふ、ことをいひつ、
君をのみ、千代にといはふ、世の人の、思ひするがの
ふじのねの、もゆるおもひを、あかずして、わかるゝなみだ、
藤ごろも、おれるこゝろも、やちくさの、言の葉ごとに、
すべらぎの、おほせかしこみ、まきくの、中につくすと、
いせの海の、浦のゑほがひ、ひろひ集め、とれりとすれど
たまのをの、みじかきこゝろ、思ひあへず、なほあらたまの
年をへて、大宮にのみ、ひさかたの、ひろよるわかず、
つかふとて、かへりみもせぬ、わが宿の、志のぶ草おふる、

(九〇八)

板間あらみ、ふる春雨の、もりやしぬらむ、

(釋)ふる歌奉りし時 序に、「萬葉集に入らぬ古き歌を奉らしめ給ふ」とあり。もくろくは目錄に
て、その目じるしなる詞をよみつらぬたる長歌なり。○ちはやぶる○くれ竹の○あま彦の
もに枕詞。○音羽の山の春がすみ 思ひ亂れての亂れへかゝる序にて、春上「春のさる霞の衣ぬ
きをうすみ山風にこそ亂るべらなれ」に據る。○さみだれの云々 夏「五月雨の空もとどろに時
鳥何をうしとか夜たゞ鳴くらむ」に據る。○唐にしき云々 唐にしきは、立田の枕詞。秋下「立
田川紅葉亂れて流るめり」又、同「戀しくば見てもしのばむもみち葉を」などに據る。○神無月し
ぐれく、て 冬「龍田川錦おりかく神無月時雨のあめを經緯にして」による。○冬の夜の庭もは
たれに云々 冬「今よりはつぎて降らなむわが宿の薄おしなみふれる白雪」同「白雪のふりて積
れる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ」などを思へるか。○君をのみ云々 賀「君が代は千代に
八千代にさゞれ石の」同「鹽の山さし出の磯になく千鳥君が御代をば八千代とぞなく」に據る。
○思するがの云々 戀「人しれぬ思を常にするがなる富士の山こそ」に據る。○あかずして云
々 離別「あかずして別るゝ涙瀧にそふ」に據る。○ふち衣おれる心 哀傷「藤衣はつるゝ糸は」
に據る。○やちくさ 八千種なり。○つくすと 盡くすとの意。○伊勢の海の浦の沙貝 ひろ
ひ集めの序。沙貝は、沙海の貝どもをいふ。○玉の緒の みじかきの枕詞。○みじかき心 才の
足らざる心の意。○思ひあへず わさまへがたきをいふ。○あら玉の 年の枕詞。○ひさかたの

(九〇九)

晝、よるの枕に用ゐたり。顯註に、日の出づるも暮るゝも、空を離れぬことの由にてよめりといへり。○しのお草 垣衣なり。○板間あらみ 板間疎みなり。板は、屋を葺きたる板なり。○もりやしぬらむ 雨の漏るに、よき歌のもるゝを寄す。

(評)千早振云々は、まづ、歌の來歴をいひ、あま彦の云々は春、さみだれの云々は夏、唐にしき云々は秋、神無月云々は冬と、四季を擧げて、時につけつゝ、云々の句にて一括し、君をのみ云々は賀、世の人の云々は悲、あかすして別るゝは、離別に羈旅をかね、ふち衣は哀傷、やちぐさの言の葉に物名、雜、雜體、大歌所の歌などをかね、すべらきの云々よりは、勅命を畏みて、撰著に従事し、つとめて、よき歌を網羅する積りなれど、われ等が短才にては、良否を思ひあへずして、洩れたるやあらむといひて、年を越えて、宮中の昭陽舎に詰め切りにて撰びたるが、春雨のふる頃にまで及べる由を含めたり。序に、延喜五年四月とあるは、最後の完成にて、脱稿のうへ、目錄をそへて奉れるは、その年の二三月の交なりけむ。

ふるうたにくはへてたてまつれるながうた 壬生忠岑
くれたけの、よしのふるること、なかりせば、伊香保のぬまの、
いかにして、おもふこゝろを、のばへまし、あはれむかしへ、
ありきてふ、人まるこそは、うれしけれ、身はしもながら、
ことのはを、あまつそらまで、きこえあげ、するの世までの、

あとなし、今もおほせの、くだれるは、ちりにつげとや、
ちりの身に、つもれることを、とはるらむ、これをおもへば、
いにしへも、くすりけがせる けだものの、雲にほえけむ

こゝちして、ちりのなさけも、おもほえず、ひとつこゝろぞ、
ほこらしき、かくはあれども、てるひかり、あかきまもりの
身なりしを、たれかは秋の、くるかたに、あざむきいでて、
みかきもり、とのへもる身の、みかきもり、をさくしくも、
おもほえず、こゝのかさねの、中にては、あらしの風も、
さかざりき、今は野山し、あかければ、春はかすみに、
たなびかれ、夏はうつせみ、なきくらし、あきはしぐれに、
袖をかし、冬は霜にぞ、せめらるゝ、かゝるわびしき、
身ながらに、つもれる年を、しるせれば、いつゝのむつに、
なりにけり、これにそはれる、わたくしの、老のかずさへ、

やよければ、身はいやしくて、年かたき、ことのくるしさ、かくしつゝ、ながらの橋の、ながらへて、難波のうらに、立つなみの、波のゑわにや、おほれむ、さすがにいのちをしければ、こしの國なる、あら山の、かしらは白く、なりぬとも、おとはの瀧の、おとに聞く、老いず死なずの、くすりもが、君が八千代を、若えつゝ見む、

君が代にあふ阪山のいはし水木がくれたりと思ひけるかな

(釋)ふる歌云々 これも、上のおなじ時にて、添へて奉れるなり。○くれ竹の 枕詞。○ふるこ と 古言なり。○伊香保の沼 上野國群馬郡、今の榛名湖それなるべし。こゝは、いかにしての枕詞。○のばへ 述べの延言。○むかしへ 昔方なり。いにしへと同じ。○人麻呂 柿本人麻呂、飛鳥藤原の宮の代の人にして、官五位に至らず。○まもながら 下官ながらの意。○あまつ空 大宮の内を譬ふ。○あと 例なり。○今もおほせの云々 いにしへ、人麻呂の歌を召しけるにっゞきて、今も、我が徒に、歌奉れの仰言の下れるは、かの人麻呂の例に繼げとやとなり。塵につぐは、文選に、「遙々播清塵、清塵竟誰嗣」とありて、古き迹をまなぶを、繼塵といふなり。但、人九の歌召しけること物に見えず。○塵の身 塵の如き身にて、軽きいやしき身なるをいふ。○つ

もれること 積れる言にて 塵の寄せなり。○いにしへも樂けがせる この二句、もとのになし。六帖、及び、忠岑集によりて補ひつ。神仙傳に、淮南王劉安が、仙藥を服して登仙せし事をいへるところに、「安、臨去時、餘藥器還在中庭、鷄犬舐啄之、盡得昇天、故鷄鳴天上、犬吠雲中」とあり。獸などの仙藥を舐めたるなれば、けがせるといへり。○ひとつ心ぞ云々 俗に一心にといふに似たり。こゝは、撰者の數に入りしを喜び誇らへるなり。○てるひかり 天子を譬へ奉る。○近きまもり 近衛なり。作者は、左近衛の番長なり。○秋のくる方に云々 秋のくる方は、西なり。作者、この時、左近衛の番長より、右衛門の府生に轉任したりき。而して、衛府の陣屋は、すべて、左は東、右は西なるより、東西の方位を以ていへり。さて、こは順任にして、左遷にはあらねど、大御身に近づき奉る近衛の職を去りたるを、不本意のやうにいひなして、あざむきいでて、といへり。○みかきもり云々 元來宮城の警衛は、その禁内を近衛、中郭を兵衛、外郭を衛門府とやうに分擔せり。されば、右衛門の府生たる作者は、外郭の御垣を守るを職とす。故に、このへもる身の御垣守といへり。とのへは外の重にて、外郭のこと。○をさししく 長々しにて、立優りたる意。○このがさね 九重なり。文選に、「君門多九重」とあるより、宮城、又は、禁内をいへり。○今は野山しちかければ 衛門は、外郭を守れば、野山近しいひ、さて、近衛に對へて、外衛のあしきをいひ並べたり。○霞にたなびかれ 心の晴れやらぬをいへり。○時雨に袖をかし 涙に濡るゝをいへり。○しるせば かき記したればなり。○いつのむつ 五六三十年に及べりとして、わが公務の勤勞を陳べたり。○やよれば やは彌なり、よは愈なり、數多き意

なり。佛足石の歌に「やよつ光を放ち」とあるも、これなり。○長柄のはしの ○難波のうらに
たつ浪の序なり。○波のまわにや云々 波の重り寄するを、面の皺に譬へたり。おほほれは潮れ
なり。即ち、皺だらけに老いくちなむの意。○まら山の○おとはの瀧の の文字、いつれも、の如
くにの意にて序なり。○薬もが もがは願望の助辭にて、不老不死の薬を欲しの意。○わかえ
若くなること。○君が代に云々 かく、古き事を興じ給ふ御代に逢はむとも知らず、逢坂山の石
清水の木隠れたる如く、人しれず沈める身と歎きしことを悔ゆなり。

(評)長歌には、まづ、御時にあへるを悦び、次には、身のわびしきをかこち、次には、君をいはひ、
終に、我命の長からむを願ひ、短歌には、いよ、御時にあへる悦をいひかへせり。貫之目
録歌よりは、やよ一ふしありて、優れるなれど、冗長に堪へず。また、貫之は、流石に、萬葉集
を知りたるものと見えて、五七調の流れで、ところへ七五となれりと覺しきを、これ、及び、
次なる二首は、却て、七五調が、五七に流れたるが如き觀あり。時代の風潮とはいひながら、い
づれにせよ、劃然たる體形をなへざる以上は、邯鄲に、歩を失ひし燕人の類なるべし。君が代
にの短歌は、長歌の反歌なり。反歌は、長歌の意を反復し、又は、いひ洩したるを歌ふものなり。
聞えあげは、家集、聞えあげて。いにしへには、一本、いにしへも。かくはあれのどもは、家集、
かくはほこれとあり。とのへもる身のみかきもりは、家集になし。身ながらには、一本、身な
がらも。しるせればは、家集、數ふれば、やよければは、一本、せめければ。ながらへては、家集、なが
らへば。浪のは、家集、老の。瀧のは、家集、山のとあり。

冬のながうた

ちはやぶる、かみな、月とや、けさよりは、くもりもあへず、
うらしぐれ、紅葉とともに、ふるさとの、よしのの山の、
山あらしも、寒く日ごとに、なりゆけば、玉の緒とけて、
こきちらし、あられみだれて、霜こほり、いやかたまれる、
庭の面に、むらく見ゆる、冬くさの、うへにふりしく、
あらゆきの、つもりく、あたらたまの、年をあまたも、
すぐしつるかな、

(釋)○ちはやぶる 枕詞。○神無月とや 神無月といふことにやの意。○紅葉とともにふる里の
時雨が、紅葉と共に零るといふに、古里をかく。吉野の古里なることは、冬、ふるさは吉野の
山し云々の評にいへるを見よ。

(評)平凡の二字、これを悉す。しかも、玉の緒とけてこきちらしとは、自他うち合はず。又、こ
きちらしたる如くと解かねば、その意通せざれど、それも無理にて、元來、詞の足らざるなり。
けさよりはは、家集、はつ時雨。うちしぐれば、六帖、初時雨。山あらしは、家集、山おろし。年をあ

またもは、家集、年をおほくもとあり。

七條の后うせ給ひけるのちによみける 伊 勢

おきつなみ、あれのみまさる、宮のうちは、年へてすみし、
いせの蟹も、船ながしたる、こゝちして、よらむかたなく、
かなしきに、なみだの色の、くれなるは、われらがなかの、
時雨にて、秋のもみぢと、ひとくは、おのがちりく、
わかれば、たのむかげなく、なりはてて、とまるものとは、
花すゝき、君なきにはに、むれたちて、空をまねかば、
はつかりの、なきわたりつゝ、よそにこそみめ、

(釋)七條后 藤原温子。宇多帝の中宮なり。前後の詞書に、寛平の御時后の宮の歌合の歌、とある。その後の宮の御事なり。延喜七年六月御年三十六にてかくれさせ給ふ。○おきつ波 沖の波にて、あれといはむ序。○年へてすみし 作者は、この后宮の女房として侍ひし人にて、さて、宇多帝の寵をも受けしなり。○いせのあま 伊勢の海の海人なり。わが名の伊勢を寄す。○よらむ 頼るに、寄るをよす。○かなしきに 悲しきによりての意。○われらがなか 宮のうちの女房達にかけていふ。○おのがちりぢり云々 一周の年月を経て、宮の中の人々も、御墓づかへするものも、

悉く退散するをいふ。○とまるものとは ものとてはの意、○はつかりの 初雁の如くにの意。
(評)草木こそ多けれ、薄をもて詞とするは、彼が、穂に出でて招くさまの、心ありげに見ゆるを思へるなり。しかも、哀傷にも、君がうゑし一村薄、など詠めるをもて思ふに、この頃、薄などを、前我に移して、秋の野らのさまをまねぶこと、専ら行はれたりしならむ。后の薨じ給ひし年の秋の頃、御忌はてて、宮の内の人々、あらけまからむ行末を思ひやりて、目前の景物を詩材として詠めるなり。故宮、人空うして、殘草、風雨に摧け、天邊、雁聲を聞かむ時、いかで、懷舊の情、斷腸の思に堪へざるべき。長歌五首のうち、これひとり見つべし。
たのむかげは、六帖、及び、家集に、たのむかたとあり。

旋頭歌

題を知らず

よみ人知らず

(九一八)

うちわたすをちかた人に物まをすわれ
そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも

(釋)旋頭歌 セドウカと讀む。六帖には、センドウカとかけり。漢字序には、旋頭、混本と並べ舉げられたれど、一つ物なり。混本、また、双本ともいふ。旋頭は、かみにめぐらす、混本は、本にまじふる、双本は、本にならぶるの意にて、本の句五七七に對するに、末句もまた、五七七を以て仕立てたる一體なり。そのはじめは、本末相互の問答を旨とせしこと、紀記に見えたるが如し。かくて、本にまれ、末にまれ、その五七七の一句をさして、片歌といへり。奈良時代に至りて、大に行はれたりしかども、猶、他の長短歌の盛なるには及ばざりき。しかも、あながち、問答體によらず、自在に、その詩想を發揮したりき。いかにせむ、五七につぐに、七字を以てしたれば、下の方、いよゝ重く、頭勝なる七五調時代となりては、その調、氷炭相容れざるものあり。况や、字句ともに少くして、融通出入の自在を缺けるをや。これ、平安朝において、やうやく、廢絶に近づきし所以なり。されば、後には、五七五とつらねたる、短歌の半截の如きものも現れたれど、畢竟異體なり。

〇うち渡す 此方より彼方へかくる意。されば、場處には、距離あるにいふ。宣長が、見渡すことなりといへど、古歌を案するに、その意差へり。〇をちかた人 遠方なる人。

一首の意は、かけ離れたる、はるか向ふの方の人に、私は、物を問ひませう、それ其處に、白く咲いてある花は、何の花でありますぞ、まあ、大層見事な花ですがとなり。

(評)詩形をそなへたる平語のみ。われ物申すとあるべきを、倒置したるは、その二音五音の組織、あまりに、緩調に流るゝを以て、促調として、その失をすくへるなり。

かへし

春されば野べにまづさく見れどあかね花
まひなしにたゞ名のるべき花の名なれや

(釋)〇まひ 禮物なり。されば、古來、幣の字を訓めり。まひなひといふもこれにて、賄賂をのみいふは、後の事なり。萬葉集六、「天にます月讀男幣はせむこよひの長さ五百夜繼ぎこそ」と、同九、霍公鳥の歌に「幣はせむ遠くなゆきそ」などの例を見て、推し知るべし。〇名のる 名告るなり。一首の意は、これは、春になれば、野邊に、まづ一番がけに咲く、見てもいゝ見飽かぬ花で、その名は、御禮の物なしに、つい云うてしまふやうな、輕々しい花の名であるか、いや、さうではござらぬとなり。

(評)談話を弄せる狂言面白し。この集における如き狹義の見解よりすれば、これも、俳諧の部のも

(九一九)

のなるべきを、體製につきて、姑く、こゝに収めけるならし。
だいたらず

はつせ川ふるかはのへにふた本ある杉
年をへてまたもあひ見むふた本ある杉

(釋)〇はつせ川 大和國式上郡を流る。〇ふるかはのへ 古川の邊なり。初瀬川は、古代よりいひはやされたる川なれば、古川といへり。よに、廢川を、古川といへるとは異なり。

一首の意は、初瀬川の古川のあたりにある二本杉、私は、あの、杉の年久しいやうに、年がたつて後、あの杉の並んで向ひ合うて居るやうに、またも、お目にかゝつて、對座致しませうとなり。

(評)諸註解き得ず。意釋の如く見るべし。稻掛太平が、上は、また、といはむ序なりとて、二本杉を、二股杉と同様に思へるは、いよゝ非なり。この二本杉は、そのわたりに着名なる物なりしより、譬喩に用ゐたるならむ。本の三句を、再び、末句において歌ひかへしたる、詠歎の味永し。その風調によりて想ふに、奈良時代の遺製なるべし。作者の大和人ならむことは、もとよりなり。末の結句、躬恒集に、おもがはりせでとあるは、この特色を抹殺したるものにして、神意索然たり。

つらゆき

君がさすみかさ山のもみぢばの色

神無月あぐれの雨のそめるなりけり

(釋)〇君がさすみ 御笠みかさといはむ序。〇みかさの山 御笠、又、三笠とかく。大和の春日の東方にある山。〇そめる 染みてあるの約。但、かく自動にいひては、上なるのの助辭に應せず。染むるの誤寫ならむ。

一首の意は、三笠山の紅葉の色、これは、大層見事であるが、何が染めたかと思へば、神無月の時雨の雨が染めたのであつたワイ、人間業ではないはサとなり。

(評)萬葉に、「君が着るみかさ」と續けたるは、冠り笠なり。これは、さすとあれば、唐傘、大傘の類ならむ。そはいづれにまれ、まぐれの雨をかけ合はせたること、

大君の三笠の山のもみぢ葉はけふの時雨にちりかすぎなむ(卷八)

と同巧なり。末の結句、助辭が、その大部分を占めたるは、輕くして、更に力なし。五七七の體を成す所以の調に背けり。

末の第二句、躬恒集に、時雨のあめにとあり。さらば、下のそめるなりけりに打合ふべけれど、時雨を主として、そむると、他動にいひたる方面白ければ、意釋は、その意にて解きなしつ。少しにても、証本ある方に従ふべき定めこそむけば、こゝに一言しつ。

誹諧歌

(九三二)

題あらず

よみ人あらず

梅のはな見にこそ來つれうぐひすの人く人くといとひしもをる

(釋)誹諧歌 史記の註に、「滑稽俳諧也」とありて、をかしたはれ言を、俳諧といふ。唐の杜甫の詩にも、俳諧體あり。こゝに、誹諧と書けるは、下の諧の字の偏によりて、上なる俳の字の偏もを言偏に作れるのみ。かゝる例、熟語には、よくあることなり。感ふべからず。

一首の意は、自分は、梅の花を愛して、見にサ來たのである、されば、梅に寝ぐらを占めて居る鶯は、喜ぶべき筈なるに、何故か、鶯が、人が來る人が來ると鳴いて、自分の近寄るのを厭つてサあゝ居るワイとなり。

(評)撰者等が、俳諧とせる標準は、きはめて曖昧にして、今より推するに、殆ど困難なり。同じ構想、同じ叙述のものにても、一は本歌に入り、一は俳諧に入り、人をして、その定見なきかを疑はしむるものあり。想ふに、詩學上の智識乏しきが爲に、確たる認識なくして、時代の思潮に眩惑せられたる結果ならむと信ず。されど、この部中なるは、流石に、多少、滑稽の狂味なきはあらず。

素性法師

山ぶきの花色ごろもぬしやたれ問へど答へずくちなしにし

(釋)○山吹の花色ごろも 山吹の花は黄色なり。その色したる衣をいふ。○くちなし 口無しに、梔子をよす、梔子は、その實の外殻、口を開くことなきが故に、この名あり。黄色の染料とす。一首の意は、この山吹の花の衣は、主は誰であらうか、いか程問へども、更に、返事せぬワイ、を、それもその筈、山吹は、口の無いといふ梔子色であるによつてサとなり。

藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくれればか時鳥あでの田長を朝なくよぶ

(釋)○あでの田長 催馬樂に、「雨やどり、笠やどり、宿りてまからむ、あで田長」とあり。田長は、田をつかさどる人にて、即ち、農夫なり。時鳥の鳴くは、梅雨頃を盛として、農時に際したれば、その聲を、賤田長と聞きなし、轉りては、あで田長といへるならむ。そのあでの音に就きて、死出の山を越えたる冥土に、時鳥のあるやうに、僞經十王經に作れるより、死出田長の意にも取做して、詠みもせしなり。十王經のことは、哀傷「なき人の宿に通はば時鳥云々」の條にいへり。さて、今は、姑く、調につきて、しでの、の文字を入れたり。一首の意は、どれ程の田を作るのであればか、時鳥は、あのやうに、いそがしさうに、賤の田長を、毎朝毎朝呼ぶことぞとなり。

(九三三)

七月六日たなばたの心をよみける 藤原かねすけ

(九二四)

いつしかとまたく心をはぎにあげて天の川原をけふや渡らむ

(釋) たなばたの心を たなばたは、牽牛星に對して、棚機といへるにあらず。ひろく、二星にかけていひたるなり。歌は、牽牛星の心をよめり。○またく、待つつのつの延言。○はぎにあげて、宣長いふ、人に、物を、かくと顯し見することを、古の語に、脛に擧ぐ、といふことのありしなるべし。土佐日記なるも、その意なり、といへり。土佐日記に、はやのつまのいすし鮪鮑をぞ、心にもあらぬ脛にあげて見せけるとあり。

一首の意は、今日は六日なれば、逢ふ日は明日なれども、いつか／＼と待ちかぬる心を見せて、高股立を取つて、今日渡らうかとなり。

題あらず

丸河内躬恒

むつ言もまだつきなくにあげぬめりいづらは秋の長してふ夜

(釋) ○むつ言、睦び言にて、男女の情語をいふ。

一首の意は、睦言も、まだ深山あるのに、はや、この秋の夜があげた様子だワイ、一體、どこにあるぞ、よく、人のいふ秋の長いといふ夜はサとなり。

あきの野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時

(釋) 一首の意は、秋の野に、嬌態をして立つて居る女郎花、これを、世の人は、大層にいひはやすが、あゝ喧しいワイ、その花も、ほんの一盛のわづかの間のもので、といふが表面の意にて、あそこ、美しい女が居る／＼といひはやすが、あゝ喧しいワイ、何の、美人の色も、ほんの一時の間のもので、といふのが裏面の意なり。

(評) 諸註、女郎花の喧しかるやうに解きなしたるは、理り聞えず、詞の上にも見えぬことなり。諷意は、朝には紅顔、夕には白骨の無常を説きて、好色家を警醒したるなり。

四句、一本、あなことごとしとあり。

よみ人あらず

秋くれば野べにたはるゝ女郎花いづれの人かつまで見るべき

(釋) ○つまで、摘までに、抓までをよす。

一首の意は、秋になれば、野邊に色めいて居る女郎花を來て見る人は、どの人でも、つますに見ようか、いや、皆摘んで見るワイ、丁度、花の名によぶ女のじやらくらしたのは、誰も、一寸、

(九二五)

手を出して、つかつて見るやうにすとなり。
結句、一本、つてに見るべきとある、わろし。

○ 秋霧のはれてくもればをみなへし花の姿ぞ見えかくれする

(釋)一首の意は、霧が晴れたり曇つたりすると、女郎花の花の姿、見えたり隠れたりするワイとなり。

○ 花と見て折らむとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ

一首の意は、つい一とほりの花と想うて折らうとすれば、女郎花の女といふ名は、生憎な譯合のある名でサあつたワイ、女には、どうも、手がさしにくいワイとなり。

(評)作者は法師なるべし。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌 在原むねやな

秋風にはころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりくす鳴く

(釋)つゞりさせ 綴り刺せなり。今も、フキハカの聲を、「肩させ裾させ」と聞きなすなり。

一首の意は、藤袴が、秋風で、大分綻びたらしいワイ、その証候には、その綻をつゞりさせといふ聲が鳴くワイとなり。

二句、一本、綻びぬらしとあり。

あす、春立たむとしける日、隣の家の方より、風の雪をふき

こしけるを見て、その隣へ、よみてつかはしける。

きよはらの深やぶ

冬ながら春のとなりのちかければ中垣よりぞ花はちりける

(釋)一首の意は、まだ冬なれど、もう明日、春が立つ今日で、春の近隣であるによつて、冬と春との界

目の中垣からサ、その春の花が散つて来たワイとなり。

(評)わが宿を卑下して冬、隣家を春に喩へたるより、隣家の雪をも、花に見立てたるなり。

結句、六帖に、花ぞ咲きけるとあり。又、拾遺集戀四に再出したり。

題あらず

よみ人あらず

石の上ふりにし戀の神さびてたゝるにわれはいぞ寝かねつる

(釋)○石の上 舊りといはむ枕詞。○たゝる 崇るなり。

一首の意は、あまりに、年久しうなつたる自分の戀は、性が入つて、崇りをする爲に、自分は、

夜も寝ることがサ、えう出来ぬワイとなり。

(評)すべて、年奮りたる物の化けて、怪を爲すといふことは、太古よりの迷信なりけらし。久しき戀に、心の焦られて、いよ／＼安寝もせざるを、戀の祟りといひなせるは、面白き滑稽なり。

結句、一本、いねぞかねつるとあり。又、拾遺集戀四に再出したるには、ねぎぞかねつるとあり。

○

枕よりあとより戀のせめくれればせむかたなみぞ床なかにをる

(釋)○枕よりあとより 神代紀に、頭邊脚邊とあり。○なみ 無さになり。

一首の意は、夜寝て居ると、枕の方からも、脚の方からも、戀といふ奴めが、まきりに攻め立てくる故に、仕様がなさにサ、床の真中にうづくまつて、ちつと起きて居るソイとなり。

戀しきがかたもかたこそありと聞け立てれをれどもなき心ちする

(釋)○かたもかたこそ 舊註に、兩説あり。いかに戀すとして、心の方角は方角にて、あるものと聞くといふ説と、いかに戀すとして、その人の形は形にてあるものと聞くといふ説となり。姑く、下句とのかけ合と、狂味の如何と思ひて、後説に従ひつ。○立てれ居れども 立てれども、居れどもなり。

一首の意は、どのやうに、戀をする人でも、形は寝れ細りながらもサ、あるものと聞くワイ、それ

に、自分は、戀に、心が空になつて、立つて居ても、すわつて居ても、この身體の形が、どうやら無い心持がするとなり。

○

ありぬやと心見がてらあひみねばたはぶれにくきまでぞ戀し

き

(釋)○ありぬや 逢はでもありぬやといふを略けるなり。

一首の意は、思ふ人に逢はずにも居逢げらるゝものかと、ためしがてらに、逢はずに居れば、もう／＼、さやうの冗談事もして居られぬ程にサ、戀しいワイとなり。

○

耳無の山のくちなし得てしがなおもひの色の下ぞめにせむ

(釋)○耳無の山 大和志に、「大和國在十市郡木原村上方、四面田野、孤峰森然、山中樞樹多矣、因又呼三樞子山」とあり。○おもひ 思に、緋をよす。

一首の意は、あゝ、耳無山の樞子が得たいものであるワイ、それがあらば、世間のきこえを忍ぶ戀の思の緋色の下染にせうワイ、さすれば、耳なしなれば人が聞かず、口なしなれば人がいはず、思を忍ぶには、好都合であるによつてサとなり。

足引の山田のそぼつおのれさへ我をほしいといふ憂はしきこと

(釋)〇そぼつ 案山子なり。古言そぼつ。〇おのれ ことは、二人稱に用ゐたれば、罵れる語なり。一首の意は、山田の案山子を見るやうなる汝さへ、自分を望んで逢ひたいといふ、さても、厄介なことやとなり。

(評)萬葉集十一なる、左の歌の儻なり。

山城の久世のわく子がほしといふ我を、あふさわに我をほしといふ山城の久世。

きのめのと

富士のねのならぬおもひに燃えば燃え神だに消たぬ空し煙を

(釋)〇ならぬ 成就せぬなり。〇おもひ 思に、火をかく、〇燃えば燃え 下の燃えは、命介格なり、〇神だに 富士の神は、木花開耶姫命なり。富士の煙のことは、既に、序文の中に釋せり。

一首の意は、富士の山が、出来ぬ戀の思の火で燃ゆるやうに、自分の、出来ぬ戀の思の火も、燃ゆるなら燃えよサ、富士の山の神様でさへも、昔から、思の火から立つ、益にも立たぬ煙を、お消しなさらぬものをサとなり。

(評)後撰集戀二に、平貞文、

われのみやもえて消えなむ夜と共におもひもならぬ富士のねのごと

紀のめのとのかへし、

富士の根のもえ渡るともいかにせむけちこそしらね水ならぬ身は

とあると、同時の返歌か。撰者は、神だに消たぬを、俳意と見たるならむも、かやうの空想は、詩歌の要素なり。

きのありとも

あひ見まくほしは數なくありながら人につきなみ惑ひこそすれ

(釋)〇ほしは 欲しに、星を寄す。〇つきなみ 手著がなさにの意、手著は便宜なり。月を寄す。

一首の意は、星があつても、月のない晩は、道を惑ふやうに、逢うてほしい思は、數限もなくありながらも、その人に逢ふ便宜がなさに、心もかきくれて、惑ふことでサあるワイとなり。

小野小町

人にあはむつきのなきには思ひおきて胸はしり火に心やけをり

(釋)〇つき 便宜に、月をよす。〇思ひおきて 思ひ起きに、熾を寄す。熾は、盛におこりたる火。

〇胸はしり火 胸の走るに、走火をかく。胸の走るは、心の騒ぐこと、走火は、火の、外へ刎ね

(九三二)

飛ぶをいふ。○第二句、一本、なきよはとあるよろし。には、よの誤寫なり。
一首の意は、思ふ人に逢はう便宜の無い夜は、そのことを思ひながら起きて、火の走るやうに、胸
が走つて、心が焦れて居るワイとなり。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

藤原おきかぜ

春霞たなびく野への若菜にもなり見てしがな人もつむやと

(釋)○つむや 摘むに、抓むを寄す。

一首の意は、春霞の立つ野への若菜にもなつて見たいものであるワイ、自分のやうなる者でも、も
しや、若菜の摘まるやうに、思ふ人に抓めらるゝか、どうかと思へばサとなり。

二句、新撰萬葉には、たちいづる野への、四句、一本、なりもしてしがとあり。

題あらさず

よみ人あらさず

思へどもなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじと思へば

(釋)一首の意は、自分は、かの人を、随分思うては居れども、やはり頼みがたうて、疎ましい心持
がするワイ、その故は、丁度、春の霞の、この山へも、かしこの山へもかゝらぬ所はあるまい
やうに、かの人、氣が多くて、かゝりあるかぬ所はあるまいと思ふによつてサとなり。

(評)著想は、左の歌どもと相同じきに、これのみ俳諧なるはいぶかし。

時鳥がなく里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから(夏)
かつ見れどうともあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば(雜上)

たゞし、人にかゝつらふを、かゝるといふは、當時の俗語、或は鄙語なるより、雅馴なる春霞かゝら
ぬ山の取做し、却りて、滑稽に聞えしならむか。

平貞文

春の野のえびき草葉の妻ごひにとびたつ雉のほろゝとぞ鳴く

(釋)○しげき草葉の妻戀に 草葉のしげき妻戀にといふべきを、調につきて倒装したり。春上「若
草の妻もこもれり」の續きとは同じからず。○ほろゝ ほろうつなどもいひて、雉の羽音なり。
涙のおつる形容のほろゝをかけたなり。

一首の意は、自分は、春の野の草葉のやうに、妻を戀ふる思がしげきによつて、その春の野に、妻
戀して飛び立つ雉子の羽音の、ほろゝといふやうに、ほろほろと泣くワイとなり。

(評)ほろゝの口合が俳諧なり。それを心付かすして、雉子のほろゝと鳴くと思ひて、後の歌どもに
も詠めるは誤なり。

きのよしひと

あきの野に妻なき鹿の年をへてなぞわが戀のかひよとぞなく

(釋)○かひよ 鹿の鳴聲なり。甲斐よをかく。○なぞこの語にて、句を切りて見るべし。

(九三三)

一首の意は、秋の野で、妻のない鹿が、何年も何年も、あのやうに、かひよくと鳴くが、何の妻戀の甲斐があるぞ、鹿の料簡がわからぬワイとなり。

〔評〕六帖に、伊勢、

秋山に妻なき鹿の年をへてなぞやいきてのかひよとぞなく

いきてのといへるに、年をへての句いたづらならず。初句も、山の方、なほよろしきか。

五句、一本に、かひよとはとあり。

み つ ね

蟬の羽のひとへに薄き夏ごろもなればよりなむ物にやはあら

ぬ

〔釋〕○ひとへ、一重に、偏にをかく。○なればよりなむ 馴れば糺りなむにて、着馴らせば姿えはみて、敏づくをいふ。

一首の意は、自分の思ふ人は、蟬の羽の衣のやうに、一向に薄い心なれど、こちらから、實を盡して馴れたらば、着馴らすと、夏衣の糺るゝやうに、ゆくゝは、自分に思ひ寄つてきさうな物ではないか。寄つて來ぬことは、ありさうもないものに思はるゝワイとなり。

た り み ね

隠沼のまたよりおふる根沼繩の寝ぬ名はたゞじくるないとひ

そ

〔釋〕○隠沼カクレヌマのしたよりおふる根沼繩ネヌマヅナの 譬喩をかねたる序なり。根沼繩は、葦葉をいふ。○くる來るに、繰るをよす。繰るは、繩の縁語なり。

一首の意は、私が、このやうに通うて來ても、貴方がつれなくて、一所に寝てくれる故、根葦の名のやうに、寝ぬ名は立ちはすまいと思ふ、それ故、草隱の沼の底から生ゆる根葦のやうに、随分忍んで、私のくることばかりは、厭つて下さるなとなり。

よみ人ゑららず

ことならば思はずとやはいひはてぬなぞ世の中の玉禪なる

〔釋〕○ことならば 春下「ことならば咲かずやはあらぬ」の條を見よ。○玉禪 玉は美稱、禪は掛くる物なれば、どちらつかずに引きかゝれる意の隠語に用ゐたり。

一首の意は、このやうに、逢うてくれぬとならば、いつそ、何とも思はぬといひ切つてしまへばよい、なせに、二人の中が、どちらつかずに引掛つて、玉禪であることぞとなり。

〔評〕後にも、「大幣にして」と詠める隠語を、俳諧の意とせり。

○ 思ふてふ人の心のくまごとにたち隠れつゝ見るよしもがな

〔釋〕一首の意は、自分を思ふと、口でいふ人の心の隅々へ、そつと這入つて、隠れくして、實か

嘘かを見届くる手だてが、あつてほしいツイとなり。

思へども思はずとのみいふなればいなや思はじ思ふかひなし

(釋)○いなや 否やなり。

一首の意は、これほど、眞實に思ふけれど、それを、かの人は疑うて、思うて居らぬとばかりいふのであるから、いや〜、これから、もう思ふまいぞ、とても、思ふかひがないツイとなり。四句六帖に、今は思はじとあり。

われをのみおもふといはばあるべきをいでや心は大幣にして

(釋)○大幣ホホにして 大幣は、戀四「大幣のひく手あまたになりぬれば」の條に釋けり。こゝは、ひく手あまたの隠語に用ゐたり。

一首の意は、かの人が、思ふ〜といふのも、自分ばかりを思ふのならば、それでよからうが、いやもう、かの人の心は、あちらへもこちらへも靡く、引手あまたの大幣であつて、一向、あてにならぬツイとなり。

われを思ふ人を思はぬむくいにやわが思ふ人のわれを思はぬ

一首の意は、自分を思うてくる人々を、思うてやらぬ報かして、自分が戀しう思ふ人が、自分を思うてくれぬツイとなり。

(評)眞淵は、俳諧にあらずといへり。されど、詞は、思ふの語を、故意に變用し、意は、思はぬ報をいへる、これら俳諧なるべし。次なる歌も、むくいをいへり。

〔一本ふかやぶ〕

思ひけむ人をぞともに思はましまさしや報なかりけりやは

(釋)○まさしや 正しやなり。

一首の意は、あの、自分を思うてくれたであらう人をサ、こちらにも思はうことであつたツイ、あゝ争はれぬもの、報といふものが無かつたことか、いや、靨面にあつて、今、自分の思ふ人が、自分を思うてくれぬツイとなり。

〔一本よみ人しらず〕

出でゆかむ人をとどめむよしなきに隣のかたに鼻もひぬかな

(釋)○鼻もひぬ 鼻をひるとは、嘘ウソをすること。

一首の意は、今、こちらから出でゆかうとする人を留めう手だてがないによつて、人が嘘をすれば、